第4章　まとめ

1　岩鼻岩陰遺跡出土縄文土器について

1

木遺跡では、縄文時代前期から弥生時代早期の土器が出土した。これらはⅡ0層、Ⅱ1層、Ⅱ2層、Ⅱ3層、Ⅱ4層から層位的に出土するが、後期初から前半については削平や攪乱のため良好な包含層が残存せず、河川堆積層（Ⅳ層）や他の時期の包含層に混在するかたちで出土している。ここでは、出土土器の編年的位置づけを検討し、岩陰の利用された時期を明らかにする（第162～164図）。

2

(1)　前期

量的に少なく散発的な出土状況であるが、5区と7区から完形ないしは全体の器形が分かる程に復元できる資料が出土している。

前期1類（333）は二枚貝条痕を地文とし、外面口縁下に刺突文が3段にわたりに施されるもので、復元口径20cmの小型品である。

前期2類（334）は、内外面に条痕が施されるのみである。334は口径25.8cmと比較的小型である。333と同じ5区のⅡ4層から出土しているが、334の方が333よりも明らかに上層に位置する。

前期3類（453）は6区のⅡ4層から出土したもので、外面に綾杉文状の文様が浅い沈線により描かれる。

以上のうち、口縁下に刺突文を有する前期1類は、東北九州を中心に分布するもので、県下では国東市羽田遺跡（宮内克己編　1990）、杵築市エゴノクチ遺跡（高橋信武編　1993）、大分市横尾貝塚（高橋信武編　2012）などで出土している。羽田遺跡のものは、波状口縁を呈し、口径40cm前後の大型品もある。また、刺突文に加えて、波頂部下に浮文や隆帯を付す例もあるなど、333とはやや異なる様相を呈する。宮内克己はこれらを、瀬戸内の羽島下層Ⅱ式の影響を受けたもので、羽田遺跡で多く出土する轟B式に伴うとした（宮内克己　1990）。しかし、宮本一夫は同様な刺突文をもつものを、磯の森式から彦崎Ｚ１式にかけて併行するという見解を示した（宮本一夫　1993）。また、山崎真治は口縁部の刺突文は曽畑式前半期で盛行する要素であるとし、曽畑式との係りを示唆するとともに宮本と同様な編年的位置づけを行っている（山崎真治　2013）。前期2類の位置づけは明確ではないが、前期1類の333よりも上層から出土することから、時期的には後出すると思われる。前期3類は小破片のため明確ではないが、轟式の最終段階である野口・阿多タイプとの関連が考えられる。

(2)　中期

Ⅱ3層では、1区から2区を中心とした中期集中部①、3区から4区を中心とした中期集中部②を確認した。これらを中心に出土した中期の土器は、以下のように分類できる。

中期1類（172）は口縁部内面が帯状に肥厚するもので、肥厚部には縄文が施される。外面は全体に縄文がみられ、口縁部下に2条の沈線が施文される。口縁端部は、比較的浅い刻みが連続して施される。器形的には、キャリパー状を呈するものと思われる。

中期2類（20、42）は内面が無文で、外面に刻みを有する突帯を付すものである。外面口縁下に断面三角形あるいは低い突帯を付し、突帯と口縁端部に刻みを加える。

中期3類（18、19、44）は縄文地の外面に、断面三角形の素突帯が直線的に横方向に付される。口縁部内面の文様の有無などによりa、b、cに分けられる。3a類（44）は口縁内面に縄文が施される。3b類（18）は内面無文で、頸部屈曲部の内面は稜をもたず緩やかである。3c類（19）は口縁下に断面三角形の突帯を2条付す。突帯の上方に連続して貝圧文を施す。

中期4類（327）は頸部に屈曲部をもたず、外面には縄文地に弧状の素突帯を付す。

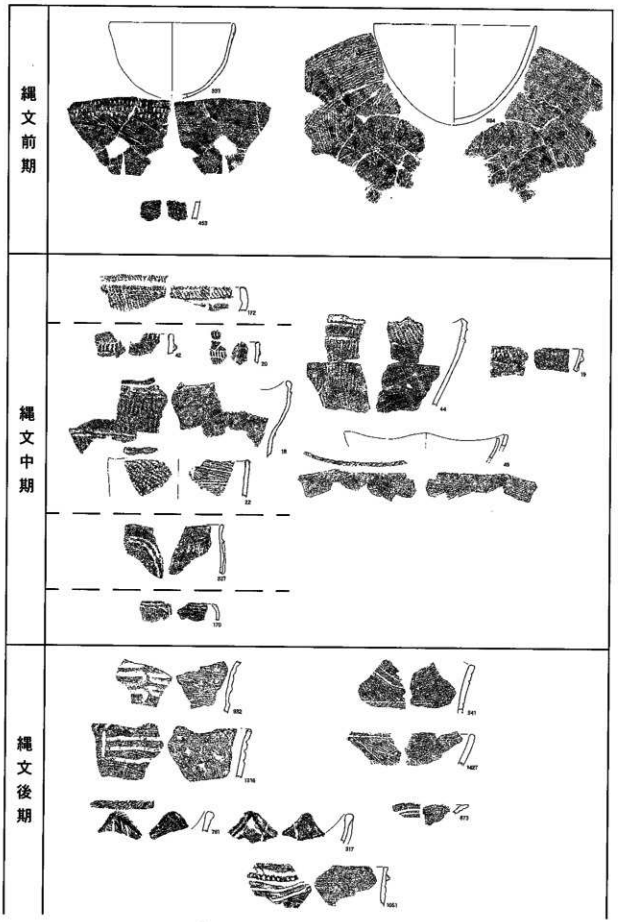
中期5類（22、49）は外面が縄文のみで、内面は条痕が施される。頸部に屈曲部をもたないもの、頸部からくの字状に折れるものがある。

中期6類（170）はキャリパー状の器形を呈するものと思われる。口縁部外面には撚糸文地に沈線が施され、内面は無文である。

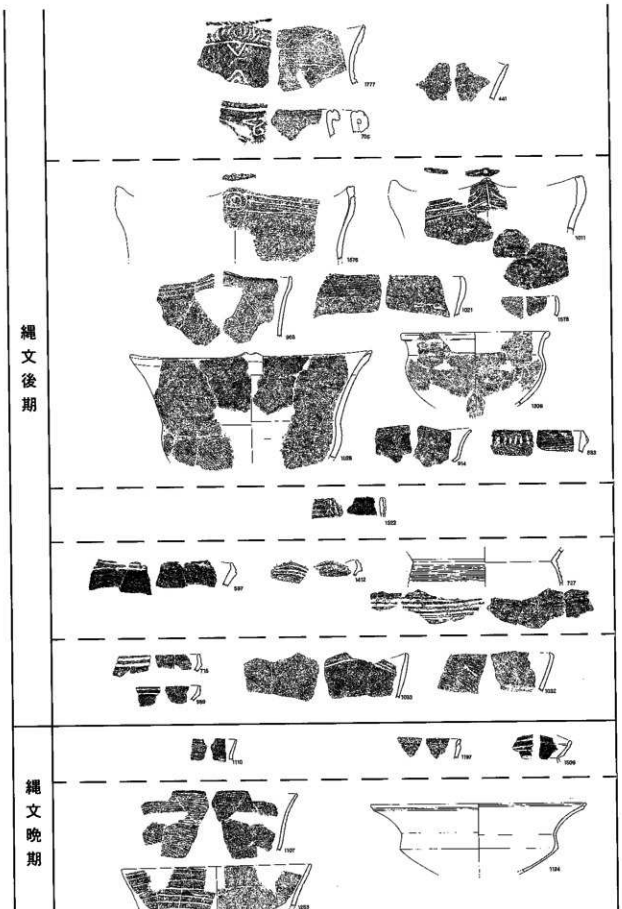
以上のうち、中期1類は、間壁忠彦・間壁葭子による分類（間壁忠彦・間壁葭子　1971）の船元ＩＣ類にあたる。鷹島式にみられる特徴である口縁部内面の段状肥厚が残るもので、近年、船元式などを再整理した泉拓良の船元Ｉ式（泉拓良　2008）に比定できる。中期2類は間壁忠彦・間壁葭子分類の船元ⅡＡ類にあたるもので、口縁内面の文様消失から泉拓良の船元Ⅱ式に相当するものと思われる。中期3類は外面に断面三角形の素突帯を付すことが特徴である。3a類は口縁内面に縄文が施文されていることから、3b類に比べ古い要素を残すものである。3b類はキャリパー状を呈する頸部が、鋭く稜をもって屈折せず、緩やかに屈曲することから泉拓良の船元Ⅱ式に相当する。3c類は素突帯の感じが3a類、3b類とやや異なり、貝圧文を加えるなどの違いがある。しかし、内面無文という特徴から、3b類に併行すると考えられる。3a類も器形的には3b類と同様の特徴を有すると思われるので、内面文様に古い傾向を残すものの、3b類と併行するものとして捉えられよう。中期4類も素突帯を付すが、弧状を呈し、縦方向に付されるなど、中期3類とは趣を大きく異にする。器形的にも、頸部から口縁にかけての屈曲がみられないなどの違いがある。これは、間壁忠彦・間壁葭子分類の船元ⅡＣ類に近似するもので、泉拓良の船元Ⅱ式にあたると考えられる。器形的な点から、中期3類よりは後出する可能性を有する。中期5類は内面に条痕調整が残る点に、他と大きな違いがみられる。間壁忠彦・間壁葭子分類にも類例がみられないことから、在地色の強いものであるかもしれない。口縁内面文様の消失、屈曲のない器形の存在などから泉拓良の船元Ⅱ式に相当すると考える。中期7類は地文に撚糸文を施すという点で、1類から6類までとは大きく異なる。間壁忠彦・間壁葭子や泉拓良によれば、地文に撚糸文が出現するのは、基本的に里木Ⅱ式以降である。このことから、中期7類は他に比べ後出すると考えられる。よって、中期の土器は中期1類の船元1式、中期2～6類の船元Ⅱ式、中期7類の里木Ⅱ式に分けられる。中期集中部①と中期集中部②からは、中期2、3、5、6類が出土しており、船元Ⅱ式の段階に形成されたものであることが分かる。中期4類は中期集中部とは地点を異にしており、同じ船元Ⅱ式でも集中部形成より後出するものである。また、船元Ｉ式と里木Ⅱ式の段階の遺物は少量である。

(3)　後期

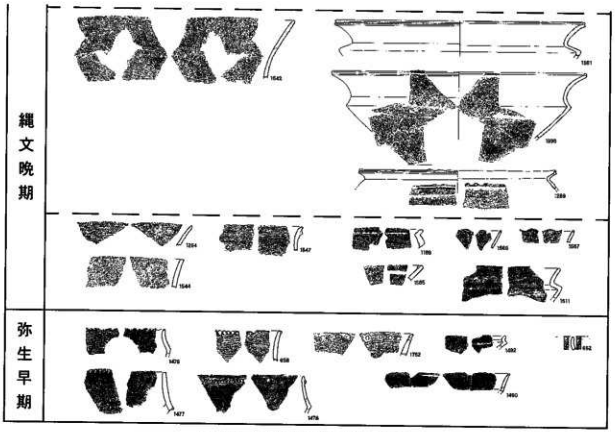
後期初頭から前葉にかけては、良好な包含層が残存しない。岩陰の南半分が河道域であることから、利用可能な北半部に本来は包含層が形成されていたと想定される。しかし、削平のため包含層の大半は失われている。断片的な資料となるが、この段階に位置づけられる土器を紹介する。932、1316は西和田式で、二枚貝条痕地に凹線が施される。中期の阿高式の系譜を引くもので、東北九州に分布する。中津式と伴出することから、後期初頭に比定されている。541、1427は中津式である。いずれも外面に磨消縄文がみられ、541は波状口縁を呈する。873は、中津式に後続する福田KⅡ式と思われる。317、761はコウゴー松式である。磨消縄文が九州地域に伝播するなか、阿高系土器に後続するかたちで東北九州にみられる地域色の強い土器である。1051は大分市の小池原貝塚下層出土資料に類似のものがみられ（賀川光夫編　1967）、かつては小池原下層式と称されたこともある（乙益重隆・前川威洋　1969）。しかし、所謂小池原上層式直前の土器様相は、未だ整理しきれていないのが現状である。近年、水ノ江和同はこの状況を踏まえ、この段階の土器群を小池原下層式(仮称)として再整理し、古相と新相に分けている（水ノ江和同　2010）。1777は小池原上層式とされたもの（乙益重隆・前川威洋　1969）である。田中良之・松永幸男は、小池原上層式及び鐘崎式とされた土器群を再整理し鐘崎Ｉ～Ⅲ式として再定義した（田中良之　1982、田中良之・松永幸男　1983）。本資料は、鐘崎Ｉ式に比定できる。705は鐘崎Ⅲ式か。441は御手洗A式とされるものと考えられる。実態は必ずしも明らかではないが、後期前葉に位置づけられる。以上のように、後期初頭から鐘崎式の間については、ほぼ途切れることなく土器を確認することができる。岩陰の具体的な利用実態は不明であるが、後期になり利用が再開され継続的に使用されたことがうかがえる。



第162図　岩鼻岩陰遺跡出土土器編年表(1)



第163図　岩鼻岩陰遺跡出土土器編年表(2)



第164図　岩鼻岩陰遺跡出土土器編年表(3)

後期の良好な包含層であるⅡ2層では、後期集中部①、後期集中部②、後期集中部③、後期集中部④を確認した。これら後期集中部出土土器は以下のように分類できる。

後期1類（903、1011、1576）は、口縁部が緩やかに内湾し、波頂部を有する深鉢である。

口縁部外面はやや肥厚し文様帯を形成する。長くのびる頸部は無文である。文様は903が沈線文と縄文で、他は沈線文と疑似縄文である。口縁部の波頂部直下には文様が集約し、溝文が配される場合もある（1576）が、縦位の隆帯を貼り付けるものはない。ただ、試掘調査のトレンチ1から隆帯を付した口縁部が1点のみ出土（1522）している。

後期2類（1021、1578）は、1類と同様な器形を呈する深鉢である。口縁部外面の文様帯は、縄文あるいは疑似縄文のみが施される。

後期3類（1028、1306）は、口縁端部外面と体部下半部に、縄文または疑似縄文を施す深鉢である。体部上半の頸部は無文である。

後期4類（914）は、3類と同様な文様の配置であるが、器高の低い浅鉢形態をなす。

後期5類（883）は、口縁部外面を断面三角形に肥厚させ、肥厚部にヘラ状工具で刻みを施す。

筆者は鐘崎式に後続する東北九州の土器群である石町式を、古相と新相に分けて整理した（後藤一重　2014）。それに従えば、後期1類～4類は石町式古相に比定でき、後期土器集中部①～④のなかで顕著な差は読み取れない。同様な時期の資料は、本岩陰の下流に位置する三六田遺跡の竪穴建物跡から出土している（河野典之他編　2002）。三六田遺跡出土土器と比べると、1類と2類の口縁部の内湾度合いが緩やかになる、1類の口縁部文様帯が肥厚し幅がやや狭くなる等の違いがみられる。このことから、本岩陰出土資料は古相のなかでも新相的傾向が強い一群と考えられ、三六田遺跡出土資料よりは後出すると考えられる。また、新相の器形的特徴である口縁部波頂部下に縦位の隆帯を付すもの（1522）が1点だけみられる。しかし、古相段階とは異なり、量的に少なく有意なまとまりを確認することができない。後期5類は、石町式と並行する北久根山式である。北久根山式は西北九州に分

布するもので、類似の資料が熊本市の北久根山遺跡でも出土している（富田紘一　1996）。本岩陰出土資料は、西北九州から搬入された可能性がある。

石町式に後続する時期の土器として、西平式（597、727、1412）、三万田式（715、989、1032、1033）を確認することができる。石町式新相段階と同様に、量的に少なく、有意なまとまりも認められなかった。

(4) 晩期

12区から17区のⅡ1層から、特に多くの遺物が出土した。いくつかの集中部分が重複あるいは連続しているものと思われるが、晩期集中部①とした。集中部から出土した土器は、以下のように分類できる。

晩期1類（1110、1107、1253、1542、1264、1544）は、口縁部外面に沈線が施される深鉢である。沈線の数、施文具、施文状況によりa～dに分けられる。1a類（1110）は4条前後の横走沈線が施される。1b類（1107、1253）は間隔のあいた横走沈線が8条前後施される。1c類（1542）は細い施文具を用いた細沈線が、1b類よりもさらに条数を増して施される。時として斜走あるいは縦走する沈線も加わる。1d類（1264、1544）は斜走あるいは縦走する細沈線が主となる。

晩期2類（1197）は、口縁下に粘土紐接合時に生ずる段を意識的に残した深鉢である。

晩期3類（1547）は深鉢で、外面口縁下に断面三角形の無刻目突帯を付す。

晩期4類（1124、1398、1511、1561、1566、1567）は浅鉢で、胴部に稜をもち、頸部が外反しながら口縁部にいたるものである。口縁部形態によりa～cに分けられる。4a類（1124）は口縁部の立ち上がりが高いもの。4b類（1398、1561）は口縁立ち上がり部の低平化がみられるもので、時としてリボン状突起を付すものもみられる。4c類（1511、1566、1567）は口縁部の立ち上がりがみられないもので、口縁部にリボン状突起を付す場合がある。

晩期5類（1506）は波状口縁を呈する浅鉢で、頸部から外方に折れ肥厚する口縁帯に続く。口縁帯に沈線を施し、口縁内面に段を有する。

晩期6類（1189）は浅鉢で、口縁が短く折れるものである。

晩期7類（1289）は浅鉢で、くの字状に折れた頸部から口縁部が立ち上がる。口縁部には低いリボン状突起が付く。

晩期8類（1565）は口縁部内面が肥厚する浅鉢である。

以上のうち、量的に主体を占めるのは、晩期1b類、晩期1c類、晩期4a類、晩期4b類などである。東九州沿岸部における晩期土器の編年については、晩期初めから無刻目突帯文の段階までをⅠ～Ⅴ期に分けて整理している（後藤一重　1995）。これに従えば、本岩陰の主体を占める一群はⅢ、Ⅳ期にあたる。同様な資料は、姫島村用作遺跡からまとまって出土している（坂本嘉弘編　1991）。Ⅱ期の坂口式にあたるのは、晩期1a類、晩期2類、晩期4a類、晩期5類などで極めて少数である。Ⅲ期は晩期1b類、晩期4a類、晩期4b類などからなる。深鉢の晩期1b類は、晩期1a類から型式変化したもので、口縁文様帯の拡張が著しい。これに伴い外面の横走沈線の多条化、細線化がみられる。深鉢のうち晩期2類は西瀬戸内の系譜を引くもので、Ⅱ期の坂口式では他の瀬戸内系無文深鉢と併せて一定量を占めており、全体としては在地系である晩期1類の深鉢に占める割合は小さかった。瀬戸内系深鉢は、Ⅲ期以降急速に減じる方向で推移するものと考えられていたが、Ⅲ・Ⅳ期が主体の本岩陰では晩期2類をはじめとする瀬戸内系の深鉢がほとんどみられず、在地系の晩期1類が多くを占める。Ⅱ期以前の深鉢組成から大きく転換することを確認することができた。浅鉢についても、坂口式段階では晩期5類が一定量を占めた。しかし、本岩陰では晩期5類及びその系譜を引くものは極めて少ない。代わって浅鉢の主体となるのは、晩期4類である。深鉢と同じように浅鉢においても、坂口式とは器種の組成が大きく変化している。Ⅲ期の浅鉢は、晩期4a類、晩期4b類がみられる。晩期4a類は坂口式に比べ、口縁立ち上がり部にシャープさがなくなる。加えて、口縁立ち上がり部の低平化のはじまった晩期4b類が出現する。続くⅣ期は無刻目突帯文出現直前の段階で、晩期1c類、晩期4b類が中心で、晩期7類もこの段階であろう。深鉢は外面に施される沈線の細線化がさらに進行するとともに、斜走あるいは縦走する沈線が加わるようになる。浅鉢は口縁部立ち上がり部の低平化が顕著で、痕跡

程度に立ち上がるだけの資料もみられる。なお、同時期の大野川上中流域の同種の浅鉢は、口縁部立ち上がり部が外傾していくが、沿岸部では低平化の方向で変化しており、細かな地域性をみることができる。Ⅳ期の大きな特徴は、深鉢と浅鉢の口縁部に、低いリボン状の突起が出現することである。次のⅤ期は無刻目突帯文が出現する。晩期1d類、晩期3類、晩期6類、晩期8類などで構成されるが、量的には極めて少ない。深鉢は、晩期1d類に加え晩期3類の無刻目突帯がみられる。浅鉢も前段階からの系譜をひく晩期1d類などに加え、晩期8類などの新器種が出現する。以上、本岩陰の晩期前半の資料は、Ⅱ～Ⅴ期のものがあり、坂口式に後続するⅢ・Ⅳ期が主体となる。Ⅴ期には量が急激に減じる。東九州沿岸部における土器編年からみた時に、本岩陰でⅢ・Ⅳ期のまとまった資料を得た意義は大きい。その理由として、一つには、瀬戸内系の遺物が多くを占めた坂口式以後の土器組成変化を明らかにできたこと。二つめは、無刻目突帯文出現直前の状況が明らかになった点である。

(5) 弥生時代早期

弥生時代早期に位置づけられる資料が岩陰のほぼ全域で出土したが、この段階の包含層であるⅡ0層が残存するのはごく一部であった。

甕は、口縁端部上面のみに刻みをいれるもの（1476）、口縁端部外側と屈曲部に刻みを施すもの（1477）、口縁端部外側に刻目突帯を付すもの（658）、外面の口縁部からやや下がった位置に刻目突帯を付すもの（1478）、口縁下に円形の穿孔が連続的にみられるもの（1762）などがある。最も多くみられるのは、外面口縁下に刻目突帯を付すものである。突帯や刻みの形態・大きさにはバリエーションがみられる。縄文時代からの系譜をもつ浅鉢形態のもの（1490、1492）もみられるが、その量は少ない。また、内外面に赤色顔料を塗布する壺（662）も出土している。

文献註

泉拓良　2008「鷹島式・船元式・里木Ⅱ式土器」『総覧縄文土器』

乙益重隆・前川威洋　1969「縄文後期文化　九州」『新版考古学講座』3　雄山閣

貫川光夫編　1967『小瀬原貝塚』大分県文化財調査報告13　大分県教育委員会

河野典之他編　2002『荒尾地区遺跡発掘調査報告書』豊後高田市文化財調査報告書第9集　豊後高田市教育委員会

後藤一重　1995「東九州沿岸部における縄文晩期土器編年」『香々地の遺跡Ⅱ』
香々地町文化財調査報告書第2集　大分県香々地町教育委員会

後藤一重　2014「東九州における北久根山式併行期の土器様相」『古市下遺跡・古市上遺跡』
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第74集　大分県教育庁埋蔵文化財センター

坂本嘉弘編　1991『姫島用作遺跡』姫島村文化財調査報告書第1集　姫島村教育委員会

高橋信武編　1993『宇佐別府道路・日出ジャンクション関係埋蔵文化財調査報告書』大分県教育委員会

高橋信武編　2012『横尾貝塚』大分県教育庁埋蔵文化財センター発掘調査報告書第58集　大分県教育庁埋蔵文化財センター

田中良之　1982「磨消縄文土器伝播のプロセス」『森貞次郎博士古稀記念　古文化論集』

田中良之・松永幸男　1983「寺の前遺跡縄文後期土器について」『荻台地の遺跡』萩町教育委員会

富田紘一　1996『北久根山』肥後上代文化研究会

間壁忠彦・間壁葭子　1971『里木貝塚』倉敷考古館研究集報7　倉敷考古館

水ノ江和同　2010　「九州」『西日本の縄文土器　後期』真陽社

宮内克己　1990　「まとめ」『羽田遺跡（Ⅰ地区）』大分県国東市文化財調査報告書第6集　大分県東国東郡国東町教育委員会

宮本一夫　1993「江口貝塚縄文前中期土器群の分類と位置づけ」『江口貝塚Ⅰ』愛媛大学考古学研究室

山崎真治　2013「瀬戸内地域の前期後葉の土器」『曽畑式土器とその前後を考える』第23回九州縄文研究会　神鍋大会

2　岩鼻岩陰遺跡出土石器について

1　石材について

本岩陰出土の剥片石器石材は、姫島産黒曜石が圧倒的多数を占める（第1表）。この状況は後期、晩期などでも同様である。中期段階では、姫島産黒曜石に加え、姫島産ガラス質安山岩、金山産サヌカイト、珪質岩、チャート、西北九州産黒曜石など多種の石材を使った石鏃が微量ではあるが確認できる。しかし、後期、晩期段階では、姫島産黒曜石以外はサヌカイトに限られる状況になる。サヌカイトは、肉眼観察によれば香川県金山産と思われるものが比較的多く確認できるが、九州産のものがどの程度存在するか明らかではない。圧倒的多数を占める姫島産黒曜石について、小円礫の原石がわずかに出土しているが、石材の流通そのものを示すような大中の石核は出土していない。加えて、小形の石核の数も少ない。本岩陰は姫島から国東半島中央部を抜け、内陸部へ向かうルート上に位置するが、石材流通の経由地としてよりも、むしろ石材の日常的消費地としての性格が強い。岩陰内からは多量の小剥片やチップが出土しており、石器製作が盛んに行われていることが分かるが、持ち込んだ石材を徹底的に消費したようである。

2　石鏃について

大量の石鏃が出土したが、時期的には中期の船元式段階、後期の石町式古相段階、晩期前半段階のものが主体である。総数は約750本で、半数以上の約430本が包含層掘削土の篩作業で得られたものである。遺物はすべて原位置に残すように指示を徹底し、作業員の意識も高かったが、結果的に多数の石鏃が篩作業により検出されたのは驚きであった。これまで他遺跡の調査では、今回のような篩作業を徹底したことはなく、同様な作業を試みていれば石鏃をはじめとする微小な遺物を多数得ることができたであろう。単位面積当たりの石鏃出土量は県下でもトップクラスではあるが、量的なことを考えるにあたっては、調査方法の違いを考慮する必要がある。

出土した石鏃の多くは、何らかの部位が欠損している（第2表）。完形品の割合は20～30％で、各時代とも低い。狩猟に用いた矢は、可能な限り持ち帰り修理したと考えられる。先の数字は、その損耗率の高さを示すものであろう。欠損は、先端部のみわずかに欠くものもあり、これらについては再調整を行い尖らせたであろうが、大きく欠損するものは新たなものと交換したであろう。そのため、本岩陰では石鏃の製作や再調整が日常的に頻繁に行われたようで、姫島産黒曜石の原石やサヌカイトの石核に加え、篩作業では数mmの微細なものも含む剥片・チップを大量に得ることができた。

各時期の石鏃の長さを比較してみる（第3表）。中期（2～4区Ⅱ3層出土）はその大半が長さ2cm以下で、その平均は1.75cmである。後期（8～10区Ⅱ2層出土）は、1cm代のものと2cm代のものが多数みられ、平均長は2.0cmである。中期に比べ明らかに大型化が確認できる。しかし、1cm代のものも多数みられることから、これらに2cm代のものが新たに加わったとみるべきであろう。晩期（14～16区Ⅱ1層出土）は、2cm代と3cm代のものが多くなる。最大のものは、先端部を欠損する資料ながら3.8cmである。完形品であれば、4cmを超えるものとなる。1cm代のものもみられるが、少数で1.5cm以下のものはない。平均長は2.6cmと飛躍的に長くなる。中期や後期と異なり、小さな1cm代の製品が姿を消し、大形のものが主体となる。以上、石鏃の長さについて、後期後半の石町式段階と晩期前半の間に大きな画期を認めることができる。その背景には、対象獣や狩猟方法などに変化があった可能性もある。

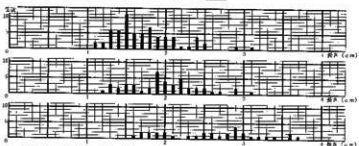
次に形態的な変化をみてみる（第165図）。中期の船元式段階では、正三角形基調のものと二等辺三角形基調のものがみられ、相対的により小型のものに正三角形基調のものが多い。小型のものは抉りの浅いもの（60、61、70）が主体であるが、抉りの大きいもの（68）や幅狭で深めのもの（89）もみられる。比較的大型のものは、幅狭で深めの抉りが主体となる（95、98、110）。脚部の形態にはバリエーションがある。また、98のような側縁が鋸歯状になるものもみられる。全体の大きな傾向として、後期、晩期段階に比べ調整剥離が細かい。後期の石町式段階になると、中期に多数みられた幅狭で深めの抉りをもつものが基本的になくなり、小型、大型に限らず、幅広で浅いものが主体となる。本段階の大きな特徴として、側縁が先端部近くで角度を変えるもの（940、1075、1083、

第１表　剥片石器石材の構成比（縄文時代中期：３区、４区）

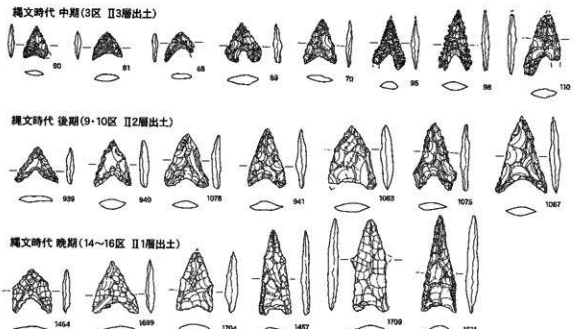
石材	姫島産黒曜石	西北九州産黒曜石①	西北九州産黒曜石②	サヌカイト①	サヌカイト②	粗品産ガラス質安山岩	チャート	ホルンフェルス	泥岩	珪質岩	粘板岩	頁岩	合計
重量(g)	859.0	27.9	13.6	172.1	5.6	1.2	53.0	0.3	1.7	4.5	0.4	17.1	1,158.4
構成比(%)	74.2	2.4	1.2	14.9	0.5	0.1	4.7	0.03	0.1	0.4	0.03	1.5	100.0

第２表　石鏃の部位別欠損状況

	完形	上半部のみ欠損	下半部のみ欠損	上～下半部にかけて欠損
中期（２～４区Ⅱ3層出土）	34	25	36	47
後期（８～10区Ⅱ2層出土）	27	21	23	26
晩期(14～16区Ⅱ1層出土)	24	32	13	18



第３表　石鏃の長さごとの個数（中期、後期、晩期）



第165図　岩鼻岩陰遺跡出石鏃の形態(S=2/3)

1067、1078）の出現である。先端部を欠損した石鏃の再調整品とも考えられるが、中期段階では見ることができなかったことと、晩期にみられる五角形のものの萌芽的存在として、後期石町式段階の定型化した形態として捉えておく。晩期前半段階の特徴は、五角形のものの出現である（1454、1457、1704、1709、1611）。両側縁が脚部から直線的に平行にのび、肩部から先端部に向かい尖るもので、肩部に小突起を作り出し強調するもの（1457、1709）もある。抉りは、全体として後期のものよりさらに浅くなる。ただし、小型のものを中心に二等辺三角形基調のもの（1699）もみられる。宮内克己によれば、同様な五角形鏃は縄文時代早前期から確認できるとされる（宮内克己　2015）が、量的にまとまってみられるようになるのは晩期であろう。

文献註

宮内克己　2015「姫島産黒曜石とその製品－石鏃を中心として－」『平成27年度瀬戸内海考古学研究会第5回大会予稿集』

瀬戸内考古学研究会

3　岩鼻岩陰遺跡利用の変遷

1

岩鼻岩陰遺跡は長岩屋川の右岸にあり、河川の侵食により形成されたものである。現状の岩陰面と現河床の比高差は約3.5mで、その差はそれほど大きくない。川との位置関係をみても、川に隣接するように岩陰があり、川と岩陰の間に段丘面が十分に形成されていない状況である。これに対し、岩鼻岩陰遺跡の下流1.3kmに位置にする岩ノ下岩陰遺跡（綿貫俊一編　2008）では、河床との比高差が約6mある。そして、川との距離が約50mあり、その間に段丘面が形成されている。両岩陰遺跡の地形的な状況から、岩陰そのものの形成時期が大きく異なると考えられる。出土遺物をみても、岩ノ下岩陰遺跡出土の土器が縄文時代早期まで遡るのに対し、岩鼻岩陰遺跡ではそこまで遡らない。岩ノ下岩陰の利用が始まった縄文時代早期段階においては、岩鼻岩陰は長岩屋川の流れに洗われ岩陰が形成される途上にあり、岩陰が利用できるようになるのは縄文時代前期になってからである。

2

岩鼻岩陰遺跡の利用状況を、Ⅰ～Ⅶ段階に分けて説明する（第166図）。

(1)　Ⅰ段階

Ⅰ段階は、岩陰が利用されるようになった縄文時代前期である。

この段階の長岩屋川は、現状の河道よりもさらに岩陰近くを流れていた。4区の北端で奥壁から約6.3mに河道の西側の肩があり、河道はそのまま斜めに進み、9区付近で奥壁にあたる。9区以南は河道の中となり、岩陰としての利用は不可能である。従って、実際に利用できた岩陰部分の面積は調査区内において約30㎡で、最盛期のⅣ段階以降の半分以下である。

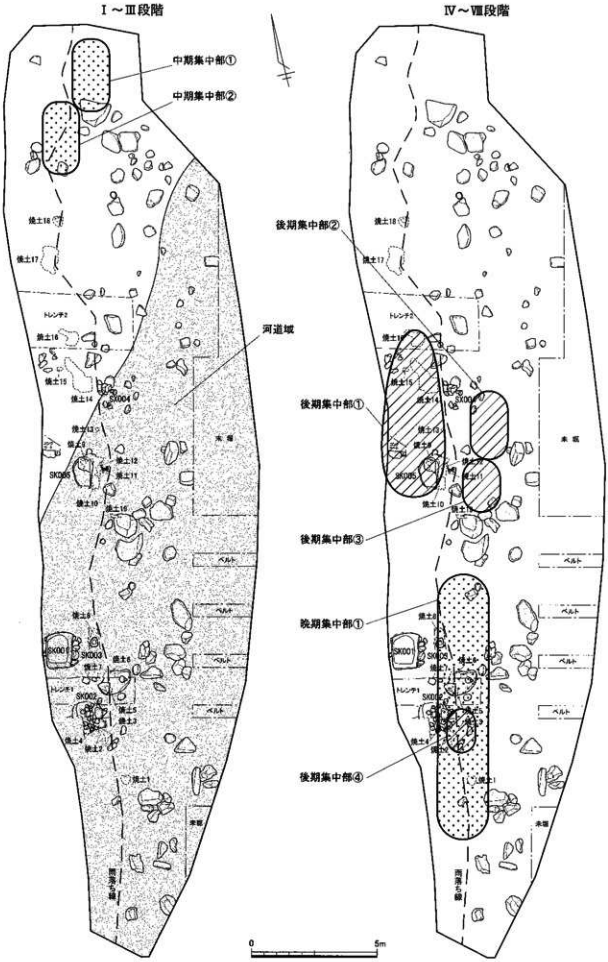
この段階における岩陰面上の土砂堆積は、0.1～0.2mとあまり進んでいない。当時の河床の高さは不明であるが、現在よりも高かったと想定されるので、岩陰面との比高差は2m以内であったと思われる。大雨に伴う増水時には、水没する心配もあったと考えられる。

遺物は、Ⅱ段階以降に比べると圧倒的に少ない。土器は内外面に条痕が施される丸底のものや外面口縁下に刺突文が施されるものなどで、1区～7区にかけて出土した。完形もかくまで復元できたものもあるが、出土は非常に散発的で一定の有意なまとまりも見いだせない状況である。土器から、時期的にやや間隔をあけた利用であった状況がうかがえ、1回の利用においてもごく僅かな小型の土器しか持ち込んでいないようである。Ⅱ段階以降と比較すると、量的に極めて少数である。また、石器や獣骨等についてもほとんど確認することができない。石器に係るものについては、わずかに姫島産黒曜石の小片が出土するのみで、Ⅱ段階以降において石鏃や剥片・チップが多数出土するのとは非常に対照的な状況である。以上のような散発的な遺物出土に加え、焼土や台石も確認することができない。包含層が調査区の北側に続くことから、未調査地に焼土などが存在する可能性は否定できないが、調査区北側は岩陰の端から外側にあたるため、焼土等の存在は考え難い。そうすると、火を焚かなかったか、仮に火を焚いても焼土が形成されるほどではない焚き方だったと想定される。すなわち、明確な炉として一定期間使用されるようなものではなかったのであろう。

この段階は、岩陰面上の土砂堆積が進行しておらず、河床との差があまりないため、やや不安定な状況である。そのため、岩陰の利用頻度が少ない、1回の利用期間が著しく短い、利用した集団規模も小さいなど、Ⅱ段階以降の利用形態とは大きな差があったと考えられる。Ⅱ段階以降大量に出土する石鏃がみられず、剥片等も極めて少ないことから、同じ岩陰の利用でも、利用の実態はⅡ段階以降とはやや異なる状況が想定される。後段で詳述するようにⅡ、Ⅳ、Ⅴ段階は狩猟に軸足を置いた集団の一定期間の利用が想定できるが、本段階は雨宿り的な一過性の利用というイメージで捉えられる。

(2)　Ⅱ段階

縄文時代中期の段階で、瀬戸内系の船元式土器が出土する。



第166図　岩鼻岩陰遺跡利用状況の変遷

旧長岩屋川の河道は、Ⅰ段階と同様である。そのため、利用可能な岩陰の範囲は8区以北の約30㎡で、Ⅰ段階と大きな変化はない。しかし、岩陰面上の土砂堆積が進行するとともに、河床も低下したと思われることから、Ⅰ段階に比べ岩陰面と河床の比高差は大きくなったであろう。そのため、岩陰面の安定性はⅠ段階に比べ増したと思われる。

この段階の包含層は8区以北に残存するが、量的には1～5区において特に多くみられる。遺物は土器に加え、石鏃が多数出土した。石鏃は、姫島産黒曜石製のものが圧倒的に多く主体をなすが、このほかに香川県金山産サヌカイト、姫島産ガラス質安山岩、西北九州産黒曜石、チャート、珪質岩など多様な石材の利用が確認できた。姫島産黒曜石については、円礫を呈する原石をはじめとし、剥片やチップ、細かな砕片などが多数出土した。岩陰に原石を持ち込み、石器製作が行われていたことが分かる。石器の中では石鏃が主体を占め、この段階の包含層から出土した石鏃は200本以上に及ぶ。弓矢を使用する狩猟活動が盛んに行われていたことを示すものと思われる。また、獣骨等の出土も確認することができる。後段で詳述するが、Ⅴ段階の獣骨等は被熱し細片のものが主体を占めるが、本段階のものは顕著に被熱したものはなく、Ⅴ段階に比べると個々の破片が大きい。獣骨等の取り扱いにおいて、Ⅴ段階とは明らかな差を確認することができる。

遺物が集中し一定のまとまりが確認できる箇所がいくつかみられる（中期集中部①、中期集中部②）。しかし、遺物集中部内を含め、中期包含層中からは焼土が確認されていない。1区～4区など、包含層の削平が著しい箇所があることから、本来存在したものが残存していない可能性もある。台石については、3区の奥壁近くから出土している。

本段階では、土器、石器、獣骨等の遺物が、Ⅰ段階に比べ飛躍的に増大する。これは、岩陰面の安定性が増大したことを背景に、利用頻度が飛躍的に増したものと理解される。面積に比して石鏃や剥片の出土量が多いことから、狩猟に軸足を置いた集団の利用であったと考えられる。しかし、いくつかみられる遺物集中箇所は、いずれも面的な広がりは小範囲であることから、小規模集団による利用であったと想定される。炉跡に想定される焼土を欠く点については、削平のためとも考えられるが、仮に本来存在しないのであっても、Ⅰ段階とは異なり明確な目的を有した集団による一定期間の利用であったことは確かであろう。ただ、焼土が形成されていないということが事実であれば、同様な遺物組成のⅣ、Ⅴ段階とは利用期間の長短など、何らかの差を考えざるをえない。

(3) Ⅲ段階

縄文時代中期末から後期前半の段階である。削平のため、この段階の包含層は良好な状況で残存していないが、後期後半以降の包含層、攪乱層、旧河道内などから土器が出土している。そのため、削平で消滅したが、かつては包含層が存在していたと思われる。

岩陰の状況は、Ⅱ段階までと同様で、実際に居住地として利用できる面積は狭いままである。17区では旧河道堆積層であるⅣ層下層において後期前半の土器が出土するなど、この段階においても河道の埋没はほとんど進行していないことが分かる。岩陰面上の土砂堆積は前段階よりも進んでおり、河床との比高差はやや大きくなり、洪水等に対する安全性はさらに増したものと思われる。

この段階に岩陰として使用可能であったのは、Ⅱ段階以前と同様に1区～8区と考えられる。9区以南では、後期後半や晩期の包含層が残存しているが、その下層にⅢ段階に相当する遺物包含層はみられない。本段階の包含層は1区～8区に本来存在したと考えられるが、攪乱や削平により残存しなかったものであろう。

包含層自体が残存しないため、この段階の詳細は不明であるが、前段階と比べ岩陰の環境に著しい変化がみられないことに加え、包含層が失われたとしても出土遺物の量が少ないことから、Ⅰ段階と同様な利用状況であった可能性もある。

(4) Ⅳ段階

縄文時代後期後半の石町式古相段階である。

この段階で、岩陰の環境が急激に変化する。すなわち、Ⅲ段階までの旧長岩屋川河道が急激に埋没する。これは、何らかの理由で河道が現河道方向へ移動したためと思われる。よって、前段階まで完全に河道の中であった

9区以南も居住域として利用可能となった。加えて、1～8区の間も、河道が東へ移動したため、前庭部が広く使用できるように変化した。河道が岩陰から離れ、河床との比高差も現状にかなり近づいたであろうことから、岩陰面の安定性は劇的に好転したと考えられる。

岩陰は間口約40m、奥壁から雨落ち線までが1～3.2mで、この範囲だけでも約80㎡が利用できる。前庭部がさらに数m伸びることから、実際の利用可能面積は飛躍的に増加したと思われる。Ⅲ段階までの岩陰部面積が約30㎡だったのと比較すれば、その利用価値が大きく高まったことが分かる。

石町式の段階は、8区～10区を中心とする後期集中部①、9区を中心とする後期集中部②、10区を中心とする後期集中部③、15区を中心とする後期集中部④などの有意なまとまりを確認することができる。8区に炉跡と考えられる焼土とそれに隣接して立石遺構（SX004）がある。遺物もこの東側を中心とする周囲から集中的に出土しており、住居跡を想起させる有意なまとまりとして捉えることが可能である。炉跡を中心に岩陰部分から前庭部にかけて扇状や壁を構築したのではと考え、周辺を精査したが、前庭部が県道造成などにより大きく撹乱を受けていることもあり、柱穴等は確認することができなかった。周防灘沿岸の福岡県から大分県にかけての地域で、鐘崎式～石町式の竪穴建物跡が多く検出されており、炉跡に近接する立石遺構についても、いくつかの遺跡で確認されている（註1）。炉跡と立石遺構がセットをなすものと思われ、小池史哲はこの立石遺構に早くから注目し（小池史哲　1996）、調理関連の施設や祭祀的な施設などの可能性を想定している。本岩陰のこのような状況は、オープンサイトにおける竪穴建物内の施設状況と基本的には何ら違いは認められない。

焼土については、先の8区の焼土のほかにも、15区などでも確認されており、炉跡を伴う居住が繰り返されていることが分かる。いずれの集中部も石町式古相段階であることから、複数の集団の同時利用も含めた、頻繁である程度長期間の利用が想定できる。土器のほかに石鏃が100本以上出土しており、木段階も狩猟に軸足を置いた生活であったことが分かる。本遺跡の所在する国東半島西北部には、鐘崎式～石町式段階の遺跡がいくつか確認されている（註2）。それらの遺跡からは、石鏃がほとんど出土しておらず、本遺跡と様相が大きく異なる。国東半島地域は、海岸近くまで丘陵がのびる地形で全体としては環境的に大きな差がないようにみえる。しかし、石鏃を出土しない遺跡が、河川沿いの半島の中では比較的大きな平坦部に立地しており、それらに比べ山間に入った本岩陰とでは生業に大きな違いがあったと考えざるをえない。本岩陰を利用した集団は、狩猟に特化した集団であった可能性が高く、石鏃を出土しない遺跡との違いを念頭にいれ評価しなければならない。この時期の多くの遺跡が石鏃の占める割合が低い事実を考慮すると、本岩陰はこれら遺跡と関係の深い集団の季節的な分業に係る定住地であったと考えられる。地域内に同時期の遺跡が点在する状況から、本岩陰を利用する集団が他遺跡の集団から孤立的に活動するのではなく、むしろ地域集団全体の生業活動の一翼を担うような状況であったと推測される。

石町式古相に後続する石町式新相、西平式、三万田式などの時期は、遺物量がかなり少ない。次のⅤ段階までの間は、利用の形態や頻度に変化が生じたと捉えられる。

(5)　Ⅴ段階

縄文時代晩期前半を中心とする時期と、弥生時代早期の段階である。

本岩陰から出土する遺物が最も多いのは、縄文時代晩期前半の遺物である。土器、石器、獣骨などが多量に出土した。北半の区域のうち、1区～4区にかけては削平が著しく包含層が残存していないが、5区周辺からも焼土を検出しており、本来北半分の区域においても焼土を伴う利用があったことが分かる。9区以南では、13区～16区周辺を中心に焼土や台石がいくつも確認でき、部分的にはそれらが重層的にみられることから、同様な場所が繰り返し利用されたことが分かる。遺物も12区～17区に集中する状況が読み取れ、晩期集中部①とした。広範囲での遺物集中が認められ、まさに足の踏み場もない状況である。中期や後期段階の遺物集中部よりも集中度がかなり高い。焼土及び台石が生活スペースの中心であったと考えられ、遺物の量や集中度から竪穴建物跡と同じようなまとまりや機能があったものと想定される。岩陰北半は晩期包含層の削平が著しいが、このようなまとまりは、焼土の検出された5区を中心にも形成されていた可能性が高い。この段階には北半と南半各々に居住単位が

確認でき、同時に存在した可能性も高い。

遺物のなかで注目されるのは、16区から出土した勾玉や垂飾などの石製装飾品である。緑色を呈する小型品で、大部分は九州内に産すると考えられているクロム白雲母製である。焼土や台石を中心とした晩期集中部①に伴うものである。

石器については、約200本の石鏃が出土した。包含層の土を全量篩にかけたこともあるが、単位面積当たりの石鏃出土量は県下でもトップクラスである。東九州地域の晩期前半の遺跡では、扁平打製石斧が量的にまとまって出土することが知られているが、本岩陰からは1本も出土していない。大分県南西部の大野川上中流域の火山灰台地上の遺跡では、土掘り具としての扁平打製石斧が大量に出土することと、火山灰台地上の遺跡増加から、原初的な農耕の存在が指摘されている。本岩陰の所在する国東半島地域を含む東九州沿岸部における扁平打製石斧の出土状況は、遺跡により大きく異なる（註3）。大野川上中流域のような火山灰台地が大きく広がらないためか、地域ごとの特性にあわせた生業スタイルがあったものと考えられる。とは言え、本岩陰のような大量の石鏃出土例はこれまで皆無である。本岩陰に居を構えた人々は、弓矢を用いた狩猟を専らとし、地形的な制約が大きいと思われるが、扁平打製石斧を使用する植物栽培は行っていなかったと思われる。Ⅳ段階と同じように、狩猟にウエートを置いた季節的な遺跡利用を表すものであろう。

土器や石器とともに獣骨等も多く出土した。それらは大部分が1cm以下の小片で、形状が分かるものが少ない。また、ほとんど全てに被熱した状況が認められた。これらから、何らかの理由で獣骨等は火にかけられ、意識的に細かく粉砕されたことが分かる。

無刻目突帯文の上菅生B式段階の遺物は極めて少量であるが、弥生時代早期の刻目突帯文については、岩陰全体からの出土が確認できる。一部を除き縄文時代晩期前半と層位的に区分することができず、晩期前半の遺物と混在する状況であった。晩期と同様な岩陰の利用が行われていたようである。

(6) Ⅵ段階

弥生時代から古墳時代にかけてである。

Ⅴ段階の包含層中や表土層から遺物が散発的に出土するもので、縄文時代の遺物に比べると極めて少量である。時期的にも、特に限定される状況はみられない。また、遺物の有意なまとまりも確認することはできなかった。加えて、確実にこれらの遺物に伴うと考えられる焼土などの遺構も検出されなかった。岩陰を訪れ何らかの利用があったことは確かであるが、Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ段階とは明らかに異なる。一過性の単発的な利用で、一定集団が一定期間本格的に居を構えたとは認めがたい。

この段階の岩陰利用は、全体としてⅠ段階に似た状況である。

(7) Ⅶ段階

古墳時代以降その利用の痕跡はしばらく確認することができず、次に利用されるのは鎌倉時代である。

14区～15区にかけて、13世紀の瓦器椀などが出土する土坑を1基確認した。中世の遺物が確認できたのはこの土坑のみで、縄文時代包含層はもちろん、表土層などからも出土していない。土坑は長さ1m余りと小規模であるが、完形に復元できた瓦器椀や土師質土器坏が出土したことから、祭祀的な意味合いを有する埋納土坑であった可能性もある。このことから、本段階は生活の場としてではなく、宗教的・祭祀的な場としての継続性のない利用であったと考えられる。

(8) Ⅷ段階

中世後半あるいは近世以降から近代にいたる段階である。

この間の痕跡として、表土層や攪乱層から近世以降の陶磁器等が散発的に出土した。明治21年の地籍図によれば、この付近は宅地となっている。建物の規模等を明確にすることはできないが、明治時代には宅地に伴う建物が存在したと思われる。このような状況は近世あるいは中世後半まで遡る可能性があるが、具体的には分からない。13区の奥壁に近い箇所にある岩盤を穿った遺構（SK001）が、この段階の宅地に伴うものであろう。

現在は前庭部が県道敷きとなっているが、現状のアスファルト舗装の前段階の道路建設に伴い岩陰内の土を用

い路盤整備を行った痕跡が確認された。明治時代以降、宅地から道路へと利用形態が変化したようである。岩陰部分には調査区北端部に倉庫などの施設が近年まであり、この部分はコンクリートの基礎工事が行われ、包含層の攪乱が著しかった。

3

前段では、岩陰の利用についてⅠ～Ⅶ段階に分け詳細にみてきた。しかし、段階により利用の中身が異なる場合があることが分かった。ここでは、具体的な利用形態を大きく①～③に分類して再度整理する。

(1) 利用形態①

屋敷を構え何世代にもわたり連続的に利用が認められる。Ⅶ段階がこれに相当すると思われる。

Ⅶ段階は、中世後半あるいは近世のある時期から近代にいたる間である。岩陰部から前庭部にかけて建物があり、岩陰周辺が屋敷地として利用される。この段階は、岩陰そのものを利用するということではなく、岩陰を含む一帯が屋敷地として利用されるということである。Ⅰ～Ⅶ段階においては岩陰そのものが利用の主対象であったのが、Ⅶ段階では屋敷地として利用可能な平坦面である前庭部周辺が主役となる。

この段階は長岩屋川流域の谷の開発が、岩鼻岩陰遺跡が所在する最上流部まで到達し、水田耕作の単位である屋敷が水田に隣接する山麓に点在する状況であったと思われる。本岩陰の前庭部周辺は屋敷地としては手狭であることから、小規模零細農民の屋敷地であったと考えられる。

(2) 利用形態②

岩陰を居住地として一定期間利用するとともに、同様な利用が繰り返し行われたと考えられる段階である。Ⅳ段階、Ⅴ段階が確実にこれに相当する。

岩鼻岩陰遺跡の隣接地には平坦面が広がっており、小中規模の集落の立地が可能である。それにも係らず一定期間岩陰を利用しているということは、小面積の岩陰で事足りるくらいの小規模集団の利用であったことと、岩陰での生活が竪穴建物と何ら遜色がなかったからであろう。岩陰を利用したのは、竪穴建物にして1棟分、最大で2棟分程の小集団である。岩陰部を中心に前庭部にかけ壁や屋根を構築し、その内部の炉や台石、立石遺構を囲み生活したものであろう。竪穴建物に劣らぬ居住性を有していたと想像され、岩陰を利用することにより竪穴建物建築に要する労力の軽減が図られたものであろう。

Ⅳ段階は縄文時代後期後半で、焼土、立石遺構を中心としたものなど、複数のまとまりを確認することができる。土器、石鏃などの遺物も比較的大きな破片を含み多量に出土している。焼土は炉跡と考えられ、焼土層が厚く形成されていることから、一定期間の利用が行われたと思われる。

Ⅴ段階は縄文時代晩期前半と弥生時代早期である。焼土、台石等が複数箇所みられるので、2集団が同時に利用した可能性もある。多量な石鏃に加え、細かく割られた獣骨が多数出土している。

以上のⅣ、Ⅴ段階は、石鏃が大量に出土することから、狩猟にウエートを置いた生活が一定期間営まれたものと考えられる。縄文時代における季節的な定住の場として、小集団による利用が繰り返されたものであろう。

(3) 利用形態③

岩陰の利用が短期的、散発的と考えられるものである。Ⅰ段階、Ⅵ段階、Ⅶ段階がこれに相当する。

Ⅰ段階の縄文時代前期は、岩陰形成初期段階であったため、長岩屋川河床と岩陰面の比高差があまりなく、河道も岩陰近くに及んでいたため、洪水等の危険性が伴った。また、利用可能面積も少ないなど、一定期間留まるだけの条件整備ができていなかったと考えられる。出土遺物の量も他の縄文時代の各段階に比べ少量であることから、極めて少人数の短期的、散発的な利用であったと考えられる。

Ⅵ段階は弥生・古墳時代で、基本的な生産基盤を稲作栽培におく時代である。そのため、水田が開発できなければ、ここに一定集団が長期に留まる必要はない。遺物量も非常に少ないことから、竪穴建物を単位とするような集団にも及ばない、小規模かつ極めて散発的な利用であったと思われる。

Ⅶ段階は中世前半の時期である。国東半島では、岩陰や洞穴などを利用した仏教施設が地域の信仰の対象とな

ることがある。長岩屋川流域においても、そのような施設が点在する（真野和夫他編　1993）。岩鼻岩陰が信仰の場として利用された記録はなく、同時代の遺物も土坑以外からは出土していないことから、建物などの施設を伴った長期的・継続的な利用は想定し難く、一時的あるいは限定的な利用が想定される。

このほか、Ⅱ段階、Ⅲ段階については包含層の削平が著しいなどのため、どちらの利用形態であったのか判断が難しい。Ⅱ段階は縄文時代中期で、土器や多数の石鏃のみならず姫島産黒曜石の原石も出土していることから、利用形態②であった可能性が高い。しかし、岩陰の北半部分しか利用できない段階であるので、小規模な集団の利用であったことは確実である。

註

1　周防灘沿岸の遺跡で竪穴建物内に立石遺構が確認されている主な例として以下の遺跡がある。
大分県宇佐市安心院町飯田二反田遺跡1号住居跡・4号住居跡（坂本嘉弘他編　1993）、大分県中津市三光佐知久保畑遺跡24号遺構（平田由美編　2004）、福岡県大平村上唐原遺跡縄文1号住・縄文2号住居（小池史哲　1996）

2　鐘崎式～石町式の遺跡が桂川流域に点在する。遺跡はいずれも小中規模で、竪穴建物跡が1～数棟確認されている（第2章第2節参照）。出土遺物をみると、石鏃はほとんど認められず、遺物組成が本遺跡とは様相を大きく異にする。

3　縄文時代後期末～晩期初めの宇佐市尾畑遺跡（小林昭彦編　1995）では一定量の扁平打製石斧が出土している。これに対し、晩期前半の豊後高田市香々地町坂口遺跡（後藤一重編　1995）や姫島村用作遺跡（坂本嘉弘編　1991）では、一定量の上器は出土するものの扁平打製石斧は極めて少数である。

文献註

小池史哲　1996「Ⅴ　まとめ」『上唐原遺跡Ⅱ』豊前バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告第5集　福岡県教育委員会
後藤一重編　1995『香々地の遺跡Ⅱ』香々地町文化財調査報告書第2集　大分県香々地町教育委員会
小林昭彦編　1995『横山遺跡　尾畑遺跡』一般国道宇佐道路埋蔵文化財発掘調査報告書(3)　大分県教育委員会
坂本嘉弘編　1991『姫島用作遺跡』姫島村文化財調査報告書第1集　姫島村教育委員会
坂本嘉弘他編　1993『飯田二反田遺跡』大分県教育委員会
平田由美編　2004『三光村の遺跡－佐知久保畑遺跡－』三光村文化財調査報告書第5集　大分県三光村教育委員会
真野和夫他編　1993『豊後国都甲荘の調査』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
綿貫俊一編　2008『岩ノ下岩陰遺跡』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第32集

大分県教育庁埋蔵文化財センター

4　大分県の縄文時代岩陰・洞穴・洞窟遺跡

1

岩陰・洞穴・洞窟遺跡（以下、岩陰遺跡等と称する）は、地形的な制約から、面積的には小規模な遺跡がほとんどである。しかし、草創期から晩期にいたる縄文時代を通してその利用を確認することができ、同じ岩陰などを繰り返し長い期間利用している例も多い。岩陰遺跡等からは、オープンサイトの遺跡では残存し難い埋葬人骨の検出例も多いことから、貝塚とならび縄文時代の墓制研究には欠くことのできない遺跡となっている。また、獣骨等の動物遺存体等が多数出土する場合も多く、それらを分析することにより、縄文時代の食生活等をより具体的にイメージすることが可能となる。さらに、小面積のなかで、土器や石器などの遺物や動物遺存体等が時代ごとに幾層にもわたって堆積することから、縄文時代における時期ごとの変化を捉えることも可能である。このように岩陰遺跡等は、縄文土器の編年作業や縄文社会の生活を復元するうえにおいて、重要な研究対象となっている。

しかし、岩陰遺跡等そのものの特殊性が強調されたり、オープンサイトの遺跡では出土が少ない人骨や動物遺存体等の評価に目が奪われがちな場合が多く、縄文時代における集落論や社会論などにおいて岩陰遺跡等が積極的に取り上げられ議論されたことは少ないように思われる。以上から、本稿では、①大分県下の岩陰遺跡等を概観し、その特色を整理する。②オープンサイト遺跡や大規模遺跡との関係を改めて検討し、縄文社会における岩陰遺跡等の位置づけを明らかにする。

2

大分県下の岩陰遺跡等を概観する。県下では昭和30年代に、日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会主催の調査が賀川光夫を中心に行われ（八幡一郎他　1967）、磨制や土器編年の研究に大きな成果をあげている。現状で確認することのできる岩陰遺跡等は35箇所（第4表）である。岩陰遺跡等が特に多くみられるのは、豊後大野市から竹田市にかけての大野川上中流域、国東半島から山国川流域にかけての県北地域などである。このような地域には、火山噴火を起因とする厚い凝灰岩層などの発達が顕著にみられ、これらが河川の侵食を受け、多くの岩陰・洞穴・洞窟が形成されている。現状で遺跡として認定されていない岩陰なども多数あるが、既に遺跡として周知されている岩陰遺跡等と形状・環境に差のないものも多く、今後悉皆的に精査すれば、さらに多くの岩陰遺跡等を確認することができるであろう。

遺跡名をみてみると、「～岩陰」、「～洞穴」、「～洞窟」、「～遺跡」と多様で、必ずしも立地環境と名称が一致していないようである。そのため、【岩陰】岩壁の下部が侵食により抉れたもの、【洞穴】岩壁の一部が大きく抉られて横穴状を呈するもの、【洞窟】横穴状に深く入り自然光が届かないもの、以上のように再定義して立地形態を表示した。

時期については、発掘調査等が行われていないため詳細が不明なものも多数あるが、そのほとんどから縄文時代の遺物が出土しているようである。しかし、出典資料に縄文時代としか記載がないため詳細な時期が不明なものは、そのまま縄文時代とした。また、旧石器時代や弥生時代のみとされるものについても、将来の調査で縄文時代の遺物出土の可能性が見込まれることからそのまま掲載した。

以下では、大分県下の岩陰遺跡等を具体的にみていくが、個々の遺跡の詳細な紹介は割愛し、いくつかの項目ごとに検討していく。なお、未調査のため詳細な状況が不明なものについては、検討の対象から除いている。

(1)　立地

立地を考えるにあたり、岩陰遺跡等に近接する平坦面との比高差をみていく。平坦面は沖積平野や河岸段丘などで、オープンサイトの遺跡が立地可能な場所である。この平坦面と岩陰遺跡等の位置との比高差により、A群（比高差10m未満）、B群（比高差10～50m）、C群（比高差50m以上）、D群（周辺に平坦面なし）に分けることができる。

A群

第4表　大分県下の岩陰・洞穴・洞窟遺跡

	遺跡名	所在地	立地				規模			時期																埋葬人骨数（体）				特記事項	文献
			標高(m)	比高差(*)分類	開口方向	形態	間口(m)	奥行(m)	面積(㎡)	旧石器	縄文								弥生												
											草創	早期	前期	中期	後期	晩期				早期	前期	中期	後期	晩期							
1	岩鼻岩陰	豊後高田市	160	0 A	東	岩陰	40	2	80					○	○	○	○													丙類多数	
2	野猿洞穴	竹田山荻町	450	12 B	南	岩陰	18	7.5	135				○	○		○	○				1			2					晩土（前期）	①
3	鬼宮洞穴	竹田市荻町	460	D	南	洞穴	25	10	125				○	○		○	○			○									人骨（3分骨5体）	②
4	磯目岩陰	竹田市荻町	350	30 B	—	岩陰	—	—	—						○														未調査	③
5	ダヌキ洞穴	竹田市	不明	2 A	—	岩陰	—	—	—							○													未調査 人骨出土	④
6	阿鼻岩陰	竹田市	270	1.5 A	北	岩陰	—	—	—							○				○									未調査 人骨出土	④
7	鬼藤洞穴	竹田市	350	20 B	—	岩陰	—	—	—									○											未調査	③
8	岩瀬岩陰	竹田市	320	20 B	—	岩陰	—	—	—						○														未調査	③
9	不動岩洞穴	竹田市	300	10 A	—	岩陰	40	3～5	160				○								○								未調査 人骨出土	⑥
10	桐々洞穴	竹田市	300	20 B	—	岩陰	—	—	—									○											未調査	③
11	下原洞穴	竹田市	300	30 B	—	岩陰	—	—	—						○														未調査	③
12	五反田洞窟	竹田市	280	20 B	—	未確認	—	—	—						○														未調査	③
13	出合洞穴	竹田市	320	20 B	—	未確認		—	—						○														未調査	③
14	大鳥羽洞穴	豊後大野市朝地町	250	30 B	西	岩陰	12	6	72				○	○							8								集石9基	⑤
15	恵本洞穴	豊後大野市朝地町	250	20 B	北	岩陰	22	6	132								○	○						2						⑥
16	田夫時洞穴	豊後大野市朝地町	450	D	—	未確認	—	—	—				○																未調査	③
17	松ヶ迫岩陰	豊後大野市大野町	200	30 B	—	未確認	—	—	—										○										未調査	③
18	こうもり穴洞穴	豊後大野市清川町	200	50 B	—	未確認	—	—	—						○														未調査	③
19	蛭岩	豊後大野市三重町	200	D	—	未確認	—	—	—						○														未調査	③
20	小穴洞穴	臼杵市	40	30 B	—	洞穴	—	—	—				○				○													⑦
21	岩屋洞穴	臼杵市野津町	—	—	—	洞穴	—	—	—					○																⑧
22	神野洞窟群	臼杵市野津町	200	D	—	洞穴	—	—	—	○																				③
23	前高洞窟	佐伯市	30	0 A	東南	洞穴	4	10	40				○				○	○							○	○			配石墓（横臥）	⑨
24	尾津栗洞窟	大分市	30	20 B	南	洞窟	—	—	—	○																				⑥
25	川原田洞穴	竹田市山香町	70	3.5 A	北	岩陰	13.5	4	54				○	○	○	○	○	○			散体									⑩
26	成仏岩陰	国東市国東町	140	20 A	北	岩陰	20	4	80				○				○	○											集石4基（後晩期）	⑪
27	六所権現岩陰	豊後高田市七浦町	120	10 A	南	岩陰	—	—	—							○													未調査	⑫
28	岩ノ下岩陰	豊後高田市	125	3 A	北	岩陰	30	1.5～3	60				○	○	○	○	○	○												⑬
29	六井戸洞穴	豊後高田市	150	50 B	—	未確認	—	—	—						○														未調査	③
30	コマノフシメ	中津山三光	300	250 C	—	未確認	—	—	—	○																			未調査	③
31	谷洞穴	中津山本耶馬渓	80	4 A	南	洞穴	11	9	99				○	○			○				9	40		17						⑭
32	堂ノ迫洞穴	中津市本耶馬渓	300	100 C	—	洞穴	—	—	—						○					○									未調査	③
33	清水迫洞穴	中津市耶馬渓	200	50 B	東	洞穴	6.8	12.3	83.6										○											⑭
34	狩宮八幡宮岩陰	日田市	230	30 B	—	岩陰	—	—	—						○														未調査	③
35	二日市洞穴	九重町	363	3 A	南	洞穴	6	20	120		○	○	○			○					7	1								⑮

＊谷底平野等との比高差（1/25000地形図により計測したものも含んでおり、若干の誤差がある）

文献

①賀川光夫編『野猿洞穴の研究』別府大学考古学研究報告第3輯　1973
②角田柳幸ほか「鬼宮洞穴遺跡概要」『ぢかたび』第15号　1975
③『大分県遺跡地図』大分県教育委員会　2008
④賀川光夫「大分県の考古学」　1971
⑤賀川光夫「大分県大恵寺福荷洞穴」『日本の洞穴遺跡』　1967
⑥賀川光夫「大分鳥羽原洞穴」『日本の洞穴遺跡』　1967
⑦賀川光夫「小穴洞穴」『挙水台』大分県教育委員会　1965
⑧坂田邦洋　「宮島洞窟遺跡の研究」『史学論叢』10　1979
⑨橋賞俊一　「大分県馬場前洞窟遺跡の研究」大分県博報記要12　2011
⑩賀川光夫「大分鳥羽原洞穴」『日本の洞穴遺跡』　1967
⑪坂田邦洋編『国東町文化財調査報告書』国東町教委　1972
⑫坂本嘉弘　「縄文時代　大分の原史」1　大分合同新聞社　1976
⑬橋賞俊一編『若ノ下岩陰遺跡』大分県埋蔵文化財センター　2008
⑭賀川光夫ほか「原史」『本耶馬渓町史』本耶馬渓町　1987
⑮橋詰清孝編『大分県二日市城ヶ山　玖珠郡九重町教育委員会　1980
⑯島袋春彩「消滅した岩陰遺跡」『社会部会研究集報』11　1975
⑰下山智隆「耶馬渓周辺の弥生の洞穴」『Fragments』　2000
⑱八寸夫「研究史近畿　岩屋洞穴遺跡」『ぢかたび』第19号　1977

岩陰遺跡等の立地場所と平坦面との比高差が少ない一群で、岩鼻岩陰遺跡、玉来岩陰、川原田洞穴、六所権現岩陰、岩ノ下岩陰、粉洞穴、二日市洞穴などがこれに該当する。岩陰遺跡等のなかで本例が最も多い。岩陰や洞穴等に居住したということを除けば、平坦面に位置するオープンサイトの遺跡とほぼ同様な立地条件にあると捉えられる。すなわち、居を構えるのに岩陰や洞穴を利用するか、平坦面に竪穴建物を構築するかという違いのみで、岩陰や洞穴という特殊性を強調しなければ、両者の間に差異はないと思われる。

B群

岩陰遺跡等の立地する場所と平坦面にやや比高差がみられるもので、野鹿洞穴、大恩寺稲荷洞穴、草木洞穴、成仏岩陰などがこれに相当する。これらの岩陰遺跡等では、平坦面から一定の高さを登らなければならず、平坦面に竪穴建物を構築した場合に比べ、その利用にやや困難を要する。しかし、多くは比高差30m以内であるため、平坦面から著しく隔絶した状況ではなく、河川での水汲み等についてもそれほど難儀ではなかったと思われる。小集団での利用を考えた場合、平坦面に竪穴建物を建築するよりは、岩陰・洞穴を利用した方が労力の節減になるし、それで足りる状況であったと思われる。

C群

平坦面との比高差が大きい一群である。平坦面から斜面をかなり登らねばならず、日常の水汲み等を考えた時に、平坦面に竪穴建物を構築する場合に比べ著しく利便性に劣る。よって、一定集団が一定期間生活を行うことを考えた場合、川に近い平坦面ではなくこのような岩陰・洞穴を選択するということは考え難い。これらをあえて利用するということは、他に特別な理由・目的があると考えざるを得ない。

D群

山地形で、近接地に平坦面がない場所に立地するものである。平坦面がないことから、複数集団が居住する一定規模の集落成立が本来的に不可能である。周辺に一定規模集落の立地可能場所を有するA群、B群、C群とは根本的に異なる。D群は、さらにD1群とD2群に分けられる。

D1群は川との比高差50m以内のもので、飲料水の確保などの条件を考えた時に、一定集団が一定期間生活を行うことが可能と考えられる。農耕などを目的とした平坦地の確保が取り立てて必要でない縄文時代では、このような環境でも住居を構えるのに適地であったと考えられるが、岩陰等といった地形的な制約から大中規模集落の成立は不可能である。

D2群は川との比高差が50m以上である。これらは前述したC群と同様、一定集団が一定期間生活を行うには極めて不適な場所である。

(2) 規模

間口等の規模について、詳細が分かる12箇所の岩陰遺跡等の状況をみてみる。

岩陰の面積は、50～135㎡である。この数値は単純に間口×奥行（奥壁から雨落ち線まで）で計算したものである。すなわち、雨に濡れない範囲の面積である。5×5mの標準的な竪穴建物の床面積25㎡と比べると、数字的には数基分に匹敵する面積である。しかし、横長であったり奥行が短かったりと、岩陰や洞穴の地形に強く規制された窮屈な利用しかできないのが現実であるため、実際に利用可能な面積は数字に示される面積に比べるとかなり低かったと思われる。

ただ、遺跡によっては広い前庭部を有するものもあり、それを有効に利用することにより、岩陰や洞窟の地形に規制された窮屈な利用から脱することも可能である。広島県帝釈峡遺跡群の名越岩陰では、岩庵直下に柱穴を掘り岩陰と一体となった住居を構築している（川越哲史　1968）。このような工夫をすれば、岩陰や洞穴を利用して、オープンサイトの竪穴建物に近い機能と規模を有する施設を構築することも可能であったことが分かる。

しかし、岩陰等における住居としての利用可能面積は、地形的な制約から自ずと限られる。そのため、複数集団が同時に居を構えるような大規模集落は成立しえない。オープンサイトは集落の規模に応じた土地の選択が可能であるが、これに対し、岩陰遺跡等の場合は単独、あるいは多くても2～3集団しか利用できない。

すなわち、岩陰遺跡等は小規模集団限定の利用にしか適さないことが最大の特徴である。

(3) 埋葬

10遺跡において人骨の出土が確認されている。出土状態が良好でなかったりするものもあり、すべてが埋葬人骨と断定されてはいない。今後、岩陰遺跡等の本格的な発掘調査が進めば、その数はさらに増加するであろう。以下、埋葬の状況を具体的にみてみる。

野鹿洞穴（賀川光夫編　1973）

洞穴は出土土器から、縄文早期、前期、後期、晩期に利用されている。埋葬人骨は4体確認されており、早期と後期に位置づけられている。後期とされる3体の人骨は撹乱により著しく乱されており、埋葬状況などは不明である。早期の1体は、墓壙内から仰臥位で確認されている。内部の面積に対し埋葬人骨数が少ないことから、墓地および居住の両面での同時利用は可能であったと思われる。なお、炉跡と考えられる焼土を中心に土器や石器などが集中して出土した前期の層からは、埋葬人骨は確認されていない。

龍宮洞穴（町田利幸ほか　1975）

出土層位が明確にされていないが、大腿骨、膝蓋骨、腓骨、脛骨などがまとまって出土している。調査者は屈葬人骨と想定している。洞穴内の極めて部分的な調査なため、洞穴内の埋葬の在り方などは不明である。

不動岩洞穴（鳥養孝好　1975）

洞穴内から、縄文時代早期の土器や貝類、獣骨とともに人骨と思われるものが少量採集されている。歯と肋骨であるが、埋葬されたものであるかは不明である。

阿蔵岩陰（賀川光夫　1971）

縄文時代中期の土器とともに人骨が採集されている。埋葬人骨の可能性が高いが、未調査のため詳細は不明である。

大恩寺稲荷洞穴（賀川光夫　1967 a）

間口12mの岩陰の奥壁に沿って、縄文時代早期～前期の埋葬人骨が8体確認されている。1体が小児で、他の8体は成人である。岩陰の前部には9基の集石遺構がみられる。ここでは、内部の空間を目的に応じてある程度整然と区分して利用しているようである。

草木洞穴（賀川光夫　1967 b）

縄文時代後期に比定される2体の埋葬人骨が確認されている。両者とも円形の墓壙に埋葬されており、座位、側臥屈葬である。また、人骨には抜歯がみられたという。ここでは、内部の一部のみが墓地として利用されており、空間的には住居との同時利用は可能であったようである。

前高洞窟（坂田邦洋　1979）

第2層（縄文時代晩期）と第3層（縄文時代後期）で人骨が出土している。第2層からは、歯、上腕骨、大腿骨などが出土している。骨の状況から、壮年期の女性であろうとされている。第3層からは脛骨と椎骨がわずかに出土したのみである。両者とも出土状態が良好でないため、埋葬されたものであるか否かは確認できていない。

川原田洞穴（賀川光夫　1967 c）

川原田洞穴からは縄文早期～晩期の遺物が出土しているが、埋葬人骨は早期の包含層に伴い確認されている。人骨は数体分が集骨状態で出土している。このほか、撹乱に伴い出土した人骨もあるので、総数は十数体にのぼるであろうとされている。

椋洞穴（賀川光夫他　1987）

総数68体の埋葬人骨が出土している。時期的には、縄文早期のもの9体、前期のもの40体、後期のもの17体である。早期の人骨は墓壙に屈葬の状態で埋葬され、一部の人骨には遺体の一部を切断し除去したものがみられる。前期は多くの人骨が出土しているが、屈葬の遺体を墓壙に埋葬し、墓壙上面を石で覆うものなどがみられる。後期も墓壙に屈葬状態で埋葬されるが、4体合葬や母子合葬の例もある。以上のうち、早期末～前期の埋葬は洞穴全域に広がっており、洞穴が墓地に特化して利用された可能性がある。

二日市洞穴（橋昌信編　1980）

縄文時代前期の墓壙1基、早期の墓壙2基が確認された。これらの埋葬施設は北側の壁に沿うように配置され、反対側の南壁沿いには集石遺構が並ぶ。前期は1体の埋葬であるが、早期は各々3体、4体の合葬である。早期、前期の段階では、墓域と生活空間が明らかに区分されている。このほか、草創期や後期の遺物も出土しているが、埋葬遺構はみられない。

以上の遺跡の状況から、岩陰遺跡等における埋葬のあり方は次のように整理できる。

Ⅰ群

岩陰・洞穴・洞窟内全体を墓地として専用的に利用するものである。今回検討したなかでは、枌洞穴の早期末～前期段階がこれに相当すると思われる。この場合でも、前庭部を住居スペースとして利用した可能性が残る。このほかには、積極的に墓地に特化した利用は確認できなかった。よって、岩陰遺跡等が墓地空間として特化された例は、極めて少数であると思われる。

Ⅱ群

岩陰・洞穴・洞窟内を墓地空間と住居空間に区分して利用するものである。埋葬人骨が出土した大半の遺跡がこれに相当する。正式な発掘調査報告書が未刊の遺跡が多いため、埋葬人骨の位置に関する情報が少ないが、岩陰・洞穴内における埋葬位置が明らかな大恩寺稲荷洞穴や二日市洞穴の例をみると、壁に沿うように埋葬が行われている。岩陰・洞穴内における空間を意識した状況が明確に読み取れ、遺物出土の状況から残余のスペースは生活空間として利用された可能性が高い。

Ⅲ群

岩陰・洞穴・洞窟内に墓地が全く形成されず、生活空間としてのみ利用するものである。埋葬人骨が検出されていない全ての岩陰・洞穴に加え、埋葬人骨が確認された岩陰・洞穴における埋葬人骨が検出されていない層(時期)である。岩陰・洞穴の利用のなかでは、このように生活空間としてのみ利用された例が多数を占める。

(4) 利用形態

岩陰遺跡等における、遺物の量、炉跡等の遺構の在り方、埋葬の在り方等の具体的な利用の状況から、利用形態を以下のように分類して考えることができる。なお、同一の岩陰遺跡等においても、層位や時期により異なる利用形態をとることがある。

利用形態A

一定期間継続して利用するとともに、同様な利用がある程度繰り返し行われる利用形態である。

炉跡と思われる明確な焼土や台石などとともに、まとまった遺物や動物遺存体等の出土がみられる。また、時として岩陰や洞穴内に生活スペースを避けるように埋葬が確認される場合もあることなど、偶発的あるいは雨宿り的な短期間の利用ではないと考えられる。遺物量や遺跡内の状況から、竪穴建物1棟分を単位とするような集団の単独ないしは複数による一定期間の利用が想定される。出土遺物において石鏃のみが多量に出土する例などもあることから、狩猟などに特化した季節的な利用の場合もあったと思われる。このような場合でも、季節ごとの定期的な利用であったと思われる。

利用形態B

短期的あるいは偶発的な利用形態である。

出土遺物が少なく、炉跡に想定される焼土や台石などは確認することができない。極めて短期間あるいは偶発的な利用であったと思われる。具体的には、少量ではあるが土器を持ち込む場合（①）と、臨時的な野営や雨宿りといった岩陰遺跡等にほとんど遺物を残すことのない場合（②）が含まれる。①は当初から一定期間の利用を想定したとも捉えられるが、利用形態Aとは利用期間の長短や継続性の有無で区別できる。②はまさに極めて偶発的な利用で、調査においてその痕跡を掴むことが難しい場合もあるかもしれない。

3

(1) 岩陰遺跡等の諸特性

前段での検討を踏まえ、岩陰遺跡等の有する特性について再度整理する。

① 岩陰遺跡等の立地は、A群及びB群がその大半を占め、C群とD群は少数であることが分かった。A群及びB群はオープンサイトの遺跡と立地環境がほとんど同じである。岩陰遺跡等は特殊な立地環境にあると思われがちであるが、多くは近接してオープンサイトの遺跡が立地可能な場所にあり、その違いは竪穴建物に住むか、岩陰等に住むかの違いのみである。岩陰遺跡等の最大の特徴は、天然の雨避けを有する点である。雨避けの状況は様々で、そのまま手をかけずに雨風が凌げるものから、本格的な生活を行うには何がしかの雨風対策追加の必要性があるものまでみられる。緊急的、一時避難の利用はいつでも可能で、即日入居可能な優良物件である。少し手を加えるにしても、竪穴建物を新築するよりも極めて短時間で、竪穴建物に匹敵する環境を整えることができたであろう。一方、C群と一部のD群は、オープンサイトの遺跡やA群及びB群とは明らかに立地環境が異なり、水の確保などの日常生活に著しく不向きな場所にある。現在の我々の価値観で安易に判断できない側面もあろうが、これらはオープンサイトの遺跡やA群及びB群では果たすことのできない何か特別な目的をもった遺地であった可能性が高い。

② 規模の面からみると、岩陰遺跡等は実際の面積に比し、その形態的な制約から利用可能面積はさらに限られる。そのため、利用可能な集団の具体的な規模は、多くの場合竪穴建物1棟分程度であったと思われ、多くても2棟分程度であろう。オープンサイトの遺跡が集団規模の状況により自由に集落地を選地できるのに対し、岩陰遺跡等では大規模集団での利用が本来的に困難なため、小規模集団に限った場合のみの選択肢となる。このことが岩陰遺跡等とオープンサイトの遺跡との最大の相違点である。

③ 岩陰遺跡等が墓地として利用される場合もある。このうち、墓地に特化した利用のⅠ群は極めて例外的で、墓域と生活域を分けて共存するⅡ群が主体であった。埋葬がみられる岩陰遺跡等においても、すべての層（時期）で確認できるわけではない。全体としては墓地を形成するⅠ群・Ⅱ群は少数で、日常的な生活の場として利用したⅢ群が大勢を占める。よって、岩陰遺跡等は基本的に通常の生活を目的とした利用が主であったと考えられ、Ⅰ群などのような限定的な特殊利用は極めて稀であったようである。一部に埋葬がみられるⅡ群についても、同一文化層内において通常の生活痕が残されていることから、墓地としては継続性のない単発的なもの、あるいは通常生活と共存するものであったと理解できる。継続性のない単発的なものは、一時的に墓地として利用する意識が存在した可能性はあるが、その意識は明確に継続されず、次の利用時は日常的な生活の場としての利用が優先されるような状況であったと考えられる（註1）。

④ 遺構・遺物について、岩陰遺跡等の立地A群及びB群では、炉（焼土）などの施設があり、台石や遠隔地からの搬入品を含む一定量の土器・石器などの遺物がみられるなど、オープンサイトの遺跡と比べても全く遜色のない状況である。時として、内容的にオープンサイトの遺跡に勝る場合もみられる。これらから、一定期間の利用とそれらが継続的に繰り返される利用形態Aが想定可能である。岩陰遺跡等は、簡易的、臨時的な利用という印象をもたれがちである。しかし、具体的な遺物・遺構の状況をみてみると、利用形態Aのような利用も多かったことが分かる。この場合、岩陰遺跡等の状況によっては雨風除けの対策が必要になるが、最初から竪穴建物を構築するのに比べれば、その手間ははるかに軽かったと思われる。オープンサイトの遺跡との相違点は、岩陰遺跡等が小集団に限った利用しかできないことであることは前述したが、オープンサイトの遺跡にも小規模な遺跡がある（註2）。このような小規模遺跡のもつ特徴は、岩陰遺跡等と変わることはなく、唯一、オープンサイトを選択した点が異なる。すなわち、利用可能な岩陰等があるかないかの違いのみであったように思われる。一方で、利用形態Bとした岩陰遺跡等の利用があるのも事実である。同じ岩陰遺跡等でも、文化層（時期）により利用形態Aであったり利用形態Bであったりすることから、その利用については岩陰遺跡等が有する諸条件に規制されるのではなく、あくまでも利用する側の都合であったと考えられる。

また、C群と一部のD群は、A群やB群と異なる利用目的に伴う遺地であった可能性を想定したが、これらに属する岩陰遺跡等の調査事例がなく実態は不明である。生活用水確保の困難性などから、一般的には狩猟活動等における極めて短期間の利用や雨宿り的な偶発的利用が想定できる。狩猟活動に係る一時的な利用であっても、好条件の場合は繰り返し利用されることも多かったと思われ、この場合、繰り返しの利用という点では利用形態

Aに近い場合もあると思われるが、1回の利用が短期間ということで利用形態Bとして捉えておく。一定期間の日常的な生活の可能性を想定した概念上の区分けとなるが、A群やB群と異なり、C群と一部のD群の大部分は利用形態Bであった可能性が高い（註3）。

(2) 岩陰遺跡等と縄文時代集落

岩陰遺跡等を含む縄文時代の集落は、以下のような分類・整理が可能である。【集落1】岩陰遺跡等の利用形態Bや、これに相当するオープンサイトの集落である。これらは小規模で、極めて短期間のものである。【集落2】岩陰遺跡等の利用形態Aや、これに相当する竪穴建物1基程度の規模を有するオープンサイトの集落である。竪穴建物1、2棟分程度の小規模集団によるが、一定程度の期間維持され、場合によっては継続して繰り返し利用される。【集落3】集落2の数倍程度の規模をもつ集落で、竪穴建物数棟分程度の集団が生活をする。【集落4】集落3の数倍程度の規模をもつ集落で、竪穴建物5～10棟分程度の大規模集団が生活する。以上の集落1～4の性格や具体的な関係を考えるには、縄文時代における集落、集団、定住、移動、領域等の問題整理が不可欠であるが、紙数の関係からこれらを詳細に整理することはできない（註4）。ここでは、縄文時代集落についての見通しを述べる。

集落1は短期的なもので、集落と言うよりも一時的なキャンプ地的性格をもつ。狩猟・採集活動などに伴う領域内の移動時に利用したものと考えられる。集落2、集落3、集落4で生活を営む集団の一部により形成されたもので、集団が所属する母集落が定住集落であるか否かに関わらず、冒頭に示す集落1の位置づけは変わらない。

集落2は一定期間継続して利用される小規模集落で、オープンサイトでは竪穴建物を構築する場合もある。集落2の位置づけとして2案が考えられる。①通年定住集落（集落3、集落4）から一部集団が別れ、狩猟・採集など季節的な生業のため一定期間拠点とした集落。この場合は、集落2は通年定住集落の下位集落的な位置づけとなる。②地域の生産基盤が脆弱なため、通年定住する集落は形成されず、季節などに応じ集団が領域内を巡る際に形成される集落のひとつとして捉える。地域や季節等の状況により集団規模が変化し、結果として、領域内に集落2、集落3、集落4が形成される。この場合も、比較的長期間生活する中心的な集落とそうでない集落があった可能性はある。また、1年（4シーズン）で一回りし、元の集落に戻るといった計画性のある移動であったか否か、あるいは領域の広さ、生産基盤等により、集落形成の状況や規模も異なってくる。このような中で残された集落は、集落2、集落3、集落4などの規模の大小に関わらず、上位、下位という区別は基本的にない。

集落3、集落4は、1時期に複数の竪穴建物などが存在する集落である。これらの集落の位置づけとして2案が考えられる。①通年定住集落で、生産基盤などの地域的な状況により、集落規模が異なる。集落1、集落2は、この通年定住集落の一部の集団により一時的・季節的に形成される。この場合、何をもって定住集落とするかが大きな問題となる。竪穴建物の構築をもって定住の目安とする考え方もあるが、竪穴建物をもたない旧石器時代集落と竪穴建物をもつ縄文時代集落の各々背景にある何が異なるのか、明らかにする必要があろう。また、貝塚や堅果類の貯蔵穴をもって定住の根拠とする考え方もあるが、季節的に限られた期間にのみ形成される集落により残された可能性もある。②通年定住する集落が形成されるほど生産基盤が安定してない地域で、集団が領域内を巡回するなかで残した集落である。季節などに応じた集団の離合集散があったとすれば、集落3、集落4は全集団員が集まる段階に形成された集落である可能性が考えられ、一部集団により形成されたであろう集落2とは区別される集落で、維持される期間の長さや集落内の施設に違いがあるかもしれない。

県下の縄文遺跡をみると、中期までは丘陵や台地などに立地することが多く、継続的に長期間利用される遺跡もあるが、一時期に限れば比較的小規模な場合が多い。後期になると、平野部への進出が目立ち、石組炉などを伴う定型化した竪穴建物からなる集落出現などの変化がみられるが、多くの場合、一時期の集落規模に極端な変化はないように思われる。後期後半以降になると、大野川上中流域などに大規模な集落が出現する（註5）。これらの集落からは、土掘り具である偏平打製石斧が多量に出土し、原初的農耕の存在が提起されている。この段階の遺跡である竹田市下坂田西遺跡（城戸誠編　2011）は大規模で、集落を区切る溝、広場的空間を取り囲むような竪穴建物配置など、これ以前にはみられなかった集落景観を呈する。以上のように、県下の縄文時代集落の状況は時代や地域により異なることから、先に示した集落1～4の在り方・関係についても、各々の状況に応じた理

解が必要であろう。現状において、大規模で定型化した集落が出現する縄文時代後期後半以降の大野川上中流域は、それ以前と比べ集落の在り方に大きな変化があるように思われる。

本稿では、岩陰遺跡等の理解に関係し、集落を分類し、その性格について①案や②案などの試案を示した。しかし、定住や移動の問題を含む集落の検討は、当時の社会そのものの評価につながる重要なものである。そのため、遺物、遺構、遺跡のさらなる詳細な検討を行い、慎重に検討を重ねていく必要があろう。

なお、本稿を草するにあたり、鵜賀俊一氏（大分県教育庁埋蔵文化財センター）から岩陰遺跡等に関する様々なご教示をいただいた。

註

1　埋葬が確認できる岩陰遺跡等では、墓域が一定の空間に限定される傾向があり、同一文化層内の残余の空間から日常的な利用で残されたと考えられる土器や石器などが出土する。墓域としての利用遺構は、限定的な空間のみ、あるいは一時的なものと考えざるを得ない。

2　例えば東九州における後期の例をみると、豊後高田市の蓮寺田遺跡（河野典之他編　1998）、三六田遺跡（河野典之他編　2002）、国東市安岐町古松市場遺跡（後藤一重編　1997）、豊後大野市朝地町古市下遺跡（後藤一重他編　2014）などでは、竪穴建物跡1棟あるいは1棟相当分のまとまりが確認されるのみである。蓮寺田遺跡では、竪穴建物跡からの遺物出土は極めて少量である。

3　このほか祭祀などの目的も考えられる。いずれにしても、生活用水確保などを考えた時には、一定集団が一定期間、日常生活をするのには困難であるように思われる。ただ、現代人の安易な感覚で決めつけるのは早計であろうから、今後の調査事例の増を待ち再検証が必要である。

4　これらの問題については学史的にも様々な研究があり、現在も多くの研究者により成果が発表されている。個々の研究を紹介し、これらから現状の到達点や課題を整理した後に私見を述べるべきではあるが、スペースの関係から別稿にて改めて検討したい。

5　晩期の遺跡が集中する竹田市の菅生台地などでは、台地縁辺の湧水を中心に、縄文早期、晩期、弥生時代後期～古墳時代前期の集落が重複して存在する。縄文時代早期の範囲が、湧水のある台地縁辺に限られるのに対し、縄文時代晩期は弥生時代と同じように台地中央部まで広く展開する。縄文早期に比べ晩期の遺跡規模が格段に大きいことが分かる。

文献註

賀川光夫　1967ａ「大分県大恵寺鍾乳洞穴」『日本の洞穴遺跡』
賀川光夫　1967ｂ「大分県草木洞穴」『日本の洞穴遺跡』
賀川光夫　1967ｃ「大分県川原田洞穴」『日本の洞穴遺跡』
賀川光夫　1971『大分の考古学』雄山閣
賀川光夫編　1973『野鹿洞穴の研究』別府大学考古学研究報告第3輯
賀川光夫他　1987「原史」『本耶馬渓町史』本耶馬渓町
川越哲史　1968「帝釈名越岩陰遺跡の第一次・第二次調査」『帝釈峡遺跡群の調査研究』3
河野典之他編　1998　『豊後高田地区遺跡群発掘調査概報ＸＶ』豊後高田市教育委員会
河野典之他編　2002　『荒尾地区遺跡発掘調査報告書』豊後高田市文化財調査報告書第9集　豊後高田市教育委員会
城戸誠編　2011『上深迫遺跡、下坂田東遺跡、下坂田西遺跡』竹田市教育委員会
後藤一重編　1997『古松市場遺跡』大分県安岐町教育委員会
後藤一重他編　2014『古市下遺跡・古市上遺跡』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第74集
坂田邦洋　1979「前高洞遺跡の研究」『史学論叢』第10号　別府大学考古学研究室
橋昌信編　1980『大分県二日市洞穴』玖珠郡九重町教育委員会
島袋孝好　1975「消滅した岩陰遺跡」『社会部会研究集報』11
町田利幸ほか　1975「龍宮洞穴遺跡概要」『ぢかたび』第15号
八幡一郎他　1967『日本の洞穴遺跡』

第５章　付章

1　岩鼻岩陰遺跡出土の動物遺体

西本豊弘（国立歴史民俗博物館名誉教授）

岩鼻岩陰遺跡で出土した動物遺体は、長さ1cm以下の小さなものが大部分であった。それらは焼けて割れたものが大部分であったが、歯のエナメル質が残っているものや焼けていない骨片もあることから焼かれずに捨てられたものもあったと思われる。割れ口はスパイラルではなく枯れ枝を割った状態のものが多いことから、後世の縄文人の居住により攪乱されて小さく割れたものが多いと思われる。資料には、発掘時点でナンバーを付けて取り上げられたものと、土壌を「ふるい」にかけて採集された骨片がある。筆者は長さ2mm以上の破片を約10,000点まで数えたが、おそらく出土量は数万点以上であろう。そのため出土地点を適当に選んで、そこで採集された動物遺体を同定し、その結果を地区ごとに表に示した。

まず、貝類ではアカニシと種不明の海産二枚貝片1点が見られた。二枚貝は大きなミルクイではないかと思われるが種は決められなかった。魚類ではエイ類・タイ類・ヒラメの椎骨が1点ずつ見られた。メジロザメ科？は、椎骨1点と歯の破片である。歯はすべて鋸歯のあるタイプで、すべて小さなものであった。ホホジロザメの可能性もあるが、メジロザメ科？としておくこととした。鳥類もごく小量みられたが種は同定できなかった。

動物遺体の主体は哺乳類であり、ニホンイノシシ・ニホンジカ・ニホンカモシカ・ニホンザル・ニホンオオカミ・ニホンアナグマ・タヌキ？・ムササビが認められた。イノシシが最も多く、幼獣・若獣・成獣・雌雄など様々な個体が含まれていた。シカは少ないがカモシカがみられた。シカとカモシカの臼歯はバラバラになると種の区別が難しいので、シカはもう少し多いかもしれない。オオカミは上顎第3切歯1点と下顎第Ｉ後臼歯1点である。第Ｉ後臼歯は後部が欠けているが、おそらく長さ25mm程度であり、ニホンオオカミであることは間違いない。アナグマも上顎犬歯と上顎の第4前臼歯と第Ｉ後臼歯の3点が確認された。タヌキ？とした犬歯は、現生タヌキよりも少し細いのでタヌキ？とした。ニホンザルは歯が数点認められたが、大きさから見て雄が大部分である。雄の「離れザル」を主体に捕獲していたと思われる。

以上、動物遺体の内容を紹介したが、イノシシの小さな骨片が多く、イノシシが残りやすかったのかも知れない。焼骨が多いことも特徴である。調理の時に焼かれたものも多いと思われるが、よく焼かれていることから意図的に儀礼に伴って焼かれたものが多いのではないかと思われる。

この遺跡は、石鏃が多く出土し、様々な動物種が出土することからハンティング・キャンプとして用いられたことが推測される。しかし、海の魚も出土していることから、たんなるキャンプ地ではなく交通の要所という意味もあったのかも知れない。また、この場所の利用の目的は時期によって異なっていたのかも知れない。この問題は石器などの人工遺物や遺構の内容を考慮して推測されるであろう。

表1. 岩鼻岩陰の動物遺体

Ⅰ. 貝類

C4区　海産二枚貝片. C17・18区. アカニシ

Ⅱ. 魚類

A3区. タイ類椎骨(クロダイまたはマダイの中型？)

A4区. メジロザメ科？歯

B6区. メジロザメ科？歯・ヒラメ椎骨(体長30ｃｍ程度の小型)

C11区. メジロザメ科？歯・エイ類椎骨

C16・17区. メジロザメ科？歯

Ⅲ. 鳥類

B4区　種不明中足骨近位部

B6区　種不明左脛骨遠位部・指骨

Ⅳ. 哺乳類

1. A3区

イノシシ右上Ｉ3？・♀左下C・♀右下C・右下Ｉ1・左上腕骨・右上腕骨幼獣・左とう骨近位部2・右とう骨近位部・中手骨または中足骨・末節骨4

シカ右上P2・左上P4・左とう骨近位部

サル右上Ｉ1雄・右上Ｉ2雄♀？・右上M3雄老獣

オオカミ右上Ｉ3・アナグマ右上M1老獣・タヌキ？左上C

2. A4区

イノシシ左下Ｉ2若獣・右下C雄・中節骨・下乳切歯片

シカ右下Ｉ2～C・中節骨

サル右下P2雌？・左下P3雄

3. B1区

イノシシ右尺骨若獣

4. B2区

イノシシ左上P3・シカ中節骨

5. B3区

イノシシ右上Ｉ1・右上P3？・右下P3・右上M3右下顎関節突起・右肩甲骨・右とう骨近位部大腿骨頭・中手骨または中足骨2・中節骨・末節骨

シカ左下P4・左とう骨近位部・末節骨

カモシカ角芯

サル左上M1雄老獣

アナグマ右上C

6. B4区

イノシシ右上M1幼獣・左下P2

シカ左上P2

アナグマ右上P4

ムササビ？左上腕骨近位部

小型獣基礎節

7. B6区

イノシシ右上Ｉ2・右上M1・右下ｉ1・右下P1

シカ角先・中足骨中間部・基節骨・末節骨

カモシカ右距骨

ムササビ切歯片・臼歯

中型獣前臼歯

8．B13区

イノシシ右上M3・右下M3

9. B14区

イノシシ左下顎骨（M23）M3前部のみ摩耗

10. B15区

イノシシ左上顎骨（M3）老獣・左上m4・右下i2・左下顎枝・左肩甲骨

11. C2区

イノシシ左上M3

12. C4区

サル右下M1雄老獣

13. C8区

イノシシ右上P3未出歯

サル右下P4雄・左下M2雄

オオカミ右下M1(後端欠損・現存長24.1・推定長25±・中央幅9.3　単位)

14. C11区

イノシシ左上M3若獣小型(長さ28.5)・右上M3・中手骨または中足骨

シカ歯片

15. C12区

シカ破片1個分

16. C15区

イノシシ左上P3若獣・右上P4・中節骨

サル？歯片2・サル？とう骨片

17. C16・17区

イノシシ歯片

18. C18区

小型獣中手骨または中足骨片

19. 西ベルト

イノシシ右上P3？未出歯

シカまたはカモシカ左上P4小型

20. トレンチ

イノシシ左距骨

シカ右踵骨

21. 地点なし

イノシシ右踵骨

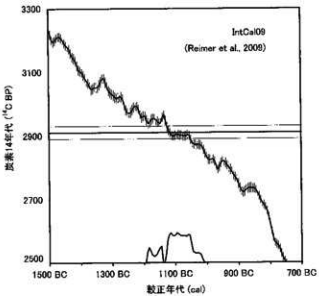
中型陸獣右寛骨片若獣

注 1. 数量の記載のないものは1点。

2. 年齢の記載のないものは成獣。

3. 歯の記号は以下の通り(歯の番号は歯の順番)。I：切歯　i：乳切歯　m：乳臼歯　C：犬歯　P：前臼歯　M：後臼歯

ると、1195-1140calBC（17.1%）、1130-1015calBC（78.3%）である（図2）。δ^{13}C値の測定は加速器の数値で参考値であるが、-26.87±0.23‰で異常は認められない。



試料番号	OIM813-3			
機関番号	PLD-7536			
炭素14年代	2910 ± 20		^{14}C BP	
較正年代	1195 cal BC	-	1140 cal BC	17.1%
	1130 cal BC		1015 cal BC	78.3%
	-		-	-
	-		-	-
	-		-	-
	-		-	-
	-		-	
	-		-	-
	-		-	-
	-		-	-
				95.45%
	中央値		1100 cal BC	
	最頻値		1095 cal BC	

図2　測定試料の較正年代

4　測定結果について

これまで縄文晩期土器についての年代測定は縄文時代の中では比較的多く実施されている。大分県域では大分川川底（上菅生B式：2940±40BP：IAAA-41090）、玉沢地区条里跡遺跡（上菅生B式、2905 ± 30BP(MTC－07427)・2955 ± 30BP(MTC－07426)・2945 ± 35BP(MTC－07428)）などの測定例がある（藤尾・小林2006）。今回、得られた測定値は、それらと近似する測定値である。

近年の研究では、炭素年代で、2990-2940BP頃に入佐式、2955-2905BP頃に上菅生B式(古)、2910-2810BP頃に黒川式（古・新）と（藤尾2014）とされている。なお、入佐式に先行する天城式（後期終末）も上小田宮の前遺跡で3190±40、3160±40、3110±40、3050±40、3040±40、2960±40BP（西本編2009）の測定値がある。これらのことから、今回得られた測定値は、晩期の測定値と判断される。

本稿の測定結果は、「基盤研究(B) 25284153炭素14年代測定による縄紋文化の枠組みの再構築-環境変動と文化変化の実年代体系化」（代表小林謙一）の成果の一部である。暦年較正については今村峯雄、坂本稔の方法に従った。本実験にあたり、江田豊氏・後藤一重氏・高橋信武氏には資料調査から分析まで、さまざまなご配慮をいただいた。また、国立歴史民俗博物館・学術創成研究グループ、北海道大学埋蔵文化財調査室、犬島貝塚調査保護プロジェクトチーム、高橋徹、綿貫俊一の諸先生、諸氏には資料調査や位置づけについて、ご教示、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げたい。

補注1　土器付着物については下記の方法で処理した。

(1)前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄

AAA処理に先立ち、土器付着物については、顕微鏡等で確認し、不純物を除去した。さらに、アセトンに浸け浸透し、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した(2回)。AAA処理として、80℃、各1時間で、希塩酸溶液(1N-HCl)で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去(2回）し、さらにアルカ

リ溶液(NaOH、1回目0.1N、3回目以降1N)でフミン酸等を除去した。アルカリ溶液による処理は、5回以上行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに酸処理2回(1N-HCl 1時間)を行いアルカリ分を除いた後、純水により洗浄した(4回)。

(2)二酸化炭素化と精製:酸化銅により試料を燃焼(二酸化炭素化)、真空ラインを用いて不純物を除去。

AAA処理の済んだ乾燥試料を、500mgの酸化銅とともに石英ガラス管に投じ、真空に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で、850℃で3時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス製真空ラインを用いてこれを分離・精製した。

(3)グラファイト化:鉄触媒のもとで水素還元し、二酸化炭素をグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

1.5mgの炭素量を目標に二酸化炭素を分取し、水素ガスとともに石英ガラス管に封じた。これを電気炉で、およそ600℃で12時間加熱してグラファイトを得た。ガラス管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合させた後、穴径1mmのアルミニウム製カソードに600Nの圧力で充填した。

補注2　測定値について、以下の方法で較正年代を算出した。

年代データの^{14}CBPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した14C年代(モデル年代)であることを示す。^{14}C年代を算出する際の半減期は、5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差(1標準偏差、68%信頼限界)である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の^{14}C/^{12}C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した^{13}C/^{12}C比により、^{14}C/^{13}C比に対する同位体効果を調べ補正する。^{13}C/^{12}C比は、標準体(古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの^{13}C/^{12}C比)に対する千分率偏差δ^{13}C(パーミル、‰)で示され、この値を-25‰に規格化して得られる^{14}C/^{12}C比によって補正する。補正した^{14}C/^{12}C 比から、^{14}C年代値(モデル年代)が得られる。加速器による測定は同位体補正効果のためであり、必ずしも^{14}C/^{13}C/^{12}C比を正確に反映しないこともあるため、バレオ・ラボ測定分については、加速器による測定を参考として付す。

測定値を較正曲線IntCal04(14C年代を暦年代に修正するためのデータベース、2004年版)(Reimer et al 2004)と比較することによって暦年代(実年代)を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは、国立歴史民俗博物館で作成したプログラムRHCal(OxCal Programに準じた方法)を用いている。統計誤差は2標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦 cal BCで示す。( )内は推定確率である。

《参考文献》

藤尾慎一郎・小林謙一-2006「大分市玉沢条里遺跡出土土器に附着した炭化物の炭素14年代測定」『玉沢地区条里跡第7次発掘調査報告』pp.1290140、大分市教育委員会

藤尾慎一郎2014「西日本の弥生稲作開始年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第183集、pp.113-143、国立歴史民俗博物館

西本豊弘編2009『弥生農耕の起源と東アジア』国立歴史民俗博物館

山本直人2007『文理融合の考古学』高志書院

Reimer, Paula J.et al. 2004 IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 Cal Kyr BP Radiocarbon 46(3), 1029-1058(30).

Stuiver,M., Reimer,P.J., Bard,E., Beck,J.W., Burr,G.S., Hughen,K.A., Kromer,B., McCormac,F.G., v.d.Plicht,J., and Spurk,M. (1998): INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon,40(1), 1041-1083

3　岩鼻岩陰遺跡出土の石製装身具の化学分析

大 坪 志 子（熊本大学埋蔵文化財調査センター）

遺跡の所在と性格

遺跡名：岩鼻岩陰遺跡
所在地：大分県豊後高田市大字長岩屋字地主
調査機関：大分県教育庁埋蔵文化財センター
調査担当者：後藤一重
調査期間：平成24年5月8日～9月20日
遺跡の年代：縄文時代前期、中期、後期、晩期、弥生時代早期

分析資料と出土状況

分析を行ったのは、岩鼻岩陰遺跡から出土した石製装身具19点は、明緑色～暗緑色を呈する石材である。これらの石製装身具は縄文時代晩期前半の包含層の土を篩にかけて検出したものである。

試料No.	種類	出土層位	時　期	図 番 号	同定結果
IBIK－001	垂飾	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1- 7（第146図－1747）	Cr白雲母
IBIK－002	勾玉	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1- 1（第146図－1739）	Cr白雲母
IBIK－003	垂飾	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1- 8（第146図－1756）	Cr白雲母
IBIK－004	垂飾	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1- 9（第146図－1752）	Cr白雲母
IBIK－005	垂飾	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1-10（第146図－1754）	Cr白雲母
IBIK－006	勾玉	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1- 5（第146図－1741）	Cr白雲母
IBIK－007	垂飾	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1-11（第146図－1755）	Cr白雲母
IBIK－008	勾玉	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1- 6（第146図－1742）	Cr白雲母
IBIK－009	勾玉	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1- 2（第146図－1740）	滑石
IBIK－010	垂飾	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1-12（第146図－1753）	Cr白雲母
IBIK－011	垂飾	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1-13（第146図－1749）	Cr白雲母
IBIK－012	剥片？	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1-14（第146図－1757）	翡翠(0)
IBIK－013	丸玉	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1- 4（第146図－1746）	翡翠(0)
IBIK－014	垂飾	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1-15（第146図－1748）	Cr白雲母
IBIK－015	管玉？	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1-16（第146図－1744）	Cr白雲母
IBIK－016	垂飾	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1-17（第146図－1750）	Cr白雲母
IBIK－017	垂飾	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1-18（第146図－1751）	Cr白雲母
IBIK－018	小玉	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1- 3（第146図－1745）	Cr白雲母
IBIK－019	垂飾	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1-19（第146図－1743）	Cr白雲母

分析条件

岩鼻岩陰遺跡の資料分析には、熊本大学埋蔵文化財センターの携帯型ハンドヘルド蛍光X線分析計（日本電子株式会社　米国イノベックスシステムズ社）を用いた。測定条件は電流：任意、測定雰囲気：真空、測定範囲：10mmφ、測定時間：120秒である。判定は、北九州市立自然史歴史博物館の森康氏が作成した元素組成計算シートをもとにおこなった。

石材の所見と分析結果

石材の特徴　縄文時代から古墳時代にかけて、玉の石材に利用されている緑色の石材は、クロム白雲母・ヒスイ・碧玉・滑石（蛇紋岩）・緑色凝灰岩などが挙げられる。今回、岩鼻岩陰遺跡から出土した玉類には、分析の結果クロム白雲母、滑石、ヒスイ（オンファス輝石）が使用されていることが明らかとなった。

クロム白雲母の肉眼観察上の特徴は、多くは鮮やかなやや濃いめの緑色を呈し、若干半透明で黄色の斑点や縞が入ること、石英と思われる半透明の白色部分や筋があることである。黄色の斑点や縞がほとんど無い場合や、全体的に色が薄い緑灰色のものもある。クロム白雲母を蛍光X線分析した場合に検出される主な元素は、Al（アルミ）・Si（ケイ素）・K（カリウム）・Cr（クロム）・Ti（チタン）・Fe（鉄）で、KとCrのピークがクロム白雲母の特徴である。

滑石は淡いクリーム色や濃い茶色、青灰色・暗緑色など多様な色彩を持つ。また、蠟のような脂質光沢が特徴である。滑石を蛍光X線分析した場合に検出される主な元素は、Mg（マグネシウム）・Al（アルミ）・Si（ケイ素）・Ca（カルシウム）・Cr（クロム）・Ti（チタン）・Fe（鉄）で、MgとAl とSiとFeのピークが滑石の特徴である。

ヒスイは、「軟玉」「硬玉」の二つを含むが、考古学ではほとんどの場合後者を指している。「硬玉」はヒスイ輝石を90％以上含む岩石のことで、半透明である。その中に様々な鉱物元素が入ることで明緑色～緑色やオレンジ色・紫色の部分が生じる。蛍光X線分析によってヒスイを分析した場合に検出される主要元素はNa（ナトリウム）・Si（ケイ素）・Ca（カルシウム）・Fe（鉄）である。このうち、Naの検出がヒスイか否かの重要な要素となり、ほかCaのピークも特徴である。

分析の結果　岩鼻岩陰遺跡出土の玉類のうち、クロム白雲母に該当する資料は、IBIK-001～008、010～011、014～019の16点である。石材の肉眼観察による特徴は次のとおりである。全体的にこれらのクロム白雲母は、半透明の緑色を呈しており、縄文時代の玉類に見られるクロム白雲母のような濃い緑ではない。また、黄色の斑点や筋も含まれないという特徴がある。この中で、IBIK-009の勾玉で、濃緑と薄い黄緑灰色が縞状になっている。一見滑石のようである。クロム白雲母は変成岩帯で産出し、滑石や蛇紋岩と近接する場所で生成されると考えられる。熊本県太郎迫遺跡の事例では、一つの玉石材を表裏2か所測定したところ、クロム白雲母と滑石の結果を得ており、クロム白雲母と滑石は非常に生成箇所が近接していることが分かる。IBIK-002は滑石に非常に近いクロム白雲母といえる。IBIK-018の小玉は、前体の半分を緑色部分が占めるが半透明の淡い緑で、黄色の斑点が含まれる。半分は半透明の白色部分である。アルミのキラキラとした煌きも観察できる。一見、ヒスイと誤認しやすいクロム白雲母である。このようなクロム白雲母の類似例は、鹿児島県上加世田遺跡や桐木耳取遺跡で確認されている。

滑石に該当するのは、IBIK-009である。暗緑灰色を呈し、独特の脂質光沢がある。

ヒスイに該当するのは、IBIK-012・013の剥片？と丸玉である。これらは、オンファス輝石で、ヒスイに近い鉱物である。オンファス輝石はヒスイ輝石の鉱物の一部が置き換えされ、マグネシウムとカルシウムに富み、アルミニウムやナトリウムが乏しいという特徴がある。ヒスイの緑色分がオンファス輝石であることも確認されている。岩鼻岩陰遺跡の玉類を製作した人はそのような区別をしたとは考えられないため、ヒスイとしておく。

IBIK-012は黒色に近い緑色で、IBIK-013もいわゆるヒスイの明緑ではなくクロム白雲母に近い緑であり、透明性も低い。

玉類の所見

クロム白雲母と判定された玉類の多くは、湾曲した面を持っており、片面に溝があることから管玉を再利用したものと考えられる。

垂飾　管玉を半裁したものや破片に、直径1㎜前後の小さな孔を一つ穿孔して垂飾としている。管玉の痕跡をよく残しているのは、IBIK-3・10・16・19（図1-8・12・17・19）である。研磨をおこない、溝（管玉の孔）を消してしているのがIBIK-1・7・11・14・17（図1-7・11・13・15・18）である。IBIK-7・11は、管玉として利用する際に生じる玉ズレが観察でき、管玉の端部であったことが推察できる。

勾玉　IBIK-002（図1-1）の勾玉は、全体的にゆるい曲線で三日月のようである。IBIK-006（図1-5）は頭部の腹部側が直線的に作られており、縄文時代後晩期に九州一円に盛行するいわゆる「コ」の字勾玉の特徴を呈しているが、当該期の勾玉の事例としてはやや小さい。使用する際の紐ズレによる孔の変形は見られないが、孔の周囲が両面ともすり減り薄くなり、表面の光沢も他所と異なる。両側に玉が連なる形で使用し、玉ズレの結果このような変形が生じたと考えられる。IBIK-008（図1-6）の勾玉は、片面に管玉の孔の痕跡が明瞭に残っている。これは、管玉をある程度の長さで半裁し、頭部と尾部を加工して勾玉に整形したものと考えられる。滑石製のIBIK-009（図1-2）の勾玉は、頭部が欠損しているが、両側からの穿孔の跡から、勾玉と分かる。頭部から尾までがほぼ同じ幅で、尾はすぼまらない。腹部は孔のような曲面で、頭を左に向けた時に上となる面は、腹部を中心に臼状に窪み回転痕が確認できる。このため、この勾玉は滑石製小玉の転用であることが分かる。厚さが5～8㎜程度、直径が12㎜前後の大きめの滑石製小玉は、縄文時代熊本平野で多く見られる。

管玉　IBIK-015（図1-16）は本遺跡唯一の管玉である。穿孔がなく、破損面に研磨が無い。また、再加工されたと思われる他の管玉の本来の大きさと比較すると非常に小型である。両方の端部もこの大きさで管玉として利用されたと考えられる形状をしており、穿孔もこの大きさの管玉に対するものである。このため、管玉と判断した。

小玉　IBIK-018（図1-3）の小玉は、典型的な縄文時代のクロム白雲母製小玉である。孔が紐ズレにより、半透明白色部分方向に延びて涙形に変形している。半透明白色部分を上にして垂下されていたと考えられる。孔の周囲も臼状に凹み光沢が著しい。断面も台形に変形しており、顕著な玉ズレの痕跡を示している。玉ズレの状態から両側には勾玉ではなく、また同じような小玉でもなく、管玉が連ねられていたと考えらえる。

丸玉　IBIK-013（図1-4）の丸玉は直径が約5㎜で、10㎜前後あるる縄文時代の丸玉と比較すると非常に小さい。ヒスイ製丸玉の特徴というべき、断面V字状の孔が穿孔されている。開く側の穴の周囲は光沢があり玉ズレしているかもしれないが、大きな変形は見られない。すぼまる蓋側の穴の周囲も光沢があり玉ズレしていると考えられるが、変形はない。いずれも、紐による変形も見られない。

本遺跡出土資料の意義と課題

岩鼻岩陰遺跡から出土した玉類の多くの石材がクロム白雲母であることが一つの大きな注目点である。クロム白雲母は、上述したように九州においては縄文時代後晩期に玉石材として重用されるが、黒川式期以降には使用が途絶える石材である。そのため、クロム白雲母を利用している点では、これら玉類の帰属時期は縄文時代後晩期と考えらえる。

しかし、これらを縄文時代の玉とするには以下のとおり、いくつかの疑問点が挙げられる。一つは、全体的に小さな形状を嗜好している点である。縄文時代の玉類において、このように細かい破片の垂飾の形態を管見では知らない。今回は、かなり小さいものを篩いにかけて注意深く丁寧に検出しており、これまでの各地の調査では見逃された可能性もなくはないであろうが、管見では初の事例である。

IBIK-015は明らかにこの大きさで製作され、利用された管玉であり、IBIK-019もIBIK-015程度の管玉の再利用である。クロム白雲母製管玉のなかで、管見では最小クラスである。直径が4mm前後、長さ6mm程度の小さな管玉は、長崎県中村遺跡と大分県求来里平平島遺跡の2例がある。中村遺跡は弥生時代の石棺墓出土の事例である。

次に、今回出土した垂飾に穿孔された孔の大きさは、直径が1mm前後と非常に小さく、縄文時代後晩期の玉類では、類例を知らない。縄文時代後晩期の玉類は、ヒスイ製以外のものは、ほとんどが両側から穿孔される。両側からあけられた孔が繋がる分が1mm程度の小さな孔であることはあっても、いわば入り口にあたる部分の孔の直径は最小でも1.5～2mm程度の大きさがある。本遺跡の玉の穿孔技術は、他の縄文時代後晩期玉類の穿孔技術とは異なると思われる。

このようにみると、本遺跡の玉類は石材の点では縄文時代後晩期の玉と考えられるが、形態や最終的に残された技術的特徴においては後世に縄文時代後晩期の玉を再利用した玉類である可能性が高い。現在、管見として確認している約290点のクロム白雲母製管玉のなかで、岩鼻岩陰遺跡で再利されたほどの小さなものは上記の2例である。このような小型の事例が、今後縄文時代後晩期の管玉の通有の形態と認識できる程度に増加する可能性は低いであろう。それは、穿孔技術とも連動するからである。

縄文時代後晩期のクロム白雲母製玉は、古墳出土の玉に混入している事例が散見でき、おそらく後世に拾われるなどの偶然の機会に使用されたと考えられる。そうした中、後世にクロム白雲母製玉もしくは原石を加工した遺跡がある。大分県若宮八幡遺跡の古墳時代のＳＨ135号竪穴住居址からは、多量の玉類が出土しているが、この中にクロム白雲母製小玉の未製品が含まれている。実見・分析は未実施であるが、カラー写真で見る限りクロム白雲母であろう。面取りし、穿孔と研磨を残す段階のものである。ある程度の大きさをもつ勾玉か素材（原石）を利用したと考えらえる。

岩鼻岩陰遺跡の事例は、縄文時代後晩期の玉類の再利用が明確に確認できる。また、時代は異なるが若宮八幡遺跡に続き大分県でクロム白雲母が縄文時代後晩期以降に利用されたことを示す2つ目の事例となる点で、重要である。クロム白雲母の利用は、現況では縄文時代晩期前葉で終息すると考えらえるが、引き続き利用される地域があるのか、その場合に背景は何かなど、大きな課題を提唱する可能性がある。クロム白雲母という石材の流通の追跡調査の対象を、縄文時代に限るべきではないことを強く示唆する資料として、本資料の出土意義は大きい。

図1　岩鼻岩陰遺跡出土玉類実測図

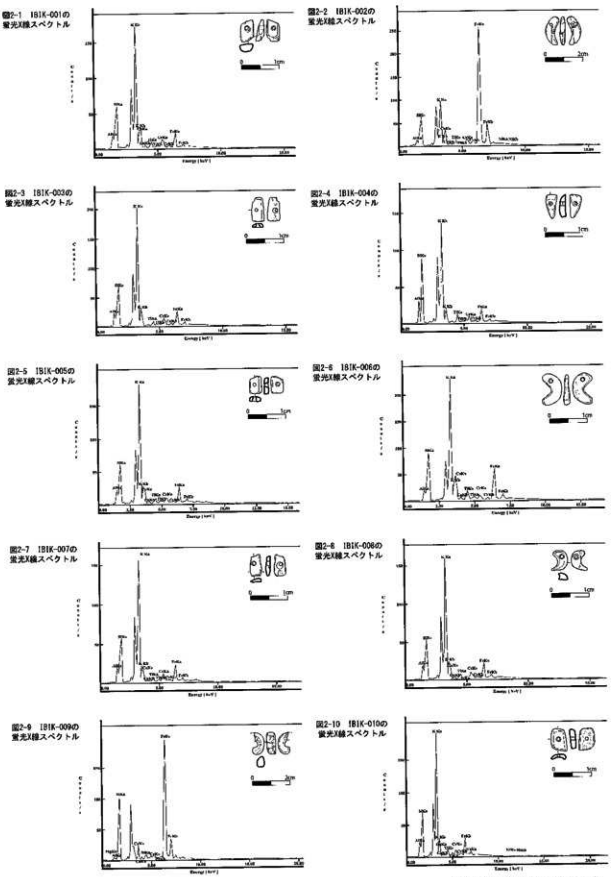


図2　岩鼻岩陰遺跡出土玉類の蛍光X線スペクトル（1）

図3-1 IBIK-011の蛍光X線スペクトル

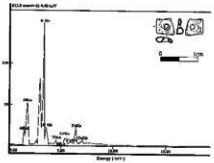


図3-2 IBIK-012の蛍光X線スペクトル

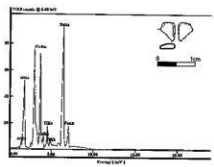


図3-3 IBIK-013の蛍光X線スペクトル

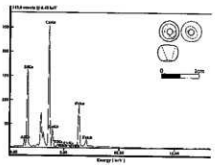


図3-4 IBIK-014の蛍光X線スペクトル

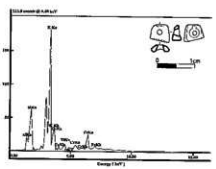


図3-5 IBIK-015の蛍光X線スペクトル

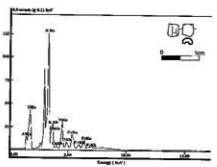


図3-16 IBIK-016の蛍光X線スペクトル

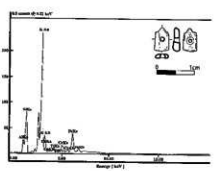


図3-7 IBIK-017の蛍光X線スペクトル

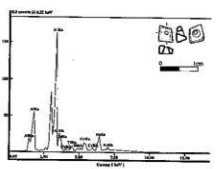
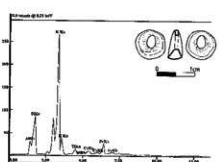


図3-8 IBIK-018の蛍光X線スペクトル



実測図はは S＝1/1

図3-9 IBIK-019の蛍光X線スペクトル

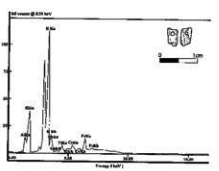


図3　岩鼻岩陰遺跡出土玉類の蛍光X線スペクトル（2）

岩鼻岩陰遺跡出土土器観察表①

掲載番号	遺物番号	層位	器種	特徴	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面	内面	色調	焼土 周囲の赤化	焼土 底面	焼土 その他	備考
					縦横 (1.125m×1.1m)			胴部～底部						
14	1	G1	深鉢	縄文中期				縄文 ヨコナデ 口縁	ナデ	にぶい赤褐色	○	○	○	
	2	G1	深鉢	縄文中期				隆帯文様 ナデ	ナデ	黒褐色	△		△	
	3	H1	深鉢	縄文中期				ナデ 粗点文	ナデ	にぶい橙～褐灰色	△	△	○	
	4	H1	深鉢	縄文中期				キャリパーの条痕	縄文 条痕 刺突	灰黄色	△	△	△	表面ススが
	5	C1	深鉢	縄文中期				ナデ 縄文	ナデ 縄文	褐灰色	△		△	表面ススが
	6	C1	深鉢	縄文中期				条痕後ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	△	△	△	
	7	C1	深鉢	縄文中期				連続刺突文	ナデ	黄橙色		△		
	8	C1	深鉢	縄文中期			(7.2)	ナデ	ナデ	黒色	△		△	
	9	C1	深鉢	縄文中期			(8.4)	ナデ	ナデ	明黄褐色		△		
	10	B2/C2	深鉢	縄文中期				ナデ 刻目帯 隆帯	ナデ	黒褐色	△	△	△	表面ススが
	11	A2	深鉢	縄文中期				刻目帯 隆帯 無節L	ナデ	黒褐色				表面ススが
	12	D2	深鉢	縄文中期				キャリパー 縄文 沈線 櫛状歯	ナデ	黒褐色	△	○	○	表面ススやタール
	13	C2	深鉢	縄文中期				縄文	条痕	黒褐色	△		△	
17	14 (2~G3)	B2/A4	深鉢	縄文中期	(30.0)		(22.8)	縄文	ロクロ目の条痕	明褐～灰黄褐	△	○	△	
	15	C3	深鉢	縄文中期				条痕	縄文 条痕	褐灰色	△	△	△	
	16	C2	深鉢	縄文中期				縄文 ナデ 波状帯	横ハケ ナデ のち ナデ	褐色	△		△	
	17	C3	深鉢	縄文中期				条痕	条痕	黒色	△	△	△	
	18	C3	深鉢	縄文中期				強い 丸み 波状	縄文	黒褐色	△		△	
	19	C3	深鉢	縄文中期				沈線 ボタン状貼付 条痕	キャリパーのナデ	にぶい赤褐色～暗褐色	○	○	△	
	20	D3	深鉢	縄文中期				キャリパー 条痕	条痕	にぶい黄褐色		△		
	21	C3	深鉢	縄文中期			(7.8)	条痕のキャリパー	ナデ	褐色	△	○	○	
	22	D3	深鉢	縄文中期				隆帯の先端	ナデ 指ナデ	にぶい褐色	○	△	△	表面ススが
	23	B3	深鉢	縄文中期				隆帯の先端	ナデ 縦ハケ	褐灰色	○	△	△	表面ススが
	24	D3	深鉢	縄文中期				ナデ	指ナデ	黒褐色	○		○	表面ススが
	25	A1/A2	鉢等	縄文中期				縄文 条痕	縄文	褐色		△		
	26	A3	深鉢	縄文中期				縄文 刻目帯	縄文	褐灰色～黒褐色	△		△	表面ススがない
	27	B3	深鉢	縄文中期				ナデ のち 沈線 区画のもの	条痕	にぶい褐色～明褐色	△		○	
	28	A3	深鉢	縄文中期				縄文	縄文	褐色				
	29	A3	深鉢	縄文中期	(26.0)			縄文	条痕	褐色				
	30	A3	深鉢	縄文中期				条痕のの沈線	条痕 ナデ	褐色	○		○	
	31	B3	深鉢	縄文中期				縄文	条痕	褐色～黒褐色	△	○	△	○
22	32	A3	深鉢	縄文中期				縄文	条痕	褐色	△		△	
	33	A3	深鉢	縄文中期				縄文	条痕	褐色	△	△	△	
	34	B3	深鉢	縄文中期				縄文	条痕	褐色	△	△	△	
	35	A3	深鉢	縄文中期				隆帯	条痕	褐色	△	△	△	
	36	B3	鉢	縄文中期				隆帯交差	ナデ	褐色		○	△	
	37	B1	深鉢	縄文				ナデ のち 強い 丸み	ナデ	赤褐色		○	△	
	38	B4	深鉢	縄文中期				ナデ のち 丸み	不明	にぶい黄褐色		△	△	
	39	D4	深鉢	縄文中期				条痕のち強い丸み	ナデ	灰白色	△	○	△	△
	40	C4	深鉢	縄文中期				沈線	研磨	黄褐色	△			
	41	D4	深鉢	縄文中期				沈線	研磨	灰褐色	△			
	42	D4	深鉢	縄文中期				沈線	ナデ	にぶい褐灰色	○	○	△	△
	43	C4	深鉢	縄文中期				研磨	ナデ	灰褐色	△			
	44	D4	深鉢	縄文中期				研磨 ナデ	研磨	灰褐色	△			
	45	D4	深鉢	縄文中期				ナデ ヨコナデ	ナデ	褐灰色		○	△	
	46	D4	深鉢	縄文中期				沈線 縄文	研磨	褐灰色	△		△	
	47	D4	深鉢	縄文中期				沈線 ナデ	ナデ	にぶい赤褐色		○	△	
	48	D4	深鉢	縄文中期				沈線	研磨	褐色				
	49	D4	深鉢	縄文中期				沈線 ナデ 研磨	研磨	褐色				
	50	D4	深鉢	縄文中期				研磨	研磨	褐色				
	51	D4	深鉢	縄文中期				研磨	研磨	褐色				
	52	A3	深鉢	縄文中期				縄文	研磨	褐色	△		△	
	53	A3	深鉢	縄文中期				縄文	研磨	褐色	△		△	
	54	A3	深鉢	縄文中期				縄文	研磨	褐色	△	△	△	
	55	A3	深鉢	縄文中期				縄文	研磨	褐色	△	△	△	
	56	B3	皿	弥生中期				研磨交差	ナデ	赤褐色		○	△	
	146	B1	深鉢	縄文				ナデ のち 丸み	ナデ	赤褐色		○	△	
	147	B1	深鉢	縄文				ナデ のち 丸み	不明	にぶい黄褐色		△	△	
	148	B4	深鉢	縄文中期				条痕のち強い丸み	ナデ	灰白色	△	○	△	△
	149	D4	深鉢	縄文中期				沈線	研磨	黄褐色	△			
	150	C1	深鉢	縄文中期				沈線	研磨	灰褐色	△			
	151	C4	深鉢	縄文中期				沈線	ナデ	にぶい褐灰色	○	○	△	△
	152	D4	深鉢	縄文中期				研磨	ナデ	灰褐色	△			
	153	C4	深鉢	縄文中期				研磨	研磨	灰褐色	△			
	154	C4	深鉢	縄文中期				研磨	研磨	灰褐色	△			
	155	D4	深鉢	縄文中期				研磨 ヨコナデ	ナデ	褐灰色	○	○	△	△
	156	B4	深鉢	縄文中期				沈線 縄文	ナデ	褐色	△	△	○	
	157	C4	深鉢	縄文中期				研磨 縄文 沈線	研磨	にぶい褐色				
	158	D1	深鉢	縄文中期				縄文 ナデ	ナデ	褐色		△	△	
	159	C1	深鉢	縄文中期				縄文 ナデ	ナデ	褐色	△	○	○	表面ススがない
	160	B4	深鉢	縄文中期				ナデ 強い丸み	ナデ	褐灰色		○		
	161	B4	深鉢	縄文中期				沈線	ナデ	褐灰色～黒褐色	△	○		表面ススがない
29	162	B4	深鉢	縄文中期				条痕 ナデ	ナデ	にぶい黄褐色～褐灰色	○	○		
	163	B1	深鉢	縄文中期				条痕	刻目帯状	にぶい褐色				
	164	B1	深鉢	縄文中期				縄文	条痕	褐色	△	△	○	
	165	B4	深鉢	縄文中期				ナデ 刻目(又は条痕)	条痕	褐色	△	△	○	
	166	B1	深鉢	縄文中期			(8.4)	条痕	ナデ 指押さえ	にぶい褐色			△	
	167	D4	深鉢	縄文中期			(8.0)	ナデ	ナデ	にぶい褐色	△	○	△	
	168	D4	深鉢	縄文中期			(8.0)	ナデ	ナデ	にぶい褐色	○	○	○	
	169	B4	深鉢	縄文中期				縄文	ナデ	にぶい褐色～黒褐色	△	○	○	表面ススがない
	170	D4	深鉢	縄文中期				条痕文 波状	条痕	褐色～黒褐色	△	△	○	
	171	B4	深鉢	縄文中期				ナデ 口縁部は刻目帯又は沈線による押引き	ナデ	にぶい褐色	○	△	△	
	172	B4	深鉢	縄文中期				沈線 縄文	ナデ 縦ハケ	にぶい褐色～褐色	△	○	△	
	173	B4	深鉢	縄文中期				縄文	条痕	にぶい褐色～黒褐色				
	174	B4	深鉢	縄文中期				縄文	ナデ	黒褐色～黒褐色	○	○	△	
	175	B4	深鉢	縄文中期				縄文	ナデ 研磨	黒褐色～にぶい褐色	○	○	△	内面ススが一部有
	176	B4	深鉢	縄文中期				縄文	ナデ 研磨	灰褐色～にぶい黄褐色	○	○	△	内面ススが 一部有
	177	B4	深鉢	縄文中期				ナデ	ヨコナデ	灰褐色	○	△	△	
	178	B4	深鉢	縄文中期				ナデ	ナデ	褐色		△	△	
	179	B4	深鉢	縄文中期				ナデ 縄文 条痕後	ナデ(指押圧)	にぶい褐橙色～灰黄褐色	△	△	△	
	180	B4	深鉢	縄文中期				条痕	ヘラ状工具によるナデ	褐色	△	○	○	
	181	B4	深鉢	縄文中期			(7.4)	ナデ	キャリパーのナデ	褐色	△		○	表面ススがない
	182	B4	深鉢	縄文中期			(8.0)	ナデ	ナデ	褐色	△	○	○	表面ススが
	183	B4	深鉢	縄文中期			(8.2)	ナデ 波状帯文	ナデ	にぶい褐色	○	○	○	
	184	B4	深鉢	縄文中期			9.0	隆帯	条痕	褐色～黒褐色	○	○	△	
	185	C4	深鉢	縄文中期				沈線	条痕	褐色～にぶい褐色		△		
	186	C4	深鉢	縄文中期				条痕	ナデ	褐色	△		△	
	187	C4	深鉢	縄文中期				条痕	条痕	にぶい褐色				
	188	D4	鉢	弥生中期				ナデ	ヒガキの後 ヨコ系 条痕	褐色	△	△	△	
	189	D5	深鉢	縄文晩期				沈線 ナデ	研磨	黒褐色	○	○	○	
	190	D5	深鉢	縄文晩期				工具ナデ	ナデ	褐灰色	△	○	○	
	191	D5	深鉢	縄文晩期				条痕	ナデ	褐灰色		○	○	
	192	D5	深鉢	縄文晩期				沈線 研磨	研磨	黒褐色～黒灰色	○	○	△	
	193	D5	深鉢	縄文晩期				研磨 研磨	研磨 ヘラ状	褐灰色	△	○	○	
	194	D5	深鉢	縄文晩期				研磨	ナデ	褐灰色		○	○	
	195	D5	深鉢	縄文晩期				研磨 研磨	研磨	褐灰色～黒灰色	○	○	△	
	196	D5	深鉢	縄文晩期				研磨	研磨 ヘラ状	褐灰色	○	○	△	
	197	D5	深鉢	縄文晩期				研磨 研磨 研磨	研磨	褐灰色	△		△	
30	198	D5	深鉢	縄文晩期			(8.0)	研磨	ナデ	にぶい褐色～灰褐色	△	△	△	
	199	D5	深鉢	縄文晩期			(10.6)	ナデ	ナデ	にぶい褐色	○	○	△	
	200	D5	深鉢	縄文晩期			(9.0)	ナデ 波状帯文	ナデ	褐灰色	○	○	○	
	201	D5	深鉢	縄文晩期			(10.6)	研磨	ナデ	褐灰色	○	○	○	
	202	D5	深鉢	縄文晩期				研磨	研磨	褐灰色	○	○	○	
	203	D5	深鉢	縄文晩期				研磨 ヨコナデ 波状	ナデ	にぶい褐色～褐灰色	△	△	△	
	204	D5	深鉢	縄文晩期				ハケ目の条痕 刻目 突帯文	研磨 研磨	褐灰色～黒褐色	△	△	△	
	205	D5	深鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	研磨 研磨	褐灰色	△	△	△	
	206	D5	深鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	ナデ	にぶい褐色	△	△	△	
	207	D5	深鉢	縄文晩期				条痕 沈線 研磨 ナデ 工具によるナデ	ナデ 後続い研磨	にぶい褐色～黒褐色		△	△	

岩鼻岩陰遺跡出土土器観察表②

調査番号	遺物番号	測量民点	部位	特徴	法量 口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整・文様 外面	内面	胎土 角閃石	石英	長石	その他	備考
	196	B6	胴部	縄文後期				ナデ 単位 比地	不見による ナデ	普通色	△		△	
	197	B5	胴部	縄文晩期				ナデ 中方向の指整工具 ナデ	研磨	にぶい黄色	△	△	△	
	198	A5	底部	縄文晩期				中方向のナデ	縦方向のナデ	にぶい黄橙	△		△	
	199	B5	胴部	縄文晩期				ナデ 指圧痕	ナデ 研磨	にぶい黄橙色	△	○	○	
	200	B6	胴部	縄文晩期				ナデ 沙痕	研磨	褐色	○	△	△	
	201	A5/A6	口縁部	条痕文後期				研磨 研磨	研磨	黒褐色	△		△	
	202	A6	胴部	縄文晩期				縄縄文	研磨	明褐色	△		△	
	203	B5	胴部	縄文後期				縄文	ナデ	褐色	△		△	
	204	B6	胴部	縄文後期				縄文 ナデ 一単縄前	ナデ	赤褐色	○	○	△	
	205	A5	胴部	縄文後期				中方方向の指圧 同上	方向の方向の多調	明黄褐色	△		○	
	206	A5	胴部	縄文晩期				縄文 沙痕 研磨	研磨	赤褐色				内面上部ススが付着
	207	B6	胴部	条痕文後期				条痕 比較文	ナデ	褐色	○	△	○	
38	208	A5	胴部	条痕文後期				条痕 比較文	条痕	明黄褐	△	△		
	209	B6	胴部	縄文中期				ナデ 比較 縄文	ナデ ...前貫通痕	にぶい褐色	△		△	外面煤付
	210	B6	胴部	縄文中期				ナデ 口縁部横撫	ナデ	にぶい黄色		△	△	
	211	B5	胴部	縄文後期				ナデ 口縁部横撫	口縁部直線撫 ナデ	明黄褐色		△	△	
	212	A5	胴部	縄文中期				縄文	ナデ	にぶい黄橙～灰褐色	△		△	
	213	B5	胴部	縄文中期				撫文 撫撫 結合	ナデ/方向ナデ	にぶい褐色	○	○	△	金雲母少
	214	B4	胴部	縄文中期				撫撫 文様	ナデ	褐色	○	○	△	金雲母少
	215	B6	胴部	縄文中期				ナデ 刺突文	研磨	褐色	△			外面煤付
	216	B6	胴部	縄文				ナデ/方向撫 ナデ 方調整	研磨	にぶい褐色～明褐色	△	△	○	
	217	B6	胴部	縄文後期				ナデ 研磨	ナデ	にぶい褐色	△		△	
	218	B5	胴部	縄文				条痕 ナデ	ナデ/方向撫撫撫ナデ	にぶい褐色	△		△	
	219	B5	胴部	縄文中期				撫撫 縄文	ナデ	にぶい黄橙～灰褐色	△	△	△	
	220	B6	胴部	縄文中期				ナデ	ナデ	にぶい褐色～明褐色	△	△	△	
	221	B5	胴部	縄文	(8.4)			ナデ ナデ方向ナデ	二方による ナデ	明褐色	△	○	○	
	222	C5	胴部	縄文後期				指圧痕 結節撫文	研磨	褐色	△		△	
	223	C5	胴部	撫文中期				撫文 ナデ 比較	研磨	褐色	△			
	224	A5	胴部	撫文中期				撫撫 ナデ 結合 撫撫	研磨	明黄褐色	△		△	
	225	B5	胴部	縄文中期				結合撫 縄文	研磨	褐色	△	○		
	226	C5	胴部	縄文中期				圧痕撫 縄文	ナデ	褐色	△		△	
	227	C5	胴部	縄文中期				ナデ 縄文 圧痕撫	ナデ	赤褐色～明赤褐色				
	228	B6	胴部	縄文中期				ナデ 沙痕撫	ナデ	にぶい黄橙色	△	△	△	
	229	B5	胴部	縄文中期				縄文	ナデ	褐色	△		△	
	230	C5	胴部	縄文後期				ナデ/方向ナデ 研磨(石磨)	施工 指の痕	明褐色	△	○	○	金雲母多
	231	B5	胴部	縄文中期				ナデ	研磨	明褐色				内面ススが付着
	232	A5	胴部	縄文中期				研磨	研磨	褐色	△		△	
	233	C5	胴部	縄文後期				研磨 ナデ 結合	研磨	褐色	△		△	
	234	B5	胴部	縄文中期	(10.0)			方向ナデ 条痕～ナデの多調	研磨	明褐色～にぶい褐色	△			
	235	D4	底部	縄文晩期	(10.4)			結合撫	研磨	褐色	△	○	○	
	236	D6	底	弥生中期				研磨 沙痕 条痕	研磨	褐色	△	△	△	
	237	D6	底	弥生中期				研磨 ナデ	研磨	褐色	△		△	
	238	D6	胴部	縄文晩期				ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	239	B6	胴部	縄文晩期				研磨 比較	研磨	褐色	△		△	内面ススが付着
	240	D6	胴部	縄文晩期				ナデ 条痕ナデ	研磨	明褐色				
	241	B6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	研磨	褐色	△		△	
	242	B6	胴部	縄文晩期				研磨 比較	研磨	褐色	△		△	
	243	D6	胴部	縄文晩期				研磨 比較	研磨	褐色	△		△	
	244	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	研磨	褐色	△		△	
	245	B6	胴部	縄文晩期				研磨 比較	研磨	褐色	△		△	
	246	D6	胴部	縄文晩期				ナデ/方向の研磨	研磨	褐色	△		△	
	247	B6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ 研磨の調整	研磨	褐色	△		△	
	248	D6	胴部	縄文晩期				ナデ 比較 上方ナデ	研磨	褐色	△		△	
	249	D6	胴部	縄文晩期				ナデ 条痕ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	250	D6	胴部	縄文晩期				比較 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	251	D6	胴部	縄文晩期				研磨 比較	研磨	褐色	△		△	
	252	B6	胴部	縄文晩期				研磨 比較 研磨	研磨	褐色	△		△	
	253	B6	胴部	縄文晩期				研磨	研磨	褐色	△		△	
	254	B6	胴部	縄文晩期				研磨 比較 上方ナデ	研磨	褐色	△		△	
	255	D6	胴部	縄文晩期				研磨 比較	研磨	褐色	△		△	
	256	D6	胴部	縄文晩期				研磨 比較 研磨	研磨	褐色	△		△	
	257	B6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	258	D6	胴部	縄文晩期				研磨 比較	研磨	褐色	△		△	
	259	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ 研磨の調整	研磨	褐色	△		△	
	260	D6	胴部	縄文晩期				研磨 比較 上方ナデ	研磨	褐色	△		△	
	261	B6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	262	B6	胴部	縄文晩期				研磨 比較	研磨	褐色	△		△	
	263	D6	胴部	縄文晩期				研磨 比較 研磨	研磨	褐色	△		△	
	264	D6	胴部	縄文晩期				研磨 比較	研磨	褐色	△		△	
	265	B6	胴部	縄文晩期				研磨 比較	研磨	褐色	△		△	
	266	D6	胴部	縄文晩期				ナデ/方向の研磨	研磨	褐色	△		△	
	267	B6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ 研磨の調整	研磨	褐色	△		△	
	268	D6	胴部	縄文晩期				ナデ 比較 上方ナデ	研磨	褐色	△		△	
	269	D6	胴部	縄文晩期				ナデ 条痕ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	270	D6	胴部	縄文晩期				比較 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	271	B6	胴部	縄文晩期				研磨 比較	研磨	褐色	△		△	
	272	B6	胴部	縄文晩期				研磨 比較 研磨	研磨	褐色	△		△	
	273	B6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	研磨	褐色	△		△	
	274	B6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ 研磨の調整	研磨	褐色	△		△	
	275	B6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	276	B6	胴部	縄文晩期				ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	277	B6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	278	B6	胴部	縄文晩期				研磨 比較	研磨	褐色	△		△	
	279	B6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ 研磨の調整	研磨	褐色	△		△	
	280	B6	胴部	縄文晩期				研磨 比較	研磨	褐色	△		△	
	281	B6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	282	B6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ 研磨の調整	研磨	褐色	△		△	
	283	B6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	284	B6	胴部	縄文晩期				研磨 比較	研磨	褐色	△		△	
	285	B6	胴部	縄文晩期				研磨 比較 研磨	研磨	褐色	△		△	
	286	B6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ 研磨の調整	研磨	褐色	△		△	
	287	B6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	288	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ 研磨の調整	研磨	褐色	△		△	
	289	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	290	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	291	B6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	292	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	293	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	294	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	295	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	296	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	297	B6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	298	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	299	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	300	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	301	B6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	302	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	303	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	304	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	305	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	306	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	307	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	308	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	309	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	310	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	311	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	312	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	313	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	314	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	315	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	316	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	317	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	318	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	319	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	320	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	321	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	322	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	323	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	324	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	325	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	326	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	327	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	328	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	329	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	330	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	331	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	332	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	333	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	334	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	335	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	336	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	337	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	338	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	339	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	340	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	341	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	342	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	
	343	D6	胴部	縄文晩期				研磨 ナデ	ナデ	褐色	△		△	

岩鼻岩陰遺跡出土土器観察表③

層位	遺構番号	器種	器種	特徴	法量 口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整・文様 外面	内面	胎土	焼成	色調	備考
45	443	36	深鉢	隆文土器				隆文	ナデ	石英・長石・雲母	△	△	
	444	116	鉢形	縄文土器				ナデ	ナデ	石英・長石	△	△	
	445	42	深鉢	縄文土器				条痕	条痕	石英・長石			赤彩
	446	90	深鉢	縄文中期				隆文 沈線	ナデ 条痕	石英・長石	△	△	△
	447	95	深鉢	縄文				ナデ	ナデ 一部条痕・研磨	石英	△	△	△
	448	116	深鉢	縄文				研磨	研磨	石英・長石・ハンモック・雲母	△		△
	449	90	浅鉢	縄文				ナデ	ナデ	石英・長石			○
	450	95	深鉢	縄文中期				隆文 ナデ	ナデ	石英			
	451	95	深鉢	縄文中期				条痕	研磨	石英・長石			
	452	95	深鉢	縄文中期		(10.6)		指押さえ ナデ	ナデ	石英・長石	○		
	453	95	深鉢	縄文中期				底部	横位に丁寧にミガキ	石英・雲母	○	○	
	454	16-2	深鉢	弥生中期				胴部無文 条痕	ナデ	雲母	○	○	△
	455	16-2	壺	弥生中期				ナデ 櫛状沈線 条痕	ナデ	石英・長石	△	○	△
	456	16-2	深鉢	縄文後期				沈線付 ナデ	ナデ	石英・長石	△	△	△
	457	16-2	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	石英・長石	△	△	△
	458	16-2	深鉢	縄文後期				櫛・研磨	櫛・研磨	石英・長石	△	△	△
	459	16-2	深鉢	縄文後期				ハケ目の条痕 沈線	ナデ	石英・長石・雲母	○	○	△
	460	16-2	深鉢	縄文後期				底部	研磨	石英・長石	○		○
	461	16-2	深鉢	縄文後期				底部	沈線付 ナデ	雲母・長石	△	△	△
	462	16-2	深鉢	縄文後期				底部	沈線付 ナデ	雲母・長石	△	△	△
	463	16-2	深鉢	縄文後期				底部	ナデ	雲母・長石・ハンモック	○	△	△
	464	16-2	深鉢	縄文後期				底部	沈線付 ナデ	雲母・長石	○	△	△
	465	16-2	深鉢	縄文後期				底部	ナデ	雲母・長石	○	△	△
	466	16-2	深鉢	縄文後期				底部	沈線付 ナデ	雲母・長石・ハンモック	○	△	△
	467	16-2	深鉢	縄文後期				底部	沈線付 ナデ	雲母・長石	○	△	△
	468	16-2	深鉢	縄文後期				底部	沈線付 ナデ	雲母・長石・ハンモック	○	△	△
	469	16-2	深鉢	縄文後期				底部	ナデ	雲母・長石	○	△	△
	470	16-2	深鉢	縄文後期				底部	ナデ	雲母・長石	○	△	△
	471	16-2	深鉢	縄文後期				底部	櫛・亀ノ甲状研磨	雲母・長石	○	△	△
50	502	16-2	深鉢	縄文後期				底部	沈線付	雲母・長石	○	△	△
	503	16-2	深鉢	縄文後期				底部	ナデ	雲母・長石	○	△	△
	504	16-2	深鉢	縄文後期				底部	ナデ	雲母・長石	○	△	△
	505	16-2	深鉢	縄文後期				沈線付 ヨコ方向の条痕 ヨコ方	沈線付	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	△	○
	506	16-2	深鉢	縄文後期				沈線付 ヨコ方向の条痕	ナデ	雲母・長石	○	△	○
	507	16-2	深鉢	縄文後期				沈線付 ヨコ方向の条痕	ナデ	雲母・長石・ハンモック	○	△	△
	508	16-2	深鉢	縄文後期				条痕 工具ナデ	条痕	石英・長石・ハンモック	△	○	△
	509	16-2	深鉢	縄文後期				条痕 ナデ	ナデ	雲母・長石	○	○	○
	510	16-2	深鉢	縄文後期				沈線付 ナデ	ナデ	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	△	△
	511	16-2	深鉢	縄文後期				沈線付 ナデ	ナデ	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	△	△
	512	16-2	深鉢	縄文後期				沈線付 ナデ	ナデ	雲母・長石	○	△	△
	513	16-2	深鉢	縄文後期				沈線付 ナデ ヨコ方向の条痕	沈線付 沈線	雲母・長石			
	514	16-2	深鉢	縄文後期				沈線付 ナデ	沈線付	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	△	△
	515	16-2	深鉢	縄文後期				沈線付 ナデ	ナデ	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	△	△
	516	16-2	深鉢	縄文後期				沈線付 ナデ	ナデ	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	△	△
	517	16-2	深鉢	縄文後期				沈線付 ナデ	沈線付	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	△	△
	518	16-2	深鉢	縄文後期				沈線	研磨	雲母・長石	○	△	△
	519	16-2	深鉢	縄文後期				沈線	沈線付	雲母・長石・ハンモック・雲母	C	○	△
	520	16-2	深鉢	縄文後期				沈線付 沈線 ナデ	沈線付	雲母・長石	○	△	△
	521	16-2	深鉢	縄文後期				沈線付 沈線 ナデ	ナデ 沈線付	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	△	△
	522	16-2	深鉢	縄文後期				沈線付 沈線 ナデ	沈線付 ナデ	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	△	△
	523	16-2	深鉢	縄文後期				沈線付 沈線 ナデ	沈線付 沈線 ナデ	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	△	△
	524	16-2	深鉢	縄文後期	(26.0)			ハケ目の条痕 沈線	ヨコ方向の研磨	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	△	○
	525	16-2	深鉢	縄文後期				沈線付 沈線 ヨコ方向	沈線付 ヨコ方向	雲母・長石・ハンモック・雲母	△	△	△
	526	16-2	深鉢	縄文後期				沈線付 沈線 ナデ	沈線付 沈線 ナデ	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	△	△
	527	16-2	深鉢	縄文後期				沈線付 沈線 ヨコ方向	沈線付 ヨコ方向	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	△	△
	528	16-2	深鉢	縄文後期				研磨	研磨	雲母・長石	△	○	△
	529	16-2	深鉢	縄文後期				沈線 ハケ目の条痕 ヨコ方	ハケ目の条痕	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	○	△
51	530	16-2	深鉢	縄文後期				ナデ 隆文 沈線	ナデ	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	○	△
	531	16-2	深鉢	縄文後期				櫛状施文 ナデ	研磨 条痕	雲母・長石	△	△	○
	532	16-2	深鉢	縄文後期				隆文 沈線	ナデ	石英・長石・ハンモック・雲母	○	△	△
	533	16-2	深鉢	縄文後期				ヨコ方向の条痕 ナデ	ナデ	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	△	△
	534	16-2	深鉢	縄文後期				櫛・研磨 隆文 沈線	櫛・研磨	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	△	△
	535	16-2	深鉢	縄文後期				隆文 沈線 櫛・研磨	沈線	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	△	△
	536	16-2	深鉢	縄文後期				櫛状施文 ナデ	ナデ	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	△	△
	537	16-2	深鉢	縄文後期				沈線 櫛・研磨 隆文 沈線	ナデ	石英・長石・ハンモック・雲母	○	△	△
	538	16-2	深鉢	縄文後期				隆文 沈線 櫛・研磨	櫛・研磨	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	△	△
	539	16-2	深鉢	縄文後期				研磨 ナデ	ナデ	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	△	△
	540	16-2	深鉢	縄文後期				ナデ 櫛状施文	ナデ 条痕 工具	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	△	△
	541	16-2	深鉢	縄文後期				ヨコ方向の条痕 ナデ 隆文 沈線	不定方向の条痕 工具ナデ	雲母・長石・ハンモック・雲母	△	△	△
	542	16-2	深鉢	縄文後期				隆文	ナデ	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	△	△
	543	16-2	深鉢	縄文後期				隆文 沈線 研磨	ナデ	石英・長石・ハンモック・雲母	△	△	△
	544	16-2	深鉢	縄文後期				櫛状施文	ナデ	雲母・長石・ハンモック・雲母	△	△	△
	545	16-2	深鉢	縄文後期				隆文	ナデ	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	△	△
	546	16-2	深鉢	縄文後期				隆文	条痕	雲母・長石	○	○	C
	547	16-2	深鉢	縄文後期				ヨコ方向の条痕 ナデ	不定方向の条痕 ナデ	雲母・長石	○	○	△
	548	16-2	深鉢	縄文	(13.8~13.0)			ナデ方向の工具ナデ ヨコ方向工具ナデ	ナデ方向の工具ナデ	雲母・長石	○	△	△
	549	16-2	深鉢	縄文	3.9			斜状に走行するナデ方向の撫で痕ナデ	ナデ	雲母・長石	○	△	○
52	550	16-2	深鉢	縄文	(5.4)			ナデ	ナデ	雲母・長石	△	△	△
	551	16-2	浅鉢	縄文	6.0			ナデ後ナデ方向の撫で ナデ	ナデ	雲母・長石	○	△	△
	552	16-2	台	縄文	(7.8)			下部ナデ	ナデ	雲母・長石・ハンモック・雲母	C	△	○
	553	16-2	台	縄文	(4.0)			下部ナデ ナデ	ナデ	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	△	○
	554	16-2	台	縄文		6.0		ナデ	ハケ状工具による不定方向の調整	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	○	
	555	16-2	台	縄文				ナデ	ナデ	雲母・長石・ハンモック・雲母	△		△
	556	16-2	台	縄文		7.0		条痕	ナデ	雲母・長石・ハンモック・雲母	○	C	△
53	557	17	深鉢	縄文後期				ナデ 沈線	ナデ	石英・長石	△	△	
	558	17	深鉢	縄文後期				沈線	ナデ	石英・長石・雲母	△	△	
	559	17	深鉢	縄文後期				研磨	研磨	雲母・長石	△	○	△	内面にハケ目状の調整痕
54	560	17	深鉢	縄文後期				ナデ の内 沈線	ナデ	石英・長石・雲母			
	561	17	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	石英・長石・雲母	○		
	562	17	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	雲母・長石	○	○	△	内面黒彩
	563	17	深鉢	縄文後期				ナデ 沈線	ナデ	雲母・長石・ハンモック・雲母	△		
	564	17	深鉢	縄文後期				ナデ 条痕	ナデ	雲母・長石	△		
	565	17	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	雲母・長石・ハンモック・雲母	△		
	566	17	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	雲母・長石・ハンモック・雲母	△		

岩鼻岩陰遺跡出土土器観察表④

掲載番号	位置番号	調査区名	層名	時期	法量 口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整・文様 外面	内面	色調	焼成	胎土 長石	石英	雲母	赤色粒	備考
	592	A7	西	縄文後期				横縄が細しい縄節	横縄が細しい縄節	にぶい褐色	△					
	590	A7	西南	縄文後期				条痕(縄押)	条痕	にぶい褐色	○					
	591	A7	西西	縄文後期				条痕	条痕	にぶい褐色	○					
	589	A7	西北	縄文後期				ミガキ	ミガキ	にぶい褐色	○		○			
	592	B7	南南	縄文後期				ナデ	ナデ	灰褐色	○	△				
	591	B7	南北	縄文後期				ミガキ 調整	ミガキ ナデ	にぶい黄褐色	△					
	595	A7	西北	縄文後期				条痕	条痕 ナデ	にぶい褐色	△					
	596	A7	西南	縄文後期				条痕 沈線 縄文	条痕	にぶい褐色	△					
57	597	A7	南東	縄文後期				縄文 沈線 指圧	ミガキ の調整	にぶい褐色	△					
	598	B7	西北	縄文後期				縄文 沈線	ミガキ ナデ	灰褐色	△					
	599	C7	西北	縄文後期				ナデ 沈線 角押	ナデ 指圧痕	灰褐色	△					
	600	D7	西南	縄文後期				縄目縄文 ナデ	ナデ 沈線	灰褐色	△					
	601	B7	南南	縄文後期				ナデ 沈線縄文	ナデ	灰褐色	○			△		
	602	B7	南南	縄文後期				沈線 ナデ	ナデ	にぶい黄褐色				○		
	603	C9	西北	縄文後期				ナデ	ナデ	灰褐色	△	△				
	604	D7	西南	晩文		9.4		ナデ 工具ナデ	研磨	褐灰色	○			○		
	605	D7	西南	縄文中期				ナデ 刺突原体	ナデ	赤褐色				○		配石ピット
	606	C7	南南	縄文				条痕	ナデ	にぶい褐色	○					
	607	B7	西北	晩文				ナデ 回転変 条痕	ナデ	褐灰色	○					
	608	C7	西北	縄文後期				条痕	条痕	赤褐色	○	○	○	○		
	609	C8	東	縄文中期				条痕 刺み	条痕	灰褐色	△					
	610	D8	東	弥生早期				横位変容	条痕 ナデ	黒褐色	○	○				
	611	D8	東	縄文中期				ナデ 刺突 貝殻腹圧痕	ナデ	にぶい褐色	△	△	△			
	612	D8	東	弥生早期				ナデ 結節突起	ナデ	褐灰色	○	○			△	内面黒変?
	613	B8	南南	縄文中期				沈線	研磨	灰白色	△	△		△		
	614	B8	北西	縄文後期				沈線	ナデ	にぶい黄褐色	△	△				
	615	D8	西南	縄文後期				ナデ ナデ後沈線	ナデ	褐色	○	○				
	616	D8	西南	縄文後期				条痕の沈線 ナデ	ナデ	にぶい黄色	○	○	△	△		
	617	D8	南南	縄文後期				ナデ 刺突の列点文	横ハケ 研磨 沈線	黄色	△	△		△		
	618	B8	西南	縄文後期				ナデ	下駄ナデ	褐色	○	○				
	619	D8	西北	縄文後期				ナデ 横ハケ	研磨	褐灰色	△	△				
	620	D8	南南	縄文後期				沈線 研磨	研磨	褐灰色	△	△				
	621	B8	北西	弥生中期				沈線 研磨	研磨	褐灰色	△	△				
	622	C8	北西	縄文後期				研磨 沈線	研磨	赤褐色	△					
	623	D8	西西	縄文後期				ヨコ方向の沈線 ナデ	ナデ ヨコ方向ナデ	褐色	○	○	△			内面の内面ハケ
	624	D8	北西	縄文後期				研磨	ヨコ方向の研磨	褐灰色	○	○				
	625	B8	北西	縄文後期				研磨	研磨	褐灰	△	△				
	626	B8	北西	縄文後期				研磨	研磨	褐灰色	△	△				
	627	D8	西南	縄文後期				条痕の沈線 ナデ	ナデ 縦角度に研磨	褐色	○	○				
	628	D8	西北	縄文後期				ナデ 研磨	横ハケ 研磨	褐灰色	○	○				
	629	D8	南南	縄文後期				条痕	横ハケ 研磨	褐色	○	○				
	630	D8	西南	縄文後期				研磨	ナデ	黒褐色	△	△		△		
	631	D8	西北	縄文後期				ヨコ方向条痕 下方のナデ	ナデ	にぶい褐色	△	△		△		
	632	D8	西南	縄文後期				ナデ	ナデ	灰黄色	△	△		△		
	633	B8	北西	弥生後期				研磨	研磨	灰黄色	△	△				
	634	D8	西北	縄文後期				ナデ	ナデ	褐灰色	○	○				
	635	D8	西北	縄文後期				ヨコ方向の条痕 ナデ	ヨコ方向のナデ	褐色	○	○				
	636	D8	西北	縄文後期				ヨコ方向の条痕 ナデ	ヨコ方向のナデ	褐色	△	○				内面ヨコ方向ハケ目ナデ
	637	B8	北西	縄文後期				ヨコ方	ナデ	褐色	○	○		○		
	638	B8	北西	縄文後期				ナデ ヨコ方向ナデ	ナデ	暗褐色	△	○				
	639	D8	西北	縄文後期				ナデ	横ハケ 研磨	褐色	△	△		△		
	640	D8	西北	縄文後期				ヨコ方向条痕 下方のナデ	ナデ	褐色	△	△		△		
	641	D8	西北	縄文後期				条痕	ヨコ方向のナデ	褐灰色	△	△		△		
	642	D8	西北	縄文後期				条痕	ヨコ方向のナデ	褐色	△	△		△		
	643	D8	西北	縄文後期				条痕	ヨコ方向のナデ	褐灰色	△	△		△		
	644	D8	西北	縄文後期				条痕	ヨコ方向のナデ	褐色	△	△		△		
	645	D8	西北	縄文後期				条痕	ヨコ方向のナデ	褐色	△	△		△		
	646	D8	西北	縄文後期				条痕	ヨコ方向のナデ	褐色	△	△		△		
	647	B8	北西	縄文後期				条痕	ヨコ方向のナデ	褐色	△	△		△		
	648	B8	北西	縄文後期				条痕	ヨコ方向のナデ	褐色	△	△		△		
	649	D8	西北	縄文後期				条痕	ヨコ方向のナデ	褐色	△	△		△		
	650	D8	西南	縄文後期				ヨコ方向の条痕 下方のナデ	ヨコ方向のナデ	褐色	○	○		○		
	651	B8	南南	縄文後期				ヨコ方向の条痕	ヨコ方向の条痕	褐灰色	○	○				
	652	B8	西北	縄文後期				条痕 刺突	ナデ	褐灰色	△	△				
	653	D8	西北	縄文後期				横縄文 沈線 ナデ	ナデ	褐灰色	△	△				
	654	D8	西北	縄文後期				沈線縄文	研磨	褐色	○	○				
	655	D8	西北	縄文後期				縄目縄文 研磨	ナデ	褐色	△	△				
	656	D8	西北	縄文後期				縄目縄文 研磨	ナデ	褐色	△	△				
	657	D8	西北	縄文後期				縄目縄文	ナデ	褐色	△	△				
	658	D8	西北	縄文後期				ナデ 縦方向	ナデ	褐色	△	△				
	659	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	660	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	661	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	662	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	663	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	664	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	665	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	666	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	667	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	668	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	669	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	670	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	671	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	672	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	673	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	674	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	675	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	676	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	677	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	678	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	679	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	680	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	681	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	682	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	683	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	684	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	685	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	686	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	687	B8	北西	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	688	B8	北西	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	689	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	690	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	691	B8	南南	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	692	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	693	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	694	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	695	B8	南南	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	696	B8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	697	B8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	698	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	699	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	700	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	701	B8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	702	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	703	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	704	B8	南北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	705	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	706	D8	西北	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△	△				
	707	C8	西南	縄文				研磨	研磨	褐色	△	△				
	708	B8	北西	縄文		(7.7)		ナデ	ナデ	褐色	△	△		△		
	709	C8	南南	縄文		(9.2)		横ハケ 研磨	横ハケ 研磨	褐色	○			○		
	710	B8	西北	縄文				ヨコ方向のナデ	横位方向ナデ	赤褐色	△	△		○		内面黒変?
	711	D8	西南	晩文		4.0		ナデ	ナデ	褐色	○					
	712	D8	北西東	縄文	3.8	6.6		条痕	ナデ	褐色						底部穿孔
	713	B8	北西	晩文				研磨	研磨	にぶい褐色	△	△				
	714	B8	北西	縄文				ナデ 沈線	条痕	褐色	○			△		
	715	B8	西南	縄文				研磨	研磨	褐色	△			△		
	716	D8	西南	縄文				縦位沈線文	ナデ	褐灰色	△	△		△		
	717	D8	西南	縄文				ナデ 研磨 横位沈線文	横ハケ 研磨 ナデ	にぶい黄褐色	△			△		
	718	B8	南南	縄文				横縄文	ナデ	褐灰色	△	△				
	719	B8	北	縄文		(11.6)		ヨコ方向の条痕	ナデ	褐色	△	△				
	720	B7/D8	西北	晩文		(28.4)		研磨	研磨	褐灰色	○			△		
	721	D8	西	弥生中期				ナデ 刺目痕跡	ナデ 条痕	赤褐色	△			△		
	722	B8	南	弥生早期				横位変容 横ハケ 研磨	ナデ	褐色	△	△	△			
	723	B8	西	弥生早期				ナデ 刺突原体	ナデ	褐色	△					
	724	B8	西南	縄文後期				ヨコナデ 指圧痕	ヨコナデ	褐色	○					
	725	D8	西南	縄文後期				横ハケ 研磨	ナデ	褐灰色	△	△			△	外面黒変
	726	C8	北	晩文後期				横縄文 縦文 沈線	ナデ	にぶい黄色	○					
	727	D8	西南	縄文後期				横ハケ 横位方向のヨコ方向の研磨	ヨコ方向の研磨	褐色	○	○				
	728	C8	南南	晩文後期				研磨 縦位 沈線	ナデ	褐色	△	△				
	729	C8	西南	縄文後期				横縄条痕	反復条痕	褐色	○	○				

岩鼻岩陰遺跡出土土器観察表⑤

遺構番号	遺物番号	層位	器種	特徴	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	測定 文様 外面	内面	色調	胎土	焼成	備考
	730	D9	鉢形	縄文時代				ナデ 口から胴のナデ	口から胴のナデ	暗黄色	○	○	
	731	C8	鉢形	縄文時代				ナデ	ナデ	にぶい橙色	△	△	△
	732	D8	鉢形	縄文前半期				赤彩	口から胴のナデ	暗褐色	○	○	
	733	D9	鉢形	縄文後半期				ナデ	ナデ	にぶい褐色	△	△	△
	734	C8	深鉢	縄文後半期				ナデ	ナデ	黒褐色	○		
	735	D8	深鉢	縄文後半期				口から胴の条痕	口から胴の条痕	褐灰褐色	△	△	
	736	B4	深鉢	縄文後期前				ナデ	ナデ	黒褐色	△	△	
	737	D8	深鉢	縄文後期前				条痕	条痕	にぶい黄褐色～灰褐色	△	△	
	738	C8	深鉢	縄文後期前				胴部	胴部	にぶい褐色	△		
	739	C8	深鉢	縄文後期前				ナデ 貝殻条痕文	ナデ	明褐色	○		
	740	B4	深鉢	縄文後期				ナデ 貝殻条痕文 底部	胴部	灰褐色	○		△
	741	D8	鉢形	縄文後期				胴部無文 口縁	ナデ	黒褐色	△	○	
85	742	C8	深鉢	縄文後期				胴部 無文 口縁	胴部	黒褐色		△	△
	743	C8	深鉢	縄文後期				口縁 無文 口縁	胴部	にぶい赤褐色	△		
	744	C8	鉢形	縄文後期				胴部無文 ナデ ナデ	胴部	にぶい褐色	△		△
	745	C8	鉢形	縄文後期				無文 口縁 ナデ	ナデ	黒褐色	△		
	746	C8	深鉢	縄文後期				無文 ナデ	ナデ	暗褐色	△	△	△
	747	C8	深鉢	縄文後期				無文 ナデ	一部条痕文 ナデ	黒色	○	△	
	748	B4	深鉢	縄文後期				無文 ナデ	巻貝条痕	暗褐灰色	○	○	
	749	C8	鉢形	縄文後期				無文 ナデ	ナデ	にぶい褐色	△	○	
	750	C8	深鉢	縄文後期				無文ナデ	ナデ	黒褐色	○		○
	751	C8	深鉢	縄文後期				胴部 口縁 無文	胴部	褐灰色			○
	752	C8	深鉢	縄文後期				無文の凸部は小条痕	無無	にぶい褐色	△	△	
	753	B4	深鉢	縄文後期				口から方向の条痕 無文 口縁 ナデ 胴部	胴部	黒褐色	△	△	
	754	C8	鉢形	縄文後期				ナデ 無文	ナデ	明褐色	△		△
	755												
	756	A8	高坏	縄文後期				口縁ヨコナデ	ナデ	にぶい褐色	△		
	757	C8	鉢形	縄文後期				条痕 底部	ナデ 条痕	黒褐色	△		
	758	C8	深鉢	縄文後期				ナデ 胴部 胴部文	条痕	明褐色	○		
	759	C8	深鉢	縄文後期				ナデ 胴部	ナデ	黒褐色	○	△	
	760	CR/C9	深鉢	縄文後期				胴部無文	ナデ	にぶい褐色	○	○	
	761	C8	深鉢	縄文後期				ナデ 口縁	口縁	黒褐色	△	△	
	762	B4	深鉢	縄文	(8.2)	ナデ ヘラナデ		口縁ヨコナデ	口縁ヨコナデ	明褐灰色	○	○	
	763	C8	深鉢	縄文	(8.0)	ナデ		条痕	胴部	黒色	△		
86	764	C8	深鉢	縄文	(10.6)	条痕 ナデ		条痕	ナデ	にぶい褐色		○	
	765	C8	深鉢	縄文	(7.6)	ナデ		ナデ	ナデ	明赤褐色	○	○	
	766	D8	深鉢	縄文中期				無文文 無縄無部	口縁	褐褐色	△		○ 中部高地か
	767	B9	深鉢	縄文中期				縄結節縄文 無縄	縄方 ナデ	暗黒色	△	△	
	768	B8	深鉢	縄文前期				ナデ 胴部文	ナデ 胴部無	暗褐色	△	△	
	769	B4	深鉢	縄文中期				無し 無文 縄結節	ナデ	明褐色	△	△	△
	770	B9	深鉢	縄文中期				縄文	ナデ	褐色	○	△	△
	548	B9	浅	弥生中期				結び押圧 ナデ	ヨコナデ	褐色	○		
	849	B9	浅	弥生中期				結び押圧 ナデ	ヨコナデ	褐色	○	○	
	850	B9	深鉢	縄文後期				ナデ 底部	口から方向のナデ	黒褐色	○	○	
	851	C9	深鉢	縄文後期				底部 ナデ	ナデ	にぶい褐色	△	△	
	852	B9	鉢形	縄文後期				ナデ 底部	ナデ	褐灰色	○	○	
	853	B9	鉢形	縄文後期				ナデ 底部	口から方向のナデ	褐色	○	○	
	854	C9	鉢形	縄文後期				底部	ナデ	にぶい褐色	△	△	
	855	C9	鉢形	縄文後期				ナデ 条痕 底部	口から方向のナデ	褐色	○	○	内面黒色処理か
	856	D9	鉢形	縄文後期				底部 底部	胴部	暗褐色	△	△	
	857	C9	深鉢	縄文後期				ナデ 底部	ナデ	褐色	○	△	△
	858	D9	鉢形	縄文後期				ナデ 底部	口から方向のナデ	灰褐色	○	○	
	859	D9	深鉢	縄文後期				ナデ	口から方向のナデ	褐色	○	○	
	860	B9	深鉢	縄文後期				ナデ	口から方向のナデ 条痕	黒褐色～明褐色	○	○	
	861	C9	深鉢	縄文後期				条痕後ナデ 縦いに横あり	ナデ	にぶい褐色	△		
71	862	C9	鉢形	縄文後期				条痕	ナデ	明褐色			
	863	C9	鉢形	縄文後期				一部条痕 ナデ	ナデ	黒褐色	○		
	864	B9	深鉢	縄文後期				ナデ	口から方向のナデ	褐色	○		
	865	C9	深鉢	縄文後期				条痕(無節)	ナデ	暗褐褐色	○		○
	866	C9	深鉢	縄文後期				ナデ	胴部	黒色～褐色	○		
	867	C9	鉢形	縄文後期				胴部無文 巻貝条痕	ナデ	褐色	△		
	868	D9	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	褐灰色	○	○	○
	869	C9	深鉢	縄文	(6.4)	ナデ		ナデ	ナデ	褐灰色	△	○	
	870	D9	深鉢	縄文		ナデ		ナデ	ナデ	にぶい黄色	○	○	△
	871	C9	深鉢	縄文		胴部		胴部	胴部	にぶい褐色	△	△	
	872	B9	深鉢	縄文後期		ナデ 口から方向のナデ		ナデ 口から方向のナデ	ナデ	黒褐色	○	○	
	873	C9	深鉢	縄文後期		ナデ 無文 口縁		ナデ	胴部	褐灰色			
	874	C9	深鉢	縄文後期		ナデ		ナデ 口縁	口縁	にぶい黄褐色	△		△
	875	C9	鉢形	縄文後期		ナデ		ナデ 口縁	ナデ	灰黄褐色	△	△	△
	876	C9	深鉢	縄文後期		胴部文 底部		無縄	胴部	褐灰色	△	△	
	877	C9	深鉢	縄文後期		底部 ナデ		ナデ	ナデ	褐色	△		
	878	C9	深鉢	縄文後期		ナデ 無文 口縁		ナデ	胴部	褐色		△	△
	879	C9	深鉢	縄文後期		ナデ 縄結節文		ナデ	口縁	にぶい褐色		△	△
	880	C9	深鉢	縄文後期		ナデ 縄結節文		ナデ	口縁	にぶい褐色	△	△	
	881	C9	深鉢	縄文後期		胴部 無文		胴部	胴部	褐色	△	△	△
	882	B9	深鉢	縄文後期		ナデ 胴部		口から方向のナデ	ナデ	褐色	○	○	
	883	C9	深鉢	縄文後期		ナデ 胴部		ナデ 条痕	ナデ 条痕	にぶい黄褐色	△	△	
	884	C9	深鉢	縄文後期		ナデ 条痕		胴部	口縁	灰褐色	△	△	△
	885	C9	深鉢	縄文後期		ナデ 縄結節文		ナデ 巻貝条痕 胴部	口縁	灰褐色	△	△	△
	886	C9	深鉢	縄文後期		ナデ		ナデ	ナデ	黒褐色	○	○	
	887	C9	深鉢	縄文後期		ナデ 条痕		ナデ 条痕	胴部	褐黒色	△	△	
72	888	B9	深鉢	縄文後期		ナデ		胴部	胴部	褐黒色	△	○	
	889	B9	深鉢	縄文後期		ナデ		口から方向のナデ	ナデ	暗褐色	○	○	
	890	C9	深鉢	縄文後期		ナデ 縄文		ナデ	ナデ	褐色	△	△	△
	891	C9	深鉢	縄文後期		条痕		条痕後ナデ	胴部	褐色	△	△	
	892	C9	深鉢	縄文	(11.8)	ナデ		ナデ	ナデ	明黄褐色	○	○	
	893	C9	深鉢	縄文	(6.4)	ナデ		ナデ	ナデ	褐色	△	△	○
	894	C9	深鉢	縄文	(7.7)	ナデ		ナデ	ナデ	明赤褐色	○	○	△
	895	D9	深鉢	縄文後期		底部		ナデ	胴部	褐黒色	△	△	△
	896	D9	深鉢	縄文後期		底部縄文		ナデ	ナデ	赤褐色	○	○	○
	897	D9	深鉢	縄文後期		縄結節文 口縁		口から方向のナデ	胴部	褐黒色	○	○	
	898	D9	深鉢	縄文後期		縄結節文 口縁 胴部		ナデ 口縁	胴部	褐黒色	○	○	△

岩鼻岩除道跡出土土器観察表⑥

図版番号	遺物番号	調査区	層位	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	残存高 (cm)	外面	内面	色調	胎土				備考
											角閃石	石英	長石	雲母	
72	899	D9	表土	縄文前期				横ハケ・斜ハケ 縦位調整 工具痕	横ハケ・斜ハケ	明褐色	○	○		△	
	900	D9	表土	縄文後期				縦位調整 工具痕	ナデ 指頭ハケ	黒褐色	○	○			
	901	D9	表土	縄文後期				縦位調整 工具痕 横ハケ・斜ハケ	ナデ 指頭ハケ	明赤褐色	△	△			
	902	D9	表土	縄文後期				縦位調整 ナデ	指頭	にぶい黒色	○	○		△	
	903	D9	表土	縄文後期				縦位 工具痕 横ハケ・斜ハケ	ナデ 指頭ハケ・横ハケ	赤褐色	△	○		○	
	904	D9	表土	縄文後期				横ハケ・斜ハケ 工具痕 縦位	横ハケ・斜ハケ	褐色	○			○	
	905	D9	表土	縄文後期				工具痕 縦位	指頭	明褐色	△	△		△	
	906	D9	表土	縄文後期				縦位調整 横ハケ 工具痕	ナデ 斜ハケ・ナデ	黒褐色	○	○			
	907	D9	表土	縄文後期				横位調整 ナデ	ナデ	にぶい黒褐色	△	△			
	908	D9	表土	縄文後期				縦位調整 工具痕	ナデ	赤褐色	△	△		△	
	909	D9	表土	縄文後期				縦位調整 横ハケ・斜ハケ	指頭	明赤褐色	△	△		△	
	910	D9	表土	縄文後期				工具痕 縦位調整	指頭	黒褐色				△	
	911	D9	表土	縄文後期				工具痕 ナデ 横ハケ	斜ハケ・横ハケ	褐色	○	○			
	912	D9	表土	縄文後期				縦位調整 工具痕	ナデ	赤褐色	△	△		△	
73	913	D9	表土	縄文後期	(14.1)			ナデ	ナデ	にぶい黒褐色	△			○	赤色化ややあり
	914	D9	表土	縄文後期				縦位調整 横ハケ・斜ハケ 指頭ナデ	指頭	褐色	△	△		△	
	915	C9	表土	縄文後期				ナデ 縦位調整 工具痕	ナデ	明赤褐色	○	○		○	
	916	D9	表土	縄文後期				工具痕	指頭 工具痕	赤黒色	○	○		○	
	917	D9	表土	縄文後期				ナデ	ナデ	にぶい黒褐色	○	△	△	○	
	918	D9	表土	縄文後期				横ハケ・斜ハケ	横ハケ・斜ハケ	褐色	○				
	919	C9	表土	縄文後期				指頭	ナデ	にぶい褐色	△	△		△	
	920	D9	表土	縄文後期				ナデ	ナデ・横	赤褐色	○	○		△	
	921	D9	表土	縄文後期				横ハケ 工具痕	ナデ 斜ハケ・ナデ	黒褐色	○	○			
	922	D9	表土	縄文後期				ナデ	ナデ	明褐色	○	○			
	923	D9	表土	縄文後期				ナデ	ナデ	褐色	△	○		△	
	924	D9	表土	縄文後期				ナデ ナデ	ナデ・ナデ	黒褐色	○	○		○	
	925	D9	表土	縄文後期				指頭	指頭	褐色	○	○		○	
	926	D9	表土	縄文中期				工具痕 指頭 工具痕	指頭	赤褐色		○		○	第2図参照
	927	D9	表土	縄文中期				指頭痕 縦ハケ	縦ハケ	褐色	○			○	
	928	D9	表土	縄文	3.9			ナデ 指頭痕・ハケ 横ハケ・ナデ	ナデ・斜ハケ・横ハケ・ナデ 横ハケ・ナデ	明褐色	○	○		○	
	929	D9	表土	縄文	(11.0)			ナデ	ナデ	赤黒色	○	○		○	
	930	D9	表土	縄文	(8.8)			ナデ	ナデ	にぶい褐色	○	○		△	
74	931	D9	表土	縄文	(8.4)			指頭ナデ ナデ	ナデ	褐色	○	○		○	
	932	D9	表土	縄文後期				指頭痕	指頭	黒褐色	△	△		△	
	933	D9	表土	縄文後期				縦ハケ ナデ	ナデ	明赤褐色	△	△			
	934	C9	表土	縄文後期				横ハケ・ナデ	ナデ	赤褐色	△	△			
	935	C9	表土	縄文後期				工具痕	指頭	明赤褐色				△	
	936	C9	表土	縄文後期	(16.0)			ナデ	ナデ	褐色	○	○			
	937	D9	表土	縄文中期				ヨコナデ 指頭痕 工具痕	指頭	赤褐色	△	△		△	
	938	D9	表土	縄文中期				横ハケ・斜ハケ 工具痕	ナデ	明赤褐色	△	△			
	939	D9	表土	縄文中期				縦位 工具痕	指頭 ヨコナデ	褐色	○	△			
	940	C10	表	弥生中期				指頭痕	ナデ	赤褐色	△	△			
	941	C10	表土	縄文後期				ナデ 工具痕	横ハケ・斜ハケ	明赤褐色	△		△		
	942	C10	表土	縄文後期				横ハケ・斜ハケ 指頭痕	ナデ 指頭痕・横ハケ	にぶい褐色	△	△		△	
	943	B10	表土	縄文後期				工具痕	指頭	赤褐色	△	△			
	944	C10	表土	縄文後期				縦位 工具痕	指頭	褐色	△				
	945	C10	表土	縄文後期				横ハケ・斜ハケ 工具痕	指頭	明赤褐色	△				
	946	C10	表土	縄文後期				工具痕 縦位	指頭	赤褐色	△				
	947	C10	表土	縄文後期				指頭	指頭	褐色	○				
75	948	C10	表土	縄文後期				ナデ 工具痕	指頭	にぶい黒褐色	○	△			
	949	C10	表土	縄文後期				横ハケ・斜ハケ 工具痕	指頭	赤褐色	△	△			
	950	C10	表土	縄文後期				工具痕	指頭	明赤褐色	○				
	951	C10	表土	縄文後期				横ハケ・斜ハケ 工具痕	指頭	褐色	○				
	952	C10	表土	縄文後期				横ハケ・斜ハケ 工具痕	指頭	赤褐色	△				
	953	C10	表土	縄文後期				縦位 工具痕	指頭	褐色	○				
	954	C10	表土	縄文後期				横ハケ・斜ハケ 工具痕	指頭	にぶい黒褐色	△				
	955	C10	表土	縄文後期				工具痕	指頭	赤褐色	○				
	956	C10	表土	縄文後期				ナデ	指頭	明赤褐色	○				
	957	C10	表土	縄文後期				工具痕	指頭	褐色	○				
	958	C10	表土	縄文後期				横ハケ・斜ハケ 工具痕	指頭	赤褐色	△				
	959	C10	表土	縄文後期				横ハケ・斜ハケ 工具痕	指頭	明赤褐色	△				
	960	C10	表土	縄文後期				縦位 工具痕	指頭	褐色	○				
	961	C10	表土	縄文後期				工具痕	指頭	赤褐色	△				
	962	C10	表土	縄文後期				横ハケ・斜ハケ 工具痕	指頭	褐色	○				
	963	C10	表土	縄文後期				工具痕	指頭	赤褐色	△				
	964	C10	表土	縄文後期				工具痕	指頭	褐色	○				
	965	C10	表土	縄文後期				工具痕	指頭	赤褐色	○	△			
	966	D10	表土	縄文後期				工具痕	指頭	赤褐色	△	△			
	967	D10	表土	縄文後期				横ハケ・斜ハケ 工具痕	指頭	明赤褐色	△				
	968	C10	表土	縄文後期				工具痕	指頭	褐色	△				
	969	C10	表土	縄文後期				工具痕	指頭	赤褐色					
	970	D10	表土	縄文後期				工具痕	指頭	褐色	○				
	971	C10	表土	縄文後期				工具痕	指頭	赤褐色	△				
	972	B10	表土	縄文後期				工具痕	指頭	褐色	○				
	973	C10	表土	縄文後期				工具痕	指頭	赤褐色	△				
	974	C10	表土	縄文後期				工具痕	指頭	褐色	○				
	975	C10	表土	縄文後期				工具痕	指頭	赤褐色	○				
	976	C10	表土	縄文後期				工具痕	指頭	明赤褐色～褐色	○				
	977	C10	表土	縄文後期				縦ハケ ナデ	ナデ	褐色	△				
	978	C10	表土	縄文後期				工具痕	指頭	赤褐色	△	△			
76	979	B10	表土	縄文後期				工具痕	指頭	褐色	○	○			
	980	B10	表土	縄文後期				ナデ	ナデ	赤褐色	○	○			
	981	B10	表土	縄文後期				ナデ 凸帯状の横ナデ(ヨコナデ)	指頭	黒褐色～褐色	○	○			
	982	C9	表	弥生中期				ナデ 矢羽	ナデ	褐色					
	983	C10	表土	縄文後期				条痕条痕のある沈線	ナデ	褐色	○			○	
	984	C10	表土	縄文後期				沈線 ナデ	沈線 ナデ	赤褐色	△			△	
	985	C10	表土	縄文後期				沈線 ナデ	沈線	褐色	△			△	
	986	C10	表土	縄文後期				ナデ	横ハケ・斜ハケ	褐色	○				
	987	C10	表土	縄文後期				条痕	指頭	にぶい黒褐色	○	△			
	988	C10	表土	縄文後期				ナデのある細い沈線	指頭	赤褐色	△	△			
	989	C10	表土	縄文後期				沈線 沈線	指頭	褐色～黒褐色	○				
	990	C10	表土	縄文後期				ナデ	ナデ	褐色	○				
	991	C10	表土	縄文後期				縦ハケ 沈線	指頭	赤褐色	△				
	992	C10	表土	縄文後期				ナデのある細い沈線	指頭	にぶい黒褐色	△				
	993	C10	表土	縄文	(3.6)			ナデ	ナデ	明赤褐色		△		△	
	994	C10	表土	縄文				ナデ	ナデ	赤褐色	△			△	
	995	C10	表土	縄文後期				縦位 指頭痕	指頭	黒褐色	△				
	996	D10	表土	縄文後期				ナデ 沈線	ナデ	褐色	○	○			
	997	D10	表土	縄文後期				ナデ 沈線	ナデ 沈線	明褐色	△	△		△	
	998	C10	表土	縄文後期				ナデ 沈線 縦位	ナデ 指頭	褐色		△			
	999	C10	表土	縄文後期				沈線 ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	△			△	
	1000	C10	表土	縄文後期				沈線 ナデ	ナデ	にぶい褐色	△				
	1001	C10	表土	縄文後期				ナデ 沈線 横ハケ・斜ハケ	ナデ	褐色	△			△	
	1002	C10	表土	縄文後期				沈線 縦位 ナデ	ナデ	褐色				△	
77	1003	C10	表土	縄文後期				条痕 沈線	指頭	赤褐色	△				
	1004	C10	表土	縄文後期				縦位 沈線 ナデ 指頭痕・横ハケ	ナデ	褐色	△			△	
	1005	C10	表土	縄文後期				縦位 沈線 横ハケ	指頭	褐色	△				
	1006	C10	表土	縄文後期				縦位 沈線 横ハケ	指頭	にぶい褐色	△				
	1007	C10	表土	縄文後期				条痕 沈線 凸帯状のナデ	ナデ	褐色	○				
	1008	C10	表土	縄文後期				結節痕 沈線	指頭	にぶい褐色	△	△			
	1009	C10	表土	縄文後期				ナデ 沈線 指頭	指頭	褐色	○				
	1010	C10	表土	縄文後期				結節痕 沈線	ナデ	赤褐色	○				
	10.1	C10	表土	縄文後期	(15.0)			結節痕 沈線	横ハケ・斜ハケ	褐色	○				
	1012	D10	表土	縄文後期				ナデ 縦ハケ 沈線	ナデ	にぶい赤褐色	△				
	1013	C10	表土	縄文後期				ナデ 縦ハケ 沈線	ナデ	褐色	△	△		△	
	1014	C10	表土	縄文後期				縦ハケ ナデ 沈線	ナデ	赤黒色	△	△		△	
	1015	C10	表土	縄文後期				縦ハケ ナデ	ナデ	明褐色	△				
	1016	C10	表土	縄文後期				沈線 縦ハケ 工具痕	ナデ	にぶい赤褐色	△				
	10.7	C10	表土	縄文後期				結節 沈線	ナデ	赤黒色	△		△		

岩鼻岩陰遺跡出土土器観察表⑦

時期	遺構番号	遺物番号	図版	種類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整・文様 外面	調整・文様 内面	胎土	焼成	色調	備考
79		1018	C10	深鉢	縄文前期			ナデ 縦位縄文 沈線	ナデ	角閃石		明褐色	
		1019	C10	深鉢	縄文前期			縄文 沈線	指圧のち丁寧なナデ	角閃石		にぶい黄褐色	
		1020	D10	深鉢	縄文後期			ナデ 沈線 縄文	ナデ	角閃石		にぶい褐色	
		1021	C10	深鉢	縄文後期			縄結文 ナデ 縦長レンズ状押	ナデ 縦長レンズ状押			にぶい黄褐色	
		1022	C10	深鉢	縄文後期			ナデ 縦結縄文	ナデ	角閃石		黄褐色	
		1023	D10	深鉢	縄文後期			縄文 沈線	横ハケ目	角閃石		にぶい褐色	
		1024	C10	深鉢	縄文後期			縄文 沈線	ナデ	角閃石		黄褐色	
		1025	D10	深鉢	縄文後期			沈線間 縄文 沈線 ナデ	ナデ	角閃石		明褐色	
		1026	D10	深鉢	縄文後期			ナデ 隆文	指圧	角閃石		黄褐色	
		1027	C10	深鉢	縄文後期			縄結縄文 ナデ	ナデ	角閃石		明褐色	
		1028	C10	深鉢	縄文後期	(31.8)		(28.4) 縄文 ヘラ状押のち沈線押	ヘラ状ヘラ状押	角閃石	○	にぶい黄褐色	
		1029	C10	深鉢	縄文後期			隆文 条痕のち沈線	角閃石のち丁寧なナデ	角閃石	○	明黄褐色	
		1030	D10	深鉢	縄文後期			ナデ 条痕 沈線	指圧	角閃石	○	にぶい褐色	
		1031	D10	深鉢	縄文後期			ナデ 条痕 沈線	ナデ 条痕 ナデ	角閃石	△	褐色	外面黒斑
		1032	D10	深鉢	縄文後期			縦位条痕 ナデ	ナデ ナデ	角閃石	△	褐灰色	
		1033	D10	深鉢	縄文後期			条痕 ナデ	沈線 沈線	角閃石	○	にぶい褐色	
		1034	D10	深鉢	縄文後期			ナデ	指圧 ナデ	角閃石	○	褐色	
		1035	D10	深鉢	縄文後期			ナデ	ナデ	角閃石	○	黄褐色	
		1036	D10	壺形	縄文後期			ナデ 隆帯	ナデ	角閃石	○	黒褐色	
		1037	C10	深鉢	縄文後期			ナデ	ナデ	角閃石	○	褐色	
		1038	C10	深鉢	縄文後期			条痕	ナデ	角閃石	△	にぶい黄褐色	
80		1039	C10	深鉢	縄文後期			隆帯	横位	角閃石	△	褐色	
		1040	C10	深鉢	縄文後期			条痕	ナデ	角閃石	○	にぶい黄褐色	
		1041	C10	深鉢	縄文後期			ナデ	指圧	角閃石	○	褐色	
		1042	C10	深鉢	縄文後期			結び目	横ハケ目	角閃石	△	にぶい黄褐色	
		1043	C10	深鉢	縄文後期			隆文 条痕	隆文	角閃石	○	にぶい褐色	
		1044	D10	深鉢	縄文後期			ナデ 結び目	条痕 ナデ	角閃石	△	褐色	
		1045	D10	深鉢	縄文	(18.4)		ナデ	ナデ	角閃石	○	明褐色	
		1046	D10	深鉢	縄文	(7.2)		ナデ	ナデ	角閃石	○	にぶい黄褐色	
		1047	C10	深鉢	縄文	(4.1)		ナデ	ナデ	角閃石	△	褐色	
		1048	C10	深鉢	縄文	(2.0)		ナデ	ナデ	角閃石	○	明褐色	
		1049	D10	深鉢	縄文	(7.3)		ナデ	横ハケ目	角閃石	△	褐色	
		1050	C10	深鉢	縄文	(11.2)		ナデ 沈線のち	条痕	角閃石	○	にぶい黄褐色	
		1051	C10	深鉢	縄文後期			ナデ 結び目 沈線 沈線	条痕 ナデ	角閃石	○	褐色	
		1052	D10	深鉢	縄文後期			条痕 ナデ	条痕 ナデ	角閃石	○	明褐色	
81		1053	D10	深鉢	縄文後期			条痕 ナデ	条痕 ナデ	角閃石	○	にぶい褐色	
		1054	C10	深鉢	縄文中期			交互	ナデ	角閃石		明褐色	
		1055	D10	深鉢	縄文中期			隆文 沈線	ナデ	角閃石	△	褐色	
		1056	C11	深鉢	縄文後期			ナデ 沈線	指圧	角閃石	△	褐色	
		1057	C11	深鉢	縄文後期			ナデ	ナデ	角閃石	△	褐色	
		1058	C11	深鉢	縄文後期			隆帯 沈線 縄文	ナデ	角閃石	△	にぶい褐色	△
		1059	C11	深鉢	縄文後期			ナデ 沈線	横ハケ目	角閃石	○	にぶい黄褐色	
		1060	C11	深鉢	縄文	4.1		沈線	横位	角閃石	△	褐色	
		1061	C11	深鉢	縄文	(6.3)		ナデ	ナデ	角閃石	△	褐色	
		1062	C11	深鉢	縄文	(6.7)		ナデ	ナデ	角閃石	○	にぶい褐色	
		1063	C11	深鉢	縄文後期			ナデ 沈線	ナデ	角閃石	○	にぶい黄色	
		1064	C11	深鉢	縄文後期			条痕 沈線	ナデ	角閃石	○	褐色	
		1065	C11	深鉢	縄文後期			沈線 沈線	指圧	角閃石	○	にぶい褐色	
		1066	C11	深鉢	縄文後期			ナデ 沈線	横ハケ目のち	角閃石	○	褐色	
		1067	D11	深鉢	縄文後期			ナデ 沈線	横位	角閃石	△	にぶい褐色	
		1068	C11	深鉢	縄文後期			ナデ 縦位縄結縄文 沈線	ナデ	角閃石	○	明石色～黒褐色	
		1069	B11	深鉢	縄文後期			沈線	丁寧なナデ のち	角閃石	○	褐色	
		1070	C11	深鉢	縄文後期			条痕 沈線	横位	角閃石	△	褐色	
		1071	C11	深鉢	縄文後期			ナデ 沈線	ナデ	角閃石	○	明石色～黒褐色	
		1072	C11	深鉢	縄文後期			ナデ 縦位縄結縄文 沈線	沈線のち丁寧なナデ	角閃石	○	褐色	
		1073	C11	深鉢	縄文後期			沈線	横位	角閃石	△	褐色	
		1074	C11	深鉢	縄文後期			条痕	横位	角閃石	○	褐色	
		1075	C11	深鉢	縄文後期			条痕	ナデ	角閃石	○	褐色	
		1076	C11	深鉢	縄文後期			条痕	ナデ	角閃石	○	褐色	
		1077	C11	深鉢	縄文後期			条痕	ナデ	角閃石	○	褐色	
		1078	C11	深鉢	縄文後期			条痕	ナデ	角閃石	○	褐色	
		1079	C11	深鉢	縄文後期			条痕	ナデ	角閃石	○	褐色	
		1080	C11	深鉢	縄文	7.3		ナデ	ナデ	角閃石	△	褐色	
		1081	C11	深鉢	縄文	(7.2)		ナデ	ナデ	角閃石	○	褐色	
		1082	C11	深鉢	縄文	(7.2)		ナデ	指圧	角閃石	○	褐色	
		1083	C11	深鉢	縄文	(8.5)		上方ナデ	横ハケ目	角閃石	○	にぶい褐色	
		1084	C11	深鉢	縄文	(7.8)		ナデ	ナデ	角閃石	○	褐色	
		1085	C11	深鉢	縄文	(7.8)		ナデ	指圧 ナデ	角閃石	○	褐色	
		1086	C11	深鉢	縄文			結節 沈線	横位	角閃石	○	明石色～黒褐色	
		1087	C11	深鉢	縄文	(34.0)		結節 沈線 ナデ	ヘラ状ヘラ状	角閃石	○	褐色	外面黒斑
		1088	C11	深鉢	縄文			結節 沈線 ナデ	横位	角閃石	○	褐色	
		1089	C11	深鉢	縄文			ヘラ方向の結節 沈線	ヘラ方向の丁寧なナデ	角閃石	○	褐色	
		1090	C11	深鉢	縄文			結節 沈線	横位	角閃石	△	褐色	
		1091	C11	深鉢	縄文			ヘラ方向の結節 沈線	ヘラ方向の丁寧なナデ	角閃石	○	褐色	
		1092	C11	深鉢	縄文後期			条痕	条痕 ナデ	角閃石	○	褐色	
		1093	C11	深鉢	縄文後期			沈線 条痕 隆帯	条痕	角閃石	○	褐色	
		1094	C11	深鉢	縄文後期			沈線 沈線	条痕 ナデ	角閃石	○	褐色	
		1095	C11	深鉢	縄文後期			隆帯	条痕	角閃石	○	褐色	
		1096	C11	深鉢	縄文後期			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1097	C11	深鉢	縄文後期			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1098	C11	深鉢	縄文後期			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1099	C11	深鉢	縄文後期			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1100	C11	深鉢	縄文後期			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1101	C11	深鉢	縄文後期			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1102	C11	深鉢	縄文後期			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1103	C11	深鉢	縄文後期			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1104	C11	深鉢	縄文後期			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1105	C11	深鉢	縄文後期			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1106	C11	深鉢	縄文後期			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1107	D11	深鉢	縄文後期			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1108	B11	深鉢	縄文後期			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1109	C11	深鉢	縄文後期			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1110	C11	深鉢	縄文後期			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1111	D11	深鉢	縄文後期			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1112	D11	深鉢	縄文後期			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1113	C11	深鉢	縄文後期			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1114	C11	深鉢	縄文後期			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1115	C11	深鉢	縄文後期			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1116	C11	深鉢	縄文後期			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1117	C11	深鉢	縄文後期			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1118	D11	深鉢	縄文			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1119	D11	深鉢	縄文			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1120	C11	深鉢	縄文			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1121	D11	深鉢	縄文			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1122	C11	深鉢	縄文			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1123	C11	深鉢	縄文			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1124	B11	深鉢	縄文後期	(34.0)		沈線	条痕	角閃石	○	明石色～黒褐色	
		1125	C11	深鉢	縄文後期			沈線 沈線	条痕	角閃石	○	褐色	外面黒斑
		1126	C11	深鉢	縄文後期			沈線 沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1127	C11	深鉢	縄文後期			沈線 沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1128	B11	深鉢	縄文後期			条痕	条痕	角閃石	○	褐色	
		1129	C11	深鉢	縄文後期			ナデ	指圧 ナデ	角閃石	△	褐色	
		1130	C11	深鉢	縄文後期			沈線 沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1131	C11	深鉢	縄文後期	(21.0)		沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1132	C11	深鉢	縄文後期			沈線	条痕	角閃石	○	褐色	
		1133	D11	深鉢	縄文後期			ナデ 沈線 縄文	ナデ	角閃石	○	にぶい褐色	
		1134	C11	深鉢	縄文後期			隆帯	ナデ	角閃石	○	明褐色	
		1135	C11	深鉢	縄文後期			隆帯 ナデ	ナデ	角閃石	○	褐色	
		1136	D11	深鉢	縄文後期			沈線	工具によるナデ	角閃石	○	褐色	
		1137	C11	深鉢	縄文後期	5.0		8.6 ナデ	ナデ				外面黒斑
		1138	C11	深鉢	縄文後期			沈線 結節	ナデ	角閃石	○	褐色	
		1139	C11	深鉢	縄文後期			ヘラ方向の結節 沈線	ヘラ方向のナデ	角閃石	○	褐色	
		1140	C11	深鉢	縄文後期			ヘラ方向の結節 結節文 沈線	ヘラ方向のナデ	角閃石	○	明褐色～黒褐色	
		1141	C11	深鉢	縄文後期			ナデ 結節文 沈線 沈線	指圧	角閃石	○	褐色	
		1142	C11	深鉢	縄文後期			ナデ 沈線	ナデ	角閃石	○	褐色	
		1143	C11	深鉢	縄文後期			沈線 ナデ	ナデ	角閃石	○	明褐色～黒褐色	
		1144	C11	深鉢	縄文後期			ヘラ方向の条痕 結節文 ナデ	ヘラ方向の条痕 ナデ	角閃石	○	褐色	
		1145	C11	深鉢	縄文後期			沈線 ナデ	ナデ	角閃石	○	褐色	
		1146	C11	深鉢	縄文後期			沈線 ナデ	ナデ	角閃石	○	褐色	
		1147	C11	深鉢	縄文後期			結節文 ナデ	ナデ	角閃石	○	褐色	
		1148	C11	深鉢	縄文後期			結節文 沈線	ナデ	角閃石	○	褐色	
		1149	C11	深鉢	縄文後期			ヘラ方向の条痕	ヘラ方向の条痕	角閃石	○	褐色	
		1150	C11	深鉢	縄文後期			沈線	指圧	角閃石	○	褐色	
		1151	C11	深鉢	縄文後期			横ハケ目	横ハケ目	角閃石	△	褐色	

岩鼻岩陰遺跡出土土器観察表⑧

挿図番号	図版番号	遺構番号	器種	特徴	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	色調	胎土	備考
91	1132	C12	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	褐色	○ ○ ○	
	1133	C12	深鉢	縄文				ナデ	ナデ	褐色	○ ○ ○	
	1134	C12	浅鉢	縄文晩期				研磨	研磨	黒褐色	○ ○ ○	△
	1189	C12	浅鉢	縄文後期				研磨	研磨	黒褐色	○ ○ ○	○
	1140	C12	深鉢	縄文晩期				沈線 ナデ	ナデ	明褐色～黒褐色	△ △ △	△
	1141	C12	深鉢	縄文後期				沈線 ナデ	沈線 ナデ	褐色	△ △ △	△
	1192	C12	浅鉢	縄文晩期				沈線 ナデ	ナデ	明褐色～褐色	△ △ △	△
	1193	C13	深鉢	縄文晩期				沈線 ナデ	ナデ	黒褐色	○ ○ ○	
	1194	C13	深鉢	縄文晩期				沈線 ナデ	ナデ	褐色	○ ○ ○	
	1195	C13	深鉢	縄文晩期				ナデ	研磨	黒褐色	○ ○ ○	○
	1196	C13	深鉢	縄文晩期				ナデ 油煙付着	ナデ	明黒褐色	△ △ △	△
	1197	C12	深鉢	縄文後期				ナデ 条痕	ナデ	明褐色	△ △ △	△
	1198	B13	深鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	黒褐色	○ ○ ○	
	1199	C12	深鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	褐灰色	△ △ △	△
	1200	C12	深鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	黒褐色	△ △ △	△
	1201	C12	浅鉢	縄文後期				沈線 ナデ	沈線 ナデ 研磨	黒色	○ ○ ○	○
	1202	C12	深鉢	縄文晩期				沈線 研磨	研磨	黒褐色	○ ○ ○	○
	1203	C12	深鉢	縄文晩期				ナデ	ナデ	褐色	○ ○ ○	○
	1204	C12	深鉢	縄文後期	(1.2)			ナデ	条痕	褐色	△ △ △	△
	1205	C12	深鉢	縄文後期	5.0			ナデ 条痕	ナデ	黒褐色	○ ○	○
	1206	C12	深鉢	縄文晩期	(1.6)			ナデ	ナデ	褐色	○ ○ ○	○
	1207	C12	深鉢	縄文後期	(6.7)			ナデ	ナデ	褐色	○ ○ ○	○
	1208	C13	深鉢	縄文晩期	(8.0)			研磨 沈線 研磨	研磨	明褐色	○ ○ ○	○
	1209	C13	深鉢	縄文後期				研磨 研磨	研磨	褐色	○ ○	○
	1210	C12	深鉢	縄文晩期				ナデ	ナデ	黒褐色	△ △ △	△
	1211	B13	深鉢	縄文後期				ナデ 沈線	焦痕跡ナデ	明褐色	○ ○ ○	○
	1212	C12	深鉢	縄文後期				ナデ 沈線	ナデ	褐色	○ ○ ○	○
	1213	C12	浅鉢	縄文後期				沈線 研磨	ナデ	黒褐色	△ △ △	△
	1214	C12	深鉢	縄文晩期				研磨 研磨 研磨	ナデ	褐色	○ ○ △	○
	1215	C13	深鉢	縄文晩期	(8.0)			ナデ	ナデ	褐色	○ ○ ○	○
	1216	B12	深鉢	縄文				条痕後ナデ	条痕後ナデ	明黒褐色	○ ○ ○	△
	1240	B13	深鉢	縄文晩期				ナデ	ナデ	褐色	△ △	
	1241	D13	深鉢	縄文晩期				条痕	条痕後ナデ	明灰黒色	△ △ △	○
	1242	D13	深鉢	縄文				沈線 研磨	研磨	灰黒色	△ △	
	1243	B13	深鉢	縄文				ナデ 研磨 焦痕 無み	研磨	黒褐色	○ ○ ○	○
	1250	B13	鉢	弥生中期				研磨 ナデ	ナデ	黒色	△ △	○
	1251	D13	台	弥生中期				焦痕跡	研磨	黒褐色	△ △	△
	1252	B13	鉢	弥生中期				研磨	研磨	褐色	○ ○ ○	○
	1253	C13	深鉢	縄文晩期	(9.0)			ナデ 沈線	ナデ	黒褐色～褐灰色	○ ○ ○	
	1254	C13	深鉢	縄文後期				沈線 結束工具によるナデ	ナデ	黒褐色～褐灰色	○ ○	○
	1255	C13	深鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	ナデ	褐色	○ ○ ○	○
	1256	C13	深鉢	縄文晩期				沈線	研磨 研磨	褐色	○ ○	
	1257	B13	深鉢	縄文後期				沈線	条痕 研磨	黒褐色	△ △	
	1258	C13	深鉢	縄文後期				条痕 結束工具によるナデ	ナデ	明褐色	○ ○	
	1259	B13	深鉢	弥生中期				沈線 条痕	ナデ	黒褐色	△ △	
98	1260	C13	深鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	研磨	褐色	△ △	
	1261	B13	深鉢	縄文後期				条痕 沈線	研磨	褐色	△ △	
	1262	B13	深鉢	縄文晩期				ナデ	ナデ	褐色	○ ○	
	1263	C13	深鉢	縄文晩期				沈線	ナデ	黒褐色	○ ○ ○	○
	1264	B13	深鉢	縄文晩期				結束工具によるナデ	研磨	褐色	○ ○ ○	
	1265	C13	深鉢	縄文晩期				研磨 研磨	研磨	褐色	○ ○	
	1266	C13	深鉢	縄文晩期				研磨 沈線	ナデ	明褐色	○ ○	
	1267	B13	深鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	褐色	○ ○	
	1268	B13	深鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	褐色	○ ○	
	1269	C13	深鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	褐色	○ ○	
	1270	C13	深鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	褐色	○ ○	
	1271	C13	深鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	褐色	○ ○	
	1272	B13	深鉢	縄文後期				研磨	ナデ	褐色	○ ○	
	1273	C13	深鉢	縄文後期				研磨	研磨	褐色	○ ○	
99	1274	C13	深鉢	縄文後期				研磨	ナデ 条痕	褐色	○ ○	○
	1275	C13	深鉢	縄文晩期				ナデ 工具によるナデ	ナデ	黒褐色	○ ○	
	1276	C13	深鉢	縄文晩期				ナデ	研磨 研磨	褐色	○ ○	△
	1277	B13	深鉢	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△ △	
	1278	C13	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	褐色	○ ○	
	1279	C13	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	褐色	○ ○	
	1280	B13	深鉢	縄文晩期				条痕	ナデ	褐色	○ ○	○
	1281	C14	深鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	褐色	○ ○	
	1282	C13/C15	深鉢	縄文後期	(15.0)			研磨 沈線	研磨	褐色	△ △ △	△
	1283	C12	深鉢	縄文後期				研磨 沈線	研磨	黒褐色～褐灰色	○ ○	
	1284	B13	深鉢	縄文後期				研磨 沈線	研磨	褐色	△ △	
	1285	C13	深鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	ナデ	褐色	△ △	
	1286	C13	深鉢	縄文後期				研磨 沈線 刃形ヘラ状刺突	研磨	褐色	△ △	
	1287	C13	深鉢	縄文後期				研磨 沈線	研磨	褐色	△ △	
	1288	C12	深鉢	縄文後期				ナデ 沈線	ナデ	褐色	△ △	
	1289	C13	深鉢	縄文晩期	(21.0)			工具ナデ 研磨 沈線 刃形ヘラ状刺突	工具ナデ	黒色	○ ○ △	△
	1290	C13	深鉢	縄文後期				ヘラ状研磨 工具ヘラ状刺突	ヘラ状研磨	褐色	○ ○	
	1291	B13	深鉢	縄文晩期				研磨	研磨	褐色	○ ○	
	1292	B13	深鉢	縄文後期				研磨	ナデ	褐色	△ △	
	1293	C12	深鉢	縄文後期				沈線 ナデ	ナデ	褐色	○ ○	
	1294	C13	深鉢	縄文晩期				沈線 縄文 ナデ	研磨	褐色	○ ○	
	1295	C13	深鉢	縄文晩期	7.2			ナデ	ナデ	褐色	○ ○	
	1296	C13	深鉢	縄文晩期	(7.3)			ナデ	ナデ	褐色	○ ○	
	1297	C13	深鉢	縄文後期				指の方向の条痕	ナデ	褐色	○ ○	○
	1298	C13	深鉢	縄文後期	8.4			横方向の条痕	ナデ	褐色	○ ○	
100	1299	C13	深鉢	縄文晩期				沈線 縄文 ナデ	ナデ	褐色	○ ○	
	1300	C13	深鉢	縄文晩期				沈線 縄文 研磨	ナデ	褐色	○ ○	
	1301	C13	深鉢	縄文後期				ナデ 研磨	ナデ	褐色	○ ○	
	1302	C13	深鉢	縄文後期				研磨	研磨	褐色	△ △	△
	1303	C13	深鉢	縄文後期				結束縄文 ナデ	研磨	褐色	△ △	
	1304	C13	深鉢	縄文晩期				結束縄文 沈線	ナデ	褐色～黒色	○ ○	
	1305	C13	深鉢	縄文後期				横方向の条痕後ナデ 結束縄文	ナデ	褐色～明褐色	△ △	△
	1306	C13	深鉢	縄文晩期	(23.0)			研磨 縄文	研磨	明灰色	○ ○	○

岩鼻岩陰遺跡出土土器観察表⑨

遺構番号	遺物番号	調査区名	器種	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面	内面	色調	焼成 角閃石	金雲母	石英	大小石	備考
100	1307	C15	深鉢	縄文後期				横ハケ調整	横ハケ調整	黒い赤褐色	○	○		○	
	1308	C15	深鉢	縄文後期				ナデ 縄文	ナデ	赤褐色	○	○		△	
	1309	C15	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	赤褐色	△	△			
	1310	C15	深鉢	縄文後期				横方向の条痕 縄文	横方向の条痕	黒褐色	△	△			
	1311	C15	深鉢	縄文後期				横ハケ 上位沈線	ナデ	赤褐色	○	○			
	1312	C15	深鉢	縄文前期	9.2			ナデ	ナデ	黒色	△	△		△	
	1313	D15	深鉢	縄文後期				沈線 縄文	縦ミガキ ナデ	明るい赤褐色	△	△		△	
	1314	C15	深鉢	縄文後期				ナデ 沈線	ナデ	赤褐色	○	○			
	1315	C15	深鉢	縄文後期				横ハケ ナデ	ナデ	明褐色~暗褐色	○	○			
	1316	D12	鉢形	縄文後期				指紋のような押圧文	ナデ 押圧文	にぶい黄色	○	○	△	△	
	1317	C12	深鉢	縄文後期				横ハケ	ナデ	赤褐色	○	△			
	2306	B14	深鉢	縄文後期			(1.6)	横位で条痕	横ハケ	明褐色	○	○	△	○	
	1377	B14	浅	弥生中期				ナデ 粘土紐接着 縦ミガキ	ナデ	暗灰色	○			△	
	1379	C14	壺	弥生中期				ナデ 粘土紐接着	ナデ	赤褐色	○				
	1378	C15	壺	弥生中期				横方向の条痕 縦ミガキ 突帯	ナデ	明褐色	△			△	
	1380	B14	甕	弥生中期				ナデ 粘土紐接着	ナデ	にぶい黄褐色	△				
	1381	B14	甕	縄文後期				ナデ 縦ミガキ	指紋	赤褐色	△			△	
	1382	C14	鉢	縄文後期				横ハケ	横ハケ	黒褐色	△	△			
	1383	D14	皿	弥生後期				ナデ 底部の縁あたりに横方向ミガキ 底部 底部ナデ	ナデ	赤褐色	○	○		○	
	1384	B14	浅	弥生後期				条痕 横位沈線	ナデ	明褐色	△				
	1385	B14	浅	弥生中期				ナデ 条痕 底部ナデ	ナデ	黒褐色	△			△	
110	1386	C14	浅	弥生中期				横位条痕 横方向の条痕	ナデ	明褐色	△				
	1387	D14	浅	弥生中期				ナデ 横位条痕	ナデ	明褐色	○				
	1388	C14	壺	縄文後期				縦方向の磨消縄文	ナデ	黒い褐色	△	△		△	
	1389	C14	鉢形	縄文後期				ナデ 縦ミガキ	ナデ	赤褐色~暗褐色	○				
	1390	B14	鉢形	縄文後期				横ハケ ナデ ナデ	指紋	にぶい黄褐色					
	1391	D14	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	明褐色	△			○	
	1392	B14	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	灰黄褐色	△	△			
	1393	B14	深鉢	縄文後期				ナデ 条痕	ナデ	赤褐色	○	△			
	1394	C14	深鉢	縄文後期				横方向の条痕	ナデ	明褐色	○				
	1395	C14	深鉢	縄文後期				条痕	ナデ	赤褐色	○	○			
	1396	B14	深鉢	縄文後期				条痕	ナデ	赤褐色	○	○			
	1397	B14	深鉢	縄文後期				ナデ 縦方向ミガキ	ナデ	明褐色	△			○	
	1398	B14	深鉢	縄文後期	(15.0)			結節浅沈線 縦方向の磨消	縦方向の磨消	黒色	△	△			赤褐色粒・雲母
	1399	D14	深鉢	縄文後期				横ハケ 沈線	横ハケ	明褐	○				
	1400	D15	浅鉢	縄文後期				横ハケ 沈線	横ハケ	明褐色	△			○	
	1401	C14	浅鉢	縄文後期				ナデ ナデ	横ハケ	赤褐色	△	△			
	1402	B14	浅鉢	縄文後期				横ハケ	横ハケ	明褐色		△			
	1403	D14	浅鉢	縄文後期			(8.6)	ナデ 指頭痕文	ナデ	灰黒色	○			△	
	1404	B14	浅鉢	縄文後期			(11.0)	条痕 ナデ	条痕	にぶい黄褐色	△			△	雲母多
111	1405	B14	深鉢	縄文後期				ナデ 沈線	ナデ	にぶい赤褐色	△	△			
	1406	C14	深鉢	縄文前期				ナデ	ナデ	黒・褐色					
	1407	D14	深鉢	縄文後期				条痕 ナデ	ナデ	灰褐色	○			△	
	1408	E14	浅鉢	縄文後期				条痕 ナデ	縦ミガキ	にぶい黄褐色	○			△	
	1409	C14	深鉢	縄文後期				ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○			△	
	1410	C14	深鉢	縄文後期				横ハケ 結節 沈線 縦文	横ハケ	明褐色	○	○			
	1411	D14	深鉢	縄文後期				ナデ 結節縦文 沈線	ナデ	にぶい褐色	○	△	△	○	
	1412	C14	深鉢	縄文後期				沈線 結節 縦文	横ハケ	黒褐色	○				
	1413	C14	深鉢	縄文後期				ナデ 縦文 沈線	ナデ	赤褐色	△			○	
	1414	C14	深鉢	縄文後期				ナデ 沈線 結節縦文	ナデ	赤褐色	△				
	1415	C14	深鉢	縄文後期				横ハケ 結節縦文 沈線	横ハケ 横ハケ	暗褐色	○	○			
	1416	D15	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	にぶい褐色	○	○	○	○	
	1417	C14	深鉢	縄文後期				横方向の条痕	ナデ	黒い褐色	○	○			
	1418	C14	深鉢	縄文後期				ナデ	横ハケ	明褐色	△	△			
	1419	C14	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	明褐色	△	△		△	
112	1420	C14	深鉢	縄文後期				沈線	ナデ	暗褐色	○	○			
	1421	C14	深鉢	縄文後期				横結節の沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1422	C14	深鉢	縄文後期				二段結束縦文	ナデ	明褐色	○	○			
	1423	D14	深鉢	縄文後期			(7.0)	ナデ	ナデ	黒い褐色	△	○			
	1424	C14	鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	褐灰色	○	○			
	1425	D15	深鉢	縄文後期			(5.4)	ナデ 指紋の上縦ナデ 指ナデ 無調整	ナデ 指紋の工具ナデ	明褐色~一部灰黒色	○	○	△	△	
	1426	C14	鉢	縄文後期				横ハケ 沈線 縦文	横ハケ	黒褐色	△				
	1427	C14	深鉢	縄文後期				ナデ 縦文 沈線 横方向ミガキ	横ハケ	黒い褐色	△	△			
	1428	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1429	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○	△		
	1430	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1431	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1432	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1433	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1434	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1435	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1436	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1437	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1438	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1439	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1440	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1441	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1442	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1443	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1444	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1445	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1446	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1447	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1448	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1449	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1450	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1451	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1452	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1453	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1454	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1455	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1456	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1457	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1458	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1459	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1460	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1461	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1462	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1463	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1464	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1465	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1466	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1467	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1468	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1469	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1470	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1471	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1472	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1473	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1474	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1475	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1476	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1477	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1478	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1479	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1480	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1481	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1482	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1483	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1484	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1485	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1486	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1487	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1488	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1489	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1490	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1491	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1492	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1493	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1494	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1495	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1496	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1497	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1498	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1499	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1500	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1501	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1502	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1503	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			
	1504	D14	深鉢	弥生中期				横ナデ 沈線	ナデ	明褐色	○	○			

岩鼻岩陰遺跡出土土器観察表⑩

挿図番号	遺物番号	調査区名	層位	特徴	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土 外面	胎土 内面	色調 外面	色調 内面	焼成	備考
124	1505	ﾊﾞﾝｶｸ	表面	縄文後期土器				ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	明褐色	明褐色	○	
	1506	ﾊﾞﾝｶｸ	表面	縄文後期				ﾍﾗﾅﾃﾞ 波線	ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	黒褐色	△	
	1507	ﾊﾞﾝｶｸ	表面	縄文後期				ﾍﾗﾅﾃﾞ 波線	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	○	
	1508	ﾊﾞﾝｶｸ	表面	縄文後期				ﾍﾗﾅﾃﾞ 波線	ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	黒褐色	○	
	1509	ﾊﾞﾝｶｸ	表面	縄文後期				ﾍﾗﾅﾃﾞ 波線	ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	黒褐色	○	
	1510	ﾊﾞﾝｶｸ	表面	縄文後期				ﾍﾗﾅﾃﾞ 波線	ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	黒褐色	○	
	1511	ﾊﾞﾝｶｸ	表面	縄文後期				ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ 沓	磨耗	黒褐色	黒褐色	△	
	1512	ﾊﾞﾝｶｸ	表面	縄文後期				ﾍﾗﾅﾃﾞ	磨耗 ﾍﾗﾅﾃﾞ	褐色	褐色	△	
	1513	ﾊﾞﾝｶｸ	表面	縄文後期				ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	褐色	褐色	△	
	1514	ﾊﾞﾝｶｸ	表面	縄文後期				ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	明褐色	明褐色	△	
	1515	ﾊﾞﾝｶｸ	表面	縄文後期				ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒色	黒色	△	
	1516	ﾊﾞﾝｶｸ	表面	縄文後期		(5.7)	ﾃﾞｱﾐ	ﾃﾞｱ	ﾃﾞｱ	暗褐色	暗褐色	△	
	1517	ﾊﾞﾝｶｸ	表面	縄文後期		7.9	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾃﾞｱ	ﾃﾞｱ	明褐色	明褐色	○	
	1518	ﾊﾞﾝｶｸ	表面	縄文後期		(6.0)	ﾃﾞｱ	ﾃﾞｱ	ﾃﾞｱ	褐色～暗褐色	褐色	○	
	1519	ﾊﾞﾝｶｸ	表面	縄文後期		(8.1)	ﾍﾗﾅﾃﾞ	磨耗	磨耗	黒褐色	黒褐色	△	
	1520	ﾊﾞﾝｶｸ	表面	縄文後期		9.5	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾃﾞｱ 指圧	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	○	
	1521	ﾊﾞﾝｶｸ	表面	縄文後期				沈線	ﾍﾗﾅﾃﾞ	明褐色	明褐色	○	
	1522	ﾊﾞﾝｶｸ	表面	縄文後期				沈線 刻線	ﾍﾗﾅﾃﾞ	褐色	褐色	△	
	1523	ﾊﾞﾝｶｸ	表面	縄文後期				刻ﾍﾗﾅﾃﾞ ﾃﾞｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	褐色	褐色～暗褐色	△	
	1524	ﾊﾞﾝｶｸ	表面	縄文後期				沈線 ﾃﾞｱ	ﾃﾞｱ	黒褐色	黒褐色	○	
	1525	ﾊﾞﾝｶｸ	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 金属 刻付線	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1526	ﾊﾞﾝｶｸ	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 刻付線	ﾃﾞｱ	黒褐色	黒褐色	△	
128	1527	B15	表	弥生土器				ﾃﾞｱ 金属	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1528	B15	表	弥生土器				ﾃﾞｱ 刻付線	ﾃﾞｱ	黒褐色	黒褐色	△	
	1529	B15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 金属	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1530	C15	表	弥生中期	(28.0)			沈線 刻線 ﾃﾞｱ	ﾃﾞｱ	黒褐色～暗褐色	黒褐色	△	
	1531	C15	表面	縄文後期	(26.4)			ﾃﾞｱ 沈線 刻文	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1532	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1533	D15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 刻付線	ﾃﾞｱ	黒褐色	黒褐色	△	
	1534	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 金属	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1535	B15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 刻付線	ﾃﾞｱ	黒褐色	黒褐色	△	
	1536	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 金属 刻付線	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1537	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 刻付線	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1538	C15	表面	縄文後期				刻付線 ﾃﾞｱ	ﾃﾞｱ	黒褐色～暗褐色	黒褐色	△	
	1539	C15	表	弥生中期				刻付線 金属	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1540	C15	表面	縄文後期	(26.4)			ﾃﾞｱ 沈線 刻文	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1541	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1542	D15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 刻付線	ﾃﾞｱ	黒褐色	黒褐色	△	
	1543	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 金属	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1544	B15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 刻付線	ﾃﾞｱ	黒褐色	黒褐色	△	
	1545	D15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 刻付線	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1546	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 刻付線	磨耗	褐色	褐色～暗褐色	△	
	1547	C15	表面	縄文後期				刻付線 ﾃﾞｱ ﾃﾞｱ	ﾃﾞｱ 条痕	褐色	褐色	△	
	1548	B15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 沈線	ﾃﾞｱ	黒褐色	黒褐色	△	
	1549	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 金属～ﾍﾗﾅﾃﾞ ﾃﾞｱ(～ﾍﾗ)	磨耗	褐色	褐色	△	
	1550	D15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 条痕	ﾃﾞｱ	褐色	にぶい黄褐色	△	
	1551	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 条痕	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1552	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 条痕	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1553	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1554	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 条痕	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1555	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1556	B15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1557	C15	表面	縄文後期				沈線 ﾃﾞｱ	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1558	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 沈線	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1559	C15	表面	縄文後期				沈線 刻線	磨耗	褐色	褐色	△	
	1560	D15	表面	縄文後期				沈線 刻線	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1561	B15	表面	縄文後期				磨耗 ﾃﾞｱ 沈線	磨耗	褐色	褐色	△	
129	1562	C15	表面	縄文後期				磨耗 ﾃﾞｱ 沈線	磨耗	褐色	褐色	△	
	1563	C15	表面	縄文後期				沈線 磨耗	沈線 磨耗	褐色	褐色	△	
	1564	C15	表面	縄文後期				沈線 磨耗	ﾃﾞｱ 沈線	褐色	褐色	△	
	1565	B-F	表面	縄文後期				磨耗 ﾃﾞｱ 沈線	磨耗 ﾃﾞｱ 沈線	褐色	褐色	△	
	1566	C15	表面	縄文後期				磨耗 ﾃﾞｱ 沈線	磨耗	褐色	褐色	△	
	1567	C15	表面	縄文後期				磨耗 ﾃﾞｱ 沈線	磨耗	褐色	褐色	△	
	1568	D15	表面	縄文後期				磨耗	磨耗	褐色	褐色	△	
	1569	C15	表面	縄文後期				磨耗 ﾃﾞｱ 沈線	磨耗	褐色	褐色	△	
	1570	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 沈線 磨耗	磨耗	褐色	褐色	△	
	1571	C15	表面	縄文後期				磨耗 ﾃﾞｱ	磨耗	褐色	褐色	△	
	1572	D15	表面	縄文後期				磨耗 沈線 磨耗	磨耗	褐色	褐色	△	
	1573	C15	表面	縄文後期				磨耗 沈線 磨耗	磨耗	褐色	褐色	△	
	1574	C15	表面	縄文後期				沈線 磨耗	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1575	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 沈線	磨耗	褐色	褐色	△	
	1576	C15	表面	縄文後期	(27.0)			沈線 磨耗 刻線文 ﾃﾞｱ	磨耗	褐色	褐色	△	
	1577	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 沈線 刻線文	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1578	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 刻文	磨耗	褐色	褐色	△	
	1579	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 刻文	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1580	C15	表面	縄文後期				磨耗 刻文	磨耗	褐色	褐色	△	
	1581	C15	表面	縄文後期				磨耗 刻文	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1582	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 条痕	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
130	1583	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 条痕	磨耗	褐色	褐色	△	
	1584	B15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ ﾃﾞｱ	磨耗	褐色	褐色	△	
	1585	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1586	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 条痕	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1587	D15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ	磨耗	褐色	にぶい黄褐色～褐色	△	
	1588	B15	表面	縄文後期		5.9	ﾃﾞｱ	ﾃﾞｱ	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1589	C15	表面	縄文後期		(1.8)	磨耗ﾃﾞｱ不明	ﾃﾞｱ	磨耗 ﾃﾞｱ不明	褐色	褐色	△	
	1590	B15	表面	縄文後期		3.8	ﾃﾞｱ	沈線 刻文	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1591	D15	表面	縄文後期				条痕	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1592	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1593	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 沈線	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1594	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 横位	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1595	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 横位～斜線	ﾃﾞｱ 横位～斜線	褐色	にぶい黄褐色	△	
	1596	C15	表面	縄文後期				条痕 ﾃﾞｱ	磨耗	褐色	褐色	△	
	1597	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
131	1598	C15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 沈線	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1599	C15/D15	表面	縄文後期				ﾃﾞｱ 横位 斜線	ﾃﾞｱ 横位 斜線	褐色	にぶい黄褐色	△	
	1600	C15	表面	縄文後期				条痕 ﾃﾞｱ	磨耗	褐色	褐色	△	
	1601	C15	表面	縄文後期				条痕 ﾃﾞｱ	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	
	1602	C15	表面	縄文後期				条痕	条痕	褐色	褐色	△	
	1603	C15/C17	表面	弥生後期				条痕 ﾃﾞｱ	ﾃﾞｱ	褐色	褐色	△	

岩鼻岩陰遺跡出土土器観察表⑪

遺物番号	図版番号	器種	部位	胎土	焼成	色調	外面	内面	色調	底径	器形	文様	備考
1074	C18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR 横撫で	褐灰色	○		○	
1075	C15	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	黒色	○		○	
1076	C16	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	にぶい褐色	△		△	
1077	C26	深鉢	波状口縁				5YR 横撫で	5YR	黒褐色	△	△	△	
1078	C18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1079	C18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	○	△	△	
1080	C16	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	にぶい褐色	△	△	△	
1081	C28	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐灰色	△	△	△	
1082	C18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	黒褐色	△	△	△	
1083	C16	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	○	△	△	
1084	C18/C19	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐灰色	△	△	△	
1085	C18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	にぶい褐色	△	△	△	
1086	C18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1087	C16	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	にぶい褐色	△	△	△	
1088	C18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1089	C18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1090	C18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1091	C18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐灰色	△	△	△	
1092	C18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐灰色	△	△	△	
1093	C18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐灰色	△	△	△	
1094	C18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	にぶい褐色	△	△	△	
1095	C18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	にぶい褐色	△	△	△	
1096	D15	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	にぶい褐色	△	△	△	
1097	D18/D19	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	にぶい褐色	△	△	△	
1098	C17/C18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1099	D17	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1100	C17	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1101	C17	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1102	C17	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1103	C17/C18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1104	C17/C18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1105	C17	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1106	C17	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1107	C17	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1108	D17	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1109	D17	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1110	D17	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1111	D17	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1112	D17	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1113	D17	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1114	D17	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1115	D17	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1116	C17	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1117	D17/D18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1118	D17/D18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1119	D18/D19	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1120	D18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1121	D18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1122	D18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1123	D18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1124	D18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1125	D18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1126	D18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1127	D18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1128	D18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1129	D18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1130	D18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1131	D18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1132	D18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1133	D18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1134	D18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1135	D18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1136	D18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1137	D18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1138	D18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1139	D18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1140	D18	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1141	A7	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1142	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1143	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1144	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1145	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1146	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1147	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1148	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1149	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1150	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1151	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1152	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1153	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1154	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1155	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1156	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1157	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1158	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1159	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1160	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1161	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1162	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1163	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1164	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1165	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1166	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1167	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1168	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1169	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1170	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1171	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1172	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1173	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1174	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1175	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1176	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1177	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1178	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1179	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1180	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1181	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1182	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1183	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1184	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1185	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1186	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1187	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1188	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1189	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1190	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1191	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1192	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1193	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1194	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1195	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1196	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1197	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1198	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1199	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1200	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1201	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1202	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1203	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1204	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1205	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1206	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1207	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1208	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1209	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1210	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1211	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1212	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1213	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1214	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1215	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1216	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1217	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1218	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1219	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1220	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1221	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1222	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1223	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1224	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1225	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1226	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1227	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1228	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1229	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1230	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1231	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1232	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1233	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1234	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1235	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1236	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1237	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1238	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1239	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1240	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1241	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1242	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1243	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1244	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1245	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1246	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1247	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1248	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	
1249	B11	深鉢	波状口縁				7.5YR 撫で	7.5YR	褐色	△	△	△	

岩鼻岩陰遺跡出土石器観察表①

挿図番号	遺物番号	測定箇所	器種	石材	最大 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
15	10	C1	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.55	0.5	1.6	
	11	C1	石鏃	チャート	1.3	1.4	0.2	0.1	
	12	C1	石鏃	硬質頁岩	1.6	1.5	0.3	0.6	
	13	C1	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.2	0.4	0.8	
	14	C1	石鏃	硬質頁岩	2.2	1.7	0.4	0.8	
	15	B1	不明	硬質頁岩	1.4	1.4	0.35	0.4	
	16	C1	石鏃未製品	硬質頁岩	1.9	2.0	0.9	2.1	
	17	A1	剥片	チャート	2.6	4.8	0.5	6.7	
	18	C2	石鏃	硬質頁岩	1.4	1.3	0.4	0.2	
	19	C2	石鏃	チャート	1.5	1.2	0.2	0.2	
	20	C2	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.0	0.3	0.1	
	21	C2	石鏃	硬質頁岩	2.3	1.3	0.3	0.7	
	22	C2	石鏃	硬質頁岩	2.1	1.5	0.3	0.6	
	23	B2	石鏃	硬質頁岩	1.7	1.2	0.3	0.3	
	24	C2	石鏃	硬質頁岩	2.4	1.9	0.5	1.6	
	25	B2	石鏃	硬質頁岩	1.7	1.6	0.4	0.8	
	26	C2	石鏃	硬質頁岩	1.5	1.2	0.4	1.1	
17	27	C2	石匙	硬質頁岩	27.5	20.0	7.4	7500	
22	28	D1	石鏃	硬質頁岩	1.3	1.3	0.35	0.5	
	29	D1	石鏃	硬質頁岩	1.7	1.1	0.3	0.4	
	30	D1	不明	硬質頁岩	1.5	1.4	0.4	0.6	
	31	D1	石鏃	硬質頁岩	1.5	1.3	0.3	0.5	
	32	D1	石鏃	硬質頁岩	1.6	1.5	0.3	0.5	
	33	D1	石鏃	硬質頁岩	1.7	1.2	0.3	0.4	
	34	D1	石鏃	チャート	1.1	1.2	0.25	0.3	
	35	D1	石鏃	チャート	1.8	1.2	0.3	0.5	
	36	D1	石鏃	チャート	1.4	1.4	0.35	0.2	
	37	D1	不明	硬質頁岩	1.6	1.4	0.2	0.2	
	38	D1	不明	硬質	1.9	1.3	0.2	0.2	
	39	D1	石鏃	硬質頁岩	1.3	1.3	0.2	0.2	
	40	D1	石鏃	硬質頁岩	1.6	1.2	0.3	0.3	
	41	D1	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.3	0.3	0.3	
	42	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.4	0.4	0.6	
	43	D1	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.2	0.3	0.4	
	44	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.3	0.3	0.4	
	45	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.4	0.3	0.4	
	46	D1	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.3	0.3	0.4	
	47	D1	石鏃	硬質頁岩	1.6	1.2	0.3	0.3	
	48	D1	石鏃	硬質頁岩	1.4	1.2	0.3	0.4	
	49	D1	石鏃	硬質頁岩	1.6	1.2	0.3	0.4	
	50	D1	石鏃	チャート	1.7	1.5	0.3	0.6	
	51	D1	石鏃	硬質頁岩	2.0	1.5	0.35	0.8	
	52	D1	石鏃	硬質頁岩	2.1	1.1	0.35	0.6	
	53	D1	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.3	0.4	0.6	
	54	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.4	0.6	
	55	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.4	0.4	0.6	
24	56	D1	石鏃	硬質頁岩	2.0	1.3	0.3	0.5	
	57	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.4	0.3	0.4	
	58	D1	石鏃	チャート	1.7	1.5	0.3	0.6	
	59	D1	石鏃	硬質頁岩	2.1	1.1	0.35	0.5	
	60	D1	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.3	0.4	0.6	
	61	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.3	0.3	0.4	
	62	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.3	0.25	0.5	
	63	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	64	D1	石鏃	硬質頁岩	1.4	1.1	0.3	0.2	
	65	D1	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.3	0.3	0.3	
	66	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.3	
	67	D1	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.3	0.3	0.4	
	68	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.3	0.3	0.4	
	69	D1	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.3	0.3	0.4	
	70	A1	不明	硬質頁岩	1.8	1.3	0.3	0.4	
	71	B1	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.3	0.3	0.3	
	72	D1	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.1	0.35	0.2	
	73	D1	石鏃	硬質頁岩	1.7	1.1	0.35	0.2	
	74	D1	石鏃	硬質頁岩	2.0	1.2	0.35	0.4	
	75	D1	石鏃	チャート	1.5	1.4	0.2	0.2	
	76	D1	石鏃	硬質	1.9	1.1	0.2	0.2	
	77	D1	石鏃	硬質	1.8	1.3	0.3	0.3	
	78	D1	石鏃	硬質頁岩	2.0	1.4	0.35	0.2	
	79	D1	不明	硬質頁岩	2.0	1.4	0.3	0.2	
	80	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.4	0.3	0.3	
	81	D1	石鏃	チャート	1.7	1.3	0.3	0.4	
	82	D1	石鏃	硬質頁岩	1.6	1.3	0.25	0.3	
	83	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	84	D1	石鏃	硬質頁岩	1.4	1.1	0.3	0.2	
	85	D1	不明	硬質頁岩	1.35	1.2	0.3	0.3	
	86	D1	不明	硬質頁岩	1.4	1.1	0.3	0.2	
	87	D1	石鏃	硬質頁岩	1.0	1.5	0.2	0.2	
	88	D1	石鏃	硬質頁岩	1.4	1.2	0.3	0.4	
	89	D1	石鏃	硬質頁岩	1.6	1.1	0.3	0.3	
	90	A3	石匙	チャート(背面ポジ(裏面あり)	1.7	1.5	0.3	0.6	
	91	B1	石鏃	硬質頁岩	2.0	1.5	0.35	0.8	
	92	D1	石鏃	硬質頁岩	2.1	1.1	0.35	0.6	
	93	D1	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.3	0.4	0.6	
	94	A3	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.4	0.4	0.6	
	95	B3	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.3	0.35	0.4	
	96	A3	石匙	石英斑岩(黒色系)	1.5	1.0	0.3	0.4	
	97	B3	石鏃	黒色頁岩(黒色系)	2.6	1.2	0.25	0.2	
	98	B3	石鏃	黒色頁岩(黒色系)	2.4	1.3	0.3	0.5	
	99	B3	石鏃	硬質頁岩	2.2	1.3	0.3	0.5	
	100	B3	石鏃	硬質頁岩	2.9	1.4	0.3	0.8	
	101	B3	石鏃	黒色頁岩(黒色系)	1.8	1.3	0.25	0.4	
	102	B3	石鏃	硬質頁岩	1.5	1.3	0.3	0.4	
	103	B3	石鏃未製品	硬質頁岩	2.6	1.2	0.3	0.6	
	104	B3	石鏃	硬質頁岩	2.2	1.3	0.3	0.5	
	105	B3	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.3	0.3	0.4	
	106	B3	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.2	0.3	0.4	
	107	B3	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.2	0.3	0.4	
	108	B3	石鏃	硬質頁岩	2.4	1.4	0.3	0.7	
	109	B3	石鏃	硬質頁岩	1.6	1.3	0.3	0.4	
	110	B3	石鏃	硬質頁岩	2.4	1.4	0.3	0.7	
	111	B3	石鏃	硬質頁岩	1.6	1.3	0.3	0.4	
	112	B3	石鏃	硬質頁岩	1.6	1.3	0.3	0.4	
	113	B3	石鏃	硬質頁岩	2.4	1.2	0.3	0.5	
	114	B3	石鏃	硬質頁岩	1.7	1.2	0.3	0.4	
	115	B3	石鏃	硬質頁岩	2.0	1.1	0.2	0.2	
	116	B3	石鏃	硬質頁岩	2.0	1.0	0.15	0.1	
	117	B3	石匙	硬質頁岩(背面ポジ)	1.5	1.1	0.2	0.2	
	118	B3	石鏃	硬質頁岩	2.1	1.5	0.3	0.4	
	119	B3	石鏃	硬質頁岩	1.4	1.5	0.3	0.3	
	120	B3	石鏃	硬質頁岩	1.6	1.5	0.45	0.6	
	121	B3	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.0	0.35	0.1	
	122	B3	不明	硬質頁岩(背面ポジ)	2.0	1.3	0.3	0.7	
25	123	B3	石鏃	硬質頁岩(背面ポジ)	2.5	1.0	0.5	1.0	
	124	B3	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.4	0.1	0.3	
	125	A3	石鏃	硬質頁岩	2.0	1.4	0.1	0.3	下部ポジ

岩鼻岩陰遺跡出土石器観察表②

挿図番号	遺物番号	測定箇所	器種	石材	最大 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
25	126	B3	石鏃	硬質頁岩	2.3	1.4	0.3	0.7	
	127	B3	石鏃	硬質頁岩	1.5	0.9	0.2	0.2	
	128	A3	石鏃	硬質頁岩	1.7	1.2	0.35	0.2	
	129	B3	石鏃	硬質頁岩	1.7	1.0	0.3	0.2	
	130	B3	石鏃	硬質頁岩	1.2	1.0	0.2	0.2	
	131	B3	石鏃	硬質頁岩	1.6	1.0	0.3	0.2	
	132	C4	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.0	0.25	0.2	
26	133	B3	石鏃	硬質頁岩	2.4	1.2	0.3	0.2	
	134	B3	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.2	0.3	0.2	
	135	B3	石匙	チャート(背面ポジ)	1.8	1.2	0.35	0.1	
	136	B3	石鏃	硬質頁岩	1.5	1.1	0.3	0.2	
	137	D1	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.1	0.2	0.1	
	138	A2	不明	硬質頁岩	1.4	0.8	0.2	0.2	
	139	A2	不明	硬質頁岩	1.5	0.9	0.1	0.0	
	140	B3	石鏃	硬質頁岩	2.0	1.0	0.3	0.2	
	141	A3	石鏃	硬質頁岩	2.0	1.0	0.4	0.2	
	142	B3	石匙	硬質頁岩	2.4	2.2	0.3	1.2	
	143	B3	石鏃	硬質頁岩	1.5	1.2	0.3	0.2	
26	144	B3	石匙	チャート	2.8	2.0	0.7	4.2	
27	145	A3	剥片	硬質頁岩	5.3	9.4	4.1	225.8	石鏃
31	146	D1	不明	硬質頁岩	2.3	1.25	0.3	0.6	
	147	B1	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.2	0.1	0.0	
	148	A1	石鏃	硬質頁岩	1.6	1.3	0.2	0.2	
	149	C4	石鏃	硬質頁岩	2.2	1.4	0.3	0.6	
	150	C4	石鏃	硬質頁岩	2.7	1.6	0.4	1.5	
	151	C4	石鏃	硬質頁岩	1.4	0.9	0.2	0.2	
	152	C4	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.0	0.4	0.4	
	153	C4	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.2	0.3	0.3	
	154	A1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.0	0.6	1.4	
	155	C1	不明	硬質頁岩	1.7	1.4	0.3	0.4	
	156	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.2	
	157	C1	不明	チャート	1.4	1.0	0.3	0.4	
	158	B1	石鏃	硬質頁岩	1.7	1.0	0.35	0.5	
	159	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	160	A2	石鏃	硬質頁岩	1.8	1.2	0.3	0.4	
	161	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	162	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	163	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	164	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	165	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	166	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	167	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	168	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	169	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	170	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	171	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	172	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	173	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	174	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	175	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	176	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	177	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	178	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	179	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	180	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	181	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	182	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	183	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	184	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	185	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	186	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	187	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	188	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	189	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	190	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	191	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	192	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	193	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	194	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	195	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	196	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	197	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	198	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	199	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	200	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	201	A2	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	202	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	203	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	204	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	205	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	206	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	207	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	208	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	209	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	210	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	211	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	212	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	213	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	214	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	215	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	216	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	217	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	218	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	219	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	220	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	221	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	222	D1	石鏃	硬質頁岩(背面ポジ)	1.9	1.2	0.3	0.2	
	223	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	224	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	225	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	226	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	227	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	228	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	229	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	230	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	231	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	232	D1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	233	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	234	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	235	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	236	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	237	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	238	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	239	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	240	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	241	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	242	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	243	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	244	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	245	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	246	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	247	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	248	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	249	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	250	B1	石鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	251	C4	不明	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	252	D1	石鏃未製品	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	253	D1	不明	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	254	D1	不明	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	255	D1	不明	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	256	D1	不明	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	257	D1	不明	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	258	D1	不明	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	
	259	D1	不明	硬質頁岩	1.9	1.2	0.3	0.4	

岩鼻岩陰遺跡出土石器観察表③

検図番号	遺物番号	調査区名	器種	石材	法量（目測含む数値） 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
33	260	B4	石鏃	堀内産黒曜石	1.7	1.1	0.35	0.3	
	261	B4	石鏃	ロキンフェルス	1.65	1.0	0.2	0.3	
	262	B4	石鏃	若狭	1.4	1.0	0.2	0.2	
	263	B4	石鏃	堀内産黒曜石	1.7	0.9	0.2	0.2	
	264	B4	石鏃	堀内産黒曜石	1.2	0.9	0.35	0.1	
	265	B4	石鏃	堀内産黒曜石	1.1	1.0	0.2	0.2	
	266	B4	石鏃	堀内産黒曜石	1.8	1.5	0.35	0.8	
	267	B4	石鏃	堀内産黒曜石	1.5	1.1	0.3	0.5	
	268	B4	石鏃	堀内産黒曜石	1.95	1.3	0.3	0.7	
	269	B4	石鏃	堀内産黒曜石	1.3	1.2	0.25	0.2	
34	270	B4	剥片石器	堀内産黒曜石	3.8	1.4	0.85	1.7	
	271	B4	石鏃未成品	堀内産黒曜石	2.0	1.5	0.35	1.2	
	272	B4	スクレイパー	堀内産黒曜石	1.2	1.7	0.4	1.1	
	273	B4	スクレイパー	堀内産黒曜石	0.9	1.8	0.3	0.7	
	274	B4	スクレイパー	堀内産黒曜石	1.0	1.2	0.3	0.4	
	275	B4	石錐？	堀内産黒曜石	1.1	1.3	0.55	0.4	
	276	B4	石錐？	堀内産黒曜石	1.5	1.2	0.3	0.5	
	277	B4	敲石	角岩(安山岩)	10.6	7.8	6.0	600	
	278	C4	磨石	安山岩	9.2	14.4	5.2	1029	
35	279	C4	磨石	角岩(安山岩)	9.2	10.1	4.4	600	1/2ほどしか残存しないため完成品かどうか断定しかねる
	280	C4	磨石	角岩(安山岩)	3.9	3.4	3.6	60.7	
36	281	C4	敲製石斧	千曲安山岩(石)	9.4	5.2	2.5	237.1	
	335	C5	石鏃	堀内産黒曜石	2.0	1.4	0.4	0.5	
	336	C5	石鏃	堀内産黒曜石	2.3	1.3	0.4	1.0	
	337	D5	石鏃	チャート	2.65	1.7	0.55	1.9	
	338	B5	石鏃	堀内産黒曜石	1.1	1.0	0.2	0.1	
	339	B5	石鏃	堀内産黒曜石	1.7	1.2	0.35	0.3	
	340	B5	石鏃	チャート	1.7	1.3	0.4	0.6	
	341	B5	石鏃	チャルカ	1.8	1.4	0.2	0.4	
	342	B5	石鏃	堀内産黒曜石	2.4	1.5	0.3	0.6	
	343	B5	石鏃	堀内産黒曜石	2.3	1.4	0.43	0.8	
	344	B5	石鏃	堀内産黒曜石	1.5	1.1	0.35	0.3	
	345	B5	石鏃	堀内産黒曜石	1.2	1.3	0.2	0.2	
	346	B5	石鏃	堀内産黒曜石	1.4	1.3	0.35	0.2	
	347	B5	石鏃	堀内産黒曜石	1.4	1.5	0.2	0.3	
	348	B5	石鏃	堀内産黒曜石	1.7	1.2	0.15	0.3	
39	349	A5	石鏃	堀内産黒曜石	1.8	1.4	0.3	0.5	
	350	B5	石鏃	堀内産黒曜石	2.4	1.5	0.3	0.7	
	351	B5	石鏃	堀内産黒曜石	1.9	1.3	0.3	0.5	
	352	B5	石鏃	チャート(安山岩)	1.6	1.3	0.4	0.4	
	353	B5	石鏃	堀内産黒曜石	1.4	1.4	0.25	0.4	
	354	B5	石鏃	チャルカ	1.9	1.2	0.25	0.4	
	355	B5	石鏃	堀内産黒曜石	1.5	1.2	0.2	0.3	
	356	B5	石鏃	堀内産黒曜石	1.0	1.3	0.2	0.2	
	357	B5	石鏃	チャルカ	1.4	1.0	0.25	0.4	
	358	B5	石鏃	堀内産黒曜石	1.25	1.3	0.3	0.3	
	359	A5	石鏃	堀内産黒曜石	1.9	1.1	0.25	0.5	
	360	B5	石鏃	堀内産黒曜石	2.2	1.3	0.25	0.6	
	361	B5	石鏃	堀内産黒曜石	2.2	1.3	0.3	0.7	
	362	B5	石鏃	堀内産黒曜石	1.7	1.2	0.35	0.1	
	363	B5	石鏃	チャルカ	1.4	1.5	0.35	0.6	
	364	B5	石鏃	堀内産黒曜石	2.7	1.5	0.4	1.2	
	365	B5	石鏃	堀内産黒曜石	1.6	1.0	0.25	0.3	
	366	B5	石鏃	堀内産黒曜石	1.3	1.1	0.25	0.4	
	367	B5	石鏃	堀内産黒曜石	1.7	1.5	0.45	0.9	
	368	B5	石鏃	堀内産黒曜石	1.8	1.4	0.3	0.8	
	369	B5	石鏃	堀内産黒曜石	1.6	1.2	0.35	0.5	
41	370	B5	石鏃	チャルカ	1.1	1.0	0.2	0.1	
	371	B5	石鏃	堀内産黒曜石	2.0	1.9	0.5	1.6	
	372	C5	石鏃	堀内産黒曜石	2.2	1.3	0.4	0.8	
	373	D5	石鏃	堀内産黒曜石	1.1	1.2	0.25	0.2	
	374	D5	石鏃	堀内産黒曜石	1.1	1.2	0.3	0.4	
	375	B5	石鏃	堀内産黒曜石	0.9	0.8	0.45	0.2	
	376	B5	石鏃	チャート(安山岩)	1.8	1.2	0.3	0.1	
	377	B5	石鏃	堀内産黒曜石	1.7	1.1	0.3	0.4	
	378	B5	石鏃未成品	堀内産黒曜石	2.2	1.7	0.3	1.1	
	379	B5	スクレイパー	安山岩	3.3	1.2	0.35	1.6	
	380	B5	スクレイパー	安山岩	2.3	1.5	0.7	2.2	
	381	C5	石鏃	チャルカ	2.3	1.3	0.65	1.6	
	382	B5	石鏃	チャルカ	1.7	1.3	0.2	0.3	
	383	B5	石鏃	チャート	1.8	1.3	0.3	0.5	
	384	B5	石鏃	堀内産黒曜石	1.8	1.1	0.35	0.5	
	385	B5	石鏃	堀内産黒曜石	1.2	1.6	0.3	0.6	
	386	B5	石鏃	堀内産黒曜石	2.0	1.8	0.3	0.7	
	387	B5	石鏃	堀内産黒曜石	1.2	0.9	0.2	0.2	
	388	B5	スクレイパー	堀内産黒曜石	3.0	0.9	0.45	0.7	
42	389	C5	台石		11.9	15.9	5.7	910	
	390	C5	台石		19.5	12.4	6.3	2500	
44	451	B6	石鏃	堀内産黒曜石	1.5	1.3	0.3	0.3	
	455	C6	石鏃	堀内産黒曜石	1.8	1.2	0.3	0.4	
	456	B6	石鏃	堀内産黒曜石	2.0	1.4	0.6	1.0	
	457	B6	石鏃	チャルカ	1.6	1.4	0.2	0.3	
	458	B6	石鏃	堀内産黒曜石	1.1	1.3	0.3	0.2	
	459	B6	石鏃	堀内産黒曜石	1.3	1.2	0.2	0.2	
	460	B6	石鏃	堀内産黒曜石	2.4	1.9	0.35	1.1	
	461	B6	石鏃	浅間山	2.0	1.9	0.4	0.8	
	462	B6	石鏃	チャルカ	1.5	1.3	0.4	0.4	
	463	B6	石鏃	堀内産黒曜石	2.1	1.4	0.4	0.6	
	464	A6	石鏃	堀内産黒曜石	2.1	1.4	0.35	0.6	
	465	B6	石鏃	堀内産黒曜石	1.1	1.3	0.25	0.1	
	466	B6	石鏃	堀内産黒曜石	1.4	1.6	0.4	0.6	

岩鼻岩陰遺跡出土石器観察表④

検図番号	遺物番号	調査区名	器種	石材	法量（目測含む数値） 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
46	467	B6	石鏃	堀内産黒曜石	2.0	1.4	0.2	0.5	
	468	B6	石鏃	堀内産黒曜石	2.1	2.1	0.35	1.0	
	469	A6	石鏃	金山産平文石(?)	1.3	1.7	0.6	2.7	
	470	B6	石鏃	チャルカ	1.1	1.5	0.3	0.3	
	471	B6	石鏃	堀内産黒曜石	1.2	1.4	0.3	0.4	
	472	B6	石鏃	チャルカ	1.9	1.7	0.35	1.0	
	473	B6	石鏃	堀内産黒曜石	2.5	2.0	0.6	2.8	
	474	B6	石鏃	堀内産黒曜石	1.9	1.2	0.4	0.6	
	475	B6	石鏃未成品	頁岩(角岩(安山岩))	1.5	1.1	0.5	0.8	
	476	B6	石鏃	堀内産黒曜石	2.1	0.9	0.5	0.6	
	477	B6	石鏃	堀内産黒曜石	1.8	1.1	0.35	0.3	
	478	B6	石鏃	頁岩(?)	1.9	1.3	0.5	0.5	
	479	B6	石鏃	堀内産黒曜石	1.7	1.4	0.6	0.7	
	480	B6	石鏃	角岩(?)(安山岩)	1.1	1.1	0.2	0.2	
	481	B6	スクレイパー	堀内産黒曜石	2.1	1.7	0.4	1.5	
	482	A6	敲石	安山岩(黒色石英)	10.1	8.2	3.5	400.1	
47	483	D6	石鏃	堀内産黒曜石	1.8	1.4	0.35	0.6	
	484	C6	石鏃	チャルカ	2.1	1.0	0.4	0.5	
	485	C6	石鏃	堀内産黒曜石	2.4	1.2	0.5	1.1	
	486	B6	スクレイパー	チャルカ	3.4	2.9	0.8	18.6	
48	487	A6	スクレイパー	ガラス質安山岩	3.1	3.1	1.1	15.2	
	488	A6	磨石	安山岩	8.2	4.2	4.0	140	
53	357	ドレンチ	石鏃	堀内産黒曜石	1.5	1.3	0.2	0.2	
	358	ドレンチ	石鏃	堀内産黒曜石	1.9	1.3	0.3	0.5	
	559	ドレンチ	石鏃	堀内産黒曜石	1.7	1.2	0.4	0.6	
	560	ドレンチ	石鏃	堀内産黒曜石	2.2	1.1	0.3	0.2	
	561	ドレンチ	石鏃	堀内産黒曜石	1.6	1.2	0.2	0.2	
	562	ドレンチ	石鏃	堀内産黒曜石	1.7	1.2	0.25	0.5	
	563	ドレンチ	石鏃	堀内産黒曜石	1.8	1.2	0.3	0.6	
	564	ドレンチ	石鏃	堀内産黒曜石	1.8	1.6	0.4	0.7	
	565	ドレンチ	石鏃	堀内産黒曜石	1.8	1.4	0.2	0.5	
	566	ドレンチ	石鏃	堀内産黒曜石	1.6	1.9	0.45	1.2	
	567	ドレンチ	石鏃	堀内産黒曜石	1.9	1.3	0.3	0.4	
	568	ドレンチ	石鏃	堀内産黒曜石	2.1	1.6	0.5	1.0	
	569	ドレンチ	石鏃	チャルカ	1.65	1.8	0.3	0.3	
	570	ドレンチ	石鏃	堀内産黒曜石	1.9	1.35	0.4	0.7	
	571	ドレンチ	石鏃	堀内産黒曜石	1.8	1.9	0.4	0.5	
	572	ドレンチ	石鏃	堀内産黒曜石	2.5	1.1	0.25	0.8	
	573	ドレンチ	石鏃	堀内産黒曜石	2.7	2.1	0.5	2.2	
	574	ドレンチ	石鏃	堀内産黒曜石	1.8	1.5	0.3	0.6	
	575	ドレンチ	剥片石器	堀内産黒曜石	2.9	2.4	0.7	4.3	
	576	ドレンチ	石鏃未成品	堀内産黒曜石	2.1	1.5	0.4	1.1	
	577	ドレンチ	スクレイパー	頁岩(?)	4.8	5.3	1.1	33.2	
54	578	ドレンチ	磨石	角岩(?)(安山岩)	8.9	5.9	3.4	295.7	
	579	ドレンチ	磨石	角岩(安山岩)	9.5	5.9	3.2	188.7	
56	609	C7	石鏃	堀内産黒曜石	2.9	1.3	0.4	0.9	
	610	E7	石鏃	堀内産黒曜石	1.7	1.65	0.3	0.5	
	611	C7	石鏃	チャルカ	1.8	1.4	0.3	0.3	
	612	E7	石鏃	堀内産黒曜石	3.4	1.70	0.5	1.9	
	613	D7	石鏃	堀内産黒曜石	1.7	1.8	0.4	0.7	
	614	B7	石鏃	頁岩(?)	1.5	1.2	0.2	0.1	
	615	B7	石鏃	堀内産黒曜石	1.5	0.95	0.25	0.2	
	616	B7	石鏃	堀内産黒曜石	2.0	1.1	0.35	0.4	
	617	D7	石鏃	堀内産黒曜石	3.0	1.95	1.3	5.1	
	618	A7	石鏃	堀内産黒曜石	2.8	1.8	0.35	1.1	
	619	E7	石鏃	堀内産黒曜石	1.2	1.3	0.2	0.2	
	620	D7	石鏃	チャルカ	2.2	1.25	0.35	0.8	
58	621	A7	石鏃	堀内産黒曜石	2.5	2.0	0.3	1.0	
	622	B7	石鏃	堀内産黒曜石	1.7	1.5	0.3	0.4	
	623	B7	石鏃	堀内産黒曜石	1.5	1.4	0.3	0.4	
	624	B7	石鏃	堀内産黒曜石	1.3	1.5	0.4	0.4	
	625	B7	石鏃	堀内産黒曜石	1.3	1.4	0.25	0.3	
	626	B7	石鏃	堀内産黒曜石	1.7	1.6	0.2	0.3	
	627	B7	石鏃	チャルカ	2.0	1.35	0.4	1.1	
	628	B7	石鏃	堀内産黒曜石	2.1	1.4	0.5	0.8	
	629	B7	石鏃	チャルカ	1.5	1.4	0.35	0.7	
	630	A7	石鏃	堀内産黒曜石	1.8	1.3	0.3	0.5	
	631	B7	石鏃	堀内産黒曜石	1.5	1.3	0.2	0.2	
	632	B7	石鏃	チャルカ	1.35	1.4	0.45	0.7	
	633	B7	石鏃	堀内産黒曜石	1.3	1.4	0.3	0.4	
	634	B7	石鏃	堀内産黒曜石	1.7	1.4	0.3	0.7	
	635	B7	石鏃	チャルカ	1.6	1.4	0.3	0.6	
	636	B7	石鏃	堀内産黒曜石	1.7	1.6	0.5	0.9	
	637	B7	石鏃	堀内産黒曜石	1.65	1.35	0.6	1.0	
	638	A7	石鏃	堀内産黒曜石	2.0	1.2	0.35	0.8	
	639	B7	石鏃	堀内産黒曜石	1.8	1.8	0.6	1.4	
	640	B7	石鏃	チャルカ	1.4	1.6	0.5	1.8	
	641	B7	石鏃	堀内産黒曜石	1.85	1.15	0.2	0.3	
	642	B7	石鏃	堀内産黒曜石	2.2	1.0	0.35	0.6	
	643	B7	石鏃	堀内産黒曜石	1.8	1.7	0.4	1.1	
	644	A7	石鏃	堀内産黒曜石	2.0	1.5	0.45	1.0	
59	645	B7	石鏃	堀内産黒曜石	1.75	1.5	0.4	0.8	
	646	B7	石鏃	堀内産黒曜石	1.4	1.2	0.4	0.4	
	647	A7	スクレイパー	頁岩(?)	3.1	2.3	0.5	6.3	
	648	D7	磨石	角岩(?)(安山岩)	6.3	8.4	2.7	179.3	
	649	C7	石鏃	堀内産黒曜石	1.3	1.1	0.2	0.3	
	650	C7	石鏃	堀内産黒曜石	2.3	1.2	0.3	0.7	
	651	B7	石鏃	堀内産黒曜石	2.6	1.4	0.4	0.8	
	652	B7	石鏃	堀内産黒曜石	2.0	1.7	0.4	1.1	
	653	C7	石鏃	堀内産黒曜石	1.8	1.5	0.3	0.8	
	654	B7	石鏃	堀内産黒曜石	1.85	1.2	0.35	0.5	
	655	C7	石鏃	堀内産黒曜石	1.6	0.7	0.3	0.2	

岩鼻岩陰遺跡出土石器観察表⑤

掲載番号	遺物番号	調査区名	器種	石材	法量（括弧内は推定） 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
59	656	157	台石	角閃石安山岩	47.3	37.3	16.5	23000	
60	657	157	敲石石皿	粘板岩	6.6	2.7	1.2	39.6	
61	771	D8	石鏃	鬼石産頁岩	1.65	1.6	0.3	0.6	
	772	D8	石鏃	鬼石産頁岩	2.3	1.6	0.4	1.1	
	773	D8	石鏃	鬼石産頁岩	1.7	1.9	0.3	0.6	
	774	D8	石鏃	鬼石産頁岩	2.35	2.0	0.5	1.5	
	775	D8	石鏃	鬼石産頁岩	1.85	1.65	0.35	0.6	
62	776	D8	石鏃	鬼石産頁岩	2.4	1.5	0.3	1.2	
	777	D8	石鏃	鬼石産頁岩	2.6	1.8	0.4	2.0	
	778	C8	石鏃	鬼石産頁岩	1.7	1.6	0.4	1.2	
	779	C8	石鏃	鬼石産頁岩	1.9	1.3	0.3	0.7	
	780	C8	石鏃	サスカイト	1.6	1.3	0.2	0.6	
	781	D8	石鏃	鬼石産頁岩	2.85	1.2	0.3	0.9	
	782	D8	石鏃	鬼石産頁岩	2.8	1.2	0.4	0.8	
	783	D8	石鏃	鬼石産頁岩	2.6	1.8	0.4	1.1	
	784	D8	石鏃	鬼石産頁岩	1.9	1.1	0.3	0.4	先端が丸み帯び使痕有り
	785	D8	石鏃	鬼石産頁岩	1.3	1.0	0.3	0.2	
	786	D8	石鏃	鬼石産頁岩	2.0	1.0	0.3	0.4	
	787	D8	石鏃	鬼石産頁岩	2.0	1.3	0.3	0.6	
	788	C8	石鏃	鬼石産頁岩	1.7	0.7	0.3	0.2	
	789	D8	石鏃	サスカイト	1.9	1.7	0.4	0.7	
	790	D8	石鏃	鬼石産頁岩	2.2	1.0	0.3	0.5	
	791	D8	石鏃	鬼石産頁岩	2.2	1.9	0.3	0.9	
	792	C8	石鏃	サスカイト	1.3	1.3	0.2	0.3	
	793	D8	石鏃	サスカイト	1.1	1.5	0.2	0.3	
	794	C8	石鏃	サスカイト	1.7	1.3	0.3	0.4	
	795	D8	石鏃	鬼石産頁岩	1.6	0.7	0.2	0.2	
	796	D8	石鏃	サスカイト	1.4	1.3	0.3	0.4	
	797	D8	石鏃	鬼石産頁岩	1.4	1.2	0.2	0.3	
	798	D8	石鏃	鬼石産頁岩	1.6	1.4	0.3	0.4	
	799	D8	石鏃	鬼石産頁岩	1.2	1.1	0.2	0.2	
	800	D8	石鏃	鬼石産頁岩	1.6	1.3	0.5	0.9	
	801	D8	石鏃	鬼石産頁岩	1.2	1.2	0.3	0.2	
	802	D8	石鏃	鬼石産頁岩	1.9	1.4	0.4	0.79	
	803	C8	石鏃	鬼石産頁岩	2.0	1.4	0.3	0.6	
	804	C8	石鏃	鬼石産頁岩	1.5	1.6	0.3	0.5	
	805	C8	石鏃	鬼石産頁岩	1.9	1.4	0.3	0.5	
	806	C8	石鏃	鬼石産頁岩	2.3	1.8	0.5	1.1	
	807	D8	石鏃	鬼石産頁岩	1.7	1.3	0.4	0.5	
	808	D8	石鏃	鬼石産頁岩	1.5	1.2	0.3	0.4	
	809	D8	石鏃	鬼石産頁岩	1.3	1.1	0.3	0.3	
	810	E8	石鏃	鬼石産頁岩	1.7	1.2	0.4	0.4	
	811	E8	石鏃	鬼石産頁岩	1.6	1.7	0.3	0.6	
	812	E8	石鏃	鬼石産頁岩	1.6	1.3	0.4	0.6	
	813	C8	石鏃	鬼石産頁岩	1.9	1.1	0.3	0.5	
	814	C8	石鏃	鬼石産頁岩	1.6	1.5	0.4	0.7	
	815	D8	石鏃	鬼石産頁岩	1.9	1.3	0.3	0.4	
	816	C8	石鏃	鬼石産頁岩	2.2	1.9	0.4	1.0	
	817	D8	石鏃	サスカイト	2.4	1.6	0.3	1.1	
	818	D8	石鏃	鬼石産頁岩	2.4	1.9	0.4	1.5	
	819	D8	石鏃	サスカイト	2.0	1.5	0.3	0.8	
	820	D8	石鏃	鬼石産頁岩	1.4	1.5	0.3	0.7	
	821	D8	石鏃	サスカイト	2.2	1.8	0.4	2.0	
	822	D8	石鏃未成品	鬼石産頁岩	2.2	1.0	0.5	0.9	
	823	C8	石鏃	鬼石産頁岩	2.6	1.0	0.4	0.7	
	824	D8	石鏃	鬼石産頁岩	1.8	1.0	0.3	0.4	
	825	C8	石鏃	鬼石産頁岩	2.5	1.5	0.3	0.7	
	826	C8	石鏃	鬼石産頁岩	1.8	0.9	0.3	0.5	
	827	D8	石鏃	鬼石産頁岩	1.9	1.0	0.5	1.1	
	828	D8	石鏃	鬼石産頁岩	1.5	1.0	0.3	0.3	
	829	D8	石鏃	鬼石産頁岩	1.6	1.0	0.3	0.3	
	830	D8	石鏃	鬼石産頁岩	1.5	1.2	0.3	0.3	曲がり使用あり
	831	D8	石鏃	サスカイト	2.4	1.4	0.4	0.9	
	832	D8	石鏃	鬼石産頁岩	1.8	1.2	0.3	0.5	
	833	D8	石鏃	サスカイト	1.8	1.2	0.2	0.4	
	834	B13	剥片・敲石		8.3	7.6	5.4	392.7	
	835	D8	台石		37.2	27.3	7.5	8000	
	836	D8	敲石	角閃石安山岩	6.0	6.0	3.8	195.7	
	837	C8	敲石	安山岩(砂質凝灰岩)	7.1	5.8	4.8	204.7	
	838	D8	石錐	鬼石産頁岩	1.4	1.3	0.3	0.3	
	839	C8	石錐	鬼石産頁岩	1.7	1.4	0.4	0.8	
	840	D8	石錐	鬼石産頁岩	2.1	1.5	0.4	0.6	
	841	C8	石錐	鬼石産頁岩	2.0	1.4	0.3	0.7	
	842	D8	石錐	サスカイト	1.3	1.0	0.3	0.2	
	843	C8	石錐	鬼石産頁岩	1.5	1.2	0.2	0.3	
	844	C8	石錐	鬼石産頁岩	1.5	1.1	0.4	0.4	
	845	C8	石錐	鬼石産頁岩	2.3	1.7	0.5	1.0	
	846	D8	スクレイパー	鬼石産頁岩	1.9	0.9	0.3	0.4	
	847	D8	敲石		17.2	5.4	4.4	1100	
	848	C9	石錐未成品	泥岩	3.3	2.1	0.9	6.0	
	849	C9	石錐	鬼石産頁岩	3.6	1.5	0.6	1.7	
	850	C9	石錐	鬼石産頁岩	1.8	1.6	0.3	0.4	
	851	C9	石錐	鬼石産頁岩	1.9	1.5	0.1	0.6	
	852	C9	石錐	鬼石産頁岩	2.3	1.5	0.4	0.8	
	853	C9	石錐	サスカイト	1.8	1.2	0.3	0.3	
	854	C9	石錐	鬼石産頁岩	2.1	1.4	0.4	0.9	
	855	C9	石錐	鬼石産頁岩	1.8	1.3	0.3	0.4	
	856	C9	石錐	鬼石産頁岩	2.1	1.3	0.3	0.7	
	857	C9	石錐	鬼石産頁岩	1.4	1.3	0.3	0.3	
	858	C9	石錐	鬼石産頁岩	1.7	1.4	0.4	0.8	
	859	C9	石錐	鬼石産頁岩	2.1	1.5	0.4	0.6	
	860	C9	石錐	鬼石産頁岩	2.1	1.5	0.4	0.6	
	861	C9	石錐	鬼石産頁岩	1.7	0.9	0.3	0.4	
	862	C9	石錐	鬼石産頁岩	1.6	0.9	0.3	0.4	
	863	C9	石錐未成品	鬼石産頁岩	2.1	1.5	0.3	1.3	
	864	C9	台石	角閃安山岩	36.2	25.3	7.0	6800	
	865	C10	石鏃	サスカイト	2.3	1.9	0.4	1.0	
	866	C10	石鏃	鬼石産頁岩	1.8	1.3	0.4	0.7	
	867	C10	石鏃	鬼石産頁岩	1.7	1.0	0.3	0.7	
	868	C10	石鏃	サスカイト	2.0	1.2	0.3	0.8	
	869	D10	石鏃	鬼石産頁岩	2.0	1.4	0.35	0.7	
	870	D10	石鏃	鬼石産頁岩	1.7	1.0	0.3	0.7	
	871	C10	石鏃	サスカイト	1.4	1.5	0.35	0.5	
	872	C10	石鏃	鬼石産頁岩	2.3	1.2	0.4	0.7	
	873	C10	石鏃	鬼石産頁岩	1.5	1.0	0.2	0.3	
	874	C10	石鏃	サスカイト	1.3	1.2	0.4	0.7	
	875	C10	石鏃	鬼石産頁岩	2.6	1.8	0.3	1.0	
	876	C10	石鏃	鬼石産頁岩	1.5	1.6	0.3	0.5	
	877	C10	石鏃	鬼石産頁岩	1.5	1.0	0.3	0.3	
	878	C10	石鏃	鬼石産頁岩	2.1	1.8	0.3	0.7	
	879	D10	石鏃	鬼石産頁岩	2.1	1.75	0.3	0.7	
	880	C10	石鏃	鬼石産頁岩	2.3	1.5	0.3	0.7	
	881	C10	石鏃	サスカイト	2.7	2.7	0.5	2.9	
	882	C10	石鏃	鬼石産頁岩	1.7	1.4	0.3	0.4	
	883	C10	石鏃	サスカイト	1.8	1.9	0.4	1.2	
	884	C10	石鏃	鬼石産頁岩	2.2	1.5	0.4	0.9	
	885	C10	石鏃	鬼石産頁岩	2.0	1.1	0.4	1.4	
	886	D10	石鏃	鬼石産頁岩	2.0	1.8	0.45	1.2	
	887	C10	石鏃	鬼石産頁岩	1.1	0.9	0.3	0.2	
	888	C10	石鏃	鬼石産頁岩	1.3	1.2	0.3	0.3	
	889	C10	石鏃	鬼石産頁岩	1.2	1.1	0.3	0.4	
	890	C10	石鏃	チャート?	2.7	1.8	0.5	1.8	
	891	D10	石鏃	鬼石産頁岩	1.85	1.09	0.25	0.3	
	892	C10	石鏃	鬼石産頁岩	2.0	1.3	0.5	1.0	
	893	D10	石鏃	鬼石産頁岩	1.6	1.6	0.4	0.7	
	894	C10	スクレイパー	鬼石産頁岩	4.1	2.1	1.2	13.9	
	895	C10	スクレイパー	サスカイト	4.4	5.2	0.6	17.7	
	896	C10	スクレイパー	サスカイト	3.0	5.0	0.75	13.5	
	897	C10	スクレイパー	鬼石産頁岩	4.8	8.0	0.75	26.5	
	898	C10	台石	角閃安山岩	34.5	46.3	7.5	37000	
	1154	D11	石鏃	鬼石産頁岩	1.9	1.5	0.45	0.8	
	1155	C11	石鏃未成品	鬼石産頁岩	4.1	2.1	1.6	9.9	
	1156	D11	石鏃未成品	鬼石産頁岩	2.3	1.35	0.35	1.4	
	1157	D11	剥片	鬼石産頁岩	3.4	2.3	1.3	8.4	小石器
	1158	D10	石鏃	鬼石産頁岩	2.6	1.3	0.3	0.7	
	1159	C11	石鏃	鬼石産頁岩	3.0	1.5	0.3	0.9	
	1160	C11	石鏃	鬼石産頁岩	1.4	1.3	0.2	0.4	
	1161	C11	石鏃	鬼石産頁岩	2.8	1.4	0.4	0.7	
	1162	C11	石鏃	鬼石産頁岩	1.6	1.2	0.4	0.3	
	1163	C11	石鏃	鬼石産頁岩	2.7	1.7	0.4	1.2	
	1164	D11	石鏃	鬼石産頁岩	2.7	1.2	0.3	0.7	
	1165	C11	石鏃	鬼石産頁岩	2.8	1.3	0.4	1.2	
	1166	B11	石鏃	鬼石産頁岩	2.85	1.2	0.4	0.9	
	1167	C11	石鏃	鬼石産頁岩	1.7	1.2	0.3	0.3	
	1168	C11	石鏃	鬼石産頁岩	2.5	1.8	0.3	1.4	
	1169	B11	石鏃	鬼石産頁岩	2.8	2.5	0.6	2.9	
	1170	B11	石鏃	鬼石産頁岩	2.6	1.5	0.4	1.1	
	1171	D11	石鏃	鬼石産頁岩	1.5	1.5	0.2	0.7	
	1172	C11	石鏃	鬼石産頁岩	1.1	1.3	0.3	0.5	
	1173	C11	石鏃	鬼石産頁岩	2.3	4.1	0.9	8.6	
	1174	C11	敲石		11.5	13.8	5.8	960	
	1175	C11	敲石		12.0	9.1	6.8	970	
	1176	C11	石鏃	鬼石産頁岩	1.4	1.6	0.3	0.8	
	1177	C11	石鏃	鬼石産頁岩	1.2	1.4	0.3	0.3	
	1178	C11	石鏃未成品	鬼石産頁岩	3.1	1.8	0.5	2.1	
	1179	C11	石鏃	鬼石産頁岩	2.6	1.7	0.4	1.4	
	1180	C11	石鏃	鬼石産頁岩	1.3	1.7	0.3	0.6	
	1181	C11	石鏃	鬼石産頁岩	1.7	0.9	0.2	0.2	
	1182	C11	スクレイパー	サスカイト	5.4	8.5	0.9	82.6	
	1183	C11	敲石	角閃安山岩	8.6	4.8	5.5	320.3	
	1184	C11	台石	角閃安山岩	42.7	23.4	10.6	19000	
	1185	C11	台石		23.8	23.6	7.7	5300	
	1186	D11	石鏃	鬼石産頁岩	2.3	1.4	0.4	0.6	
	1187	D11	石鏃	鬼石産頁岩	1.25	1.45	0.4	0.6	

岩鼻岩陰遺跡出土石器観察表⑥

掲載番号	遺物番号	調査区名	器種	石材	法量（括弧内は推定） 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
75	950	C9	石鏃	鬼石産頁岩	1.6	1.2	0.3	0.4	
	951	C9	石鏃	鬼石産頁岩	1.9	1.3	0.3	0.6	
	952	D9	石鏃	鬼石産頁岩	1.4	1.1	0.3	0.6	
	953	C9	石鏃	鬼石産頁岩	1.6	1.7	0.5	1.0	
	954	C9	石鏃	黒曜石（伊豆大島産）	2.0	0.9	0.4	0.7	
	955	C9	石鏃	頁岩?	0.7	0.8	0.3	0.1	
	956	C9	石鏃	サスカイト	2.4	1.5	0.5	1.1	
	957	C9	石鏃	鬼石産頁岩	2.1	1.3	0.4	0.9	
	958	C9	石鏃	鬼石産頁岩	1.9	1.1	0.3	0.3	
	959	C9	石鏃	鬼石産頁岩	1.9	1.3	0.3	0.6	
	960	C9	石鏃	鬼石産頁岩	1.8	1.2	0.3	0.4	
	961	C9	石鏃	鬼石産頁岩	1.7	0.9	0.3	0.4	
	962	C9	石鏃	鬼石産頁岩	1.6	0.9	0.3	0.4	
	963	C9	石鏃未成品	鬼石産頁岩	2.1	1.5	0.3	1.3	
	964	C9	台石	角閃安山岩	36.2	25.3	7.0	6800	
81	1056	C10	石鏃	サスカイト	3.3	1.9	0.4	1.8	
	1057	C10	石鏃	鬼石産頁岩	1.8	1.3	0.4	0.7	
	1058	C10	石鏃	鬼石産頁岩	1.7	1.0	0.3	0.7	
	1059	C10	石鏃	サスカイト	2.0	1.2	0.3	0.8	
	1060	D10	石鏃	鬼石産頁岩	2.0	1.4	0.35	0.7	
	1061	D10	石鏃	サスカイト	1.4	1.5	0.35	0.5	
	1062	C10	石鏃	鬼石産頁岩	2.3	1.2	0.4	0.7	
	1063	C10	石鏃	サスカイト	2.6	1.9	0.5	1.1	
	1064	B10	石鏃	サスカイト	2.9	1.7	0.35	1.3	
	1065	C10	石鏃	鬼石産頁岩	2.3	1.4	0.3	0.7	
	1066	C10	石鏃	鬼石産頁岩	1.4	1.0	0.2	0.2	
	1067	C10	石鏃	鬼石産頁岩	2.9	2.6	0.4	2.3	
	1068	C10	石鏃	鬼石産頁岩	3.9	2.3	0.5	4.1	
	1069	D10	石鏃	鬼石産頁岩	3.1	1.75	0.3	1.6	
	1070	D10	石鏃	鬼石産頁岩	2.1	1.1	0.3	0.3	
	1071	C10	石鏃	鬼石産頁岩	1.9	1.4	0.3	0.5	
	1072	C10	石鏃	鬼石産頁岩	1.6	1.4	0.2	0.2	
	1073	C10	石鏃	サスカイト	1.5	1.6	0.2	0.1	
	1074	C10	石鏃	鬼石産頁岩	1.5	1.4	0.3	0.4	
	1075	C10	石鏃	鬼石産頁岩	2.6	1.8	0.3	1.0	
	1076	C10	石鏃	鬼石産頁岩	1.5	1.6	0.3	0.5	
	1077	C10	石鏃	鬼石産頁岩	1.5	1.0	0.3	0.2	
	1078	C10	石鏃	鬼石産頁岩	2.1	1.8	0.3	0.7	
	1079	D10	石鏃	鬼石産頁岩	2.1	1.75	0.3	0.7	
	1080	C10	石鏃	鬼石産頁岩	2.3	1.5	0.3	0.7	
	1081	C10	石鏃	サスカイト	2.7	2.7	0.5	2.9	
	1082	C10	石鏃	鬼石産頁岩	1.7	1.4	0.3	0.4	
	1083	C10	石鏃	サスカイト	1.8	1.9	0.4	1.2	
	1084	C10	石鏃	鬼石産頁岩	2.2	1.5	0.4	0.9	
	1085	C10	石鏃	鬼石産頁岩	2.0	1.1	0.4	1.4	
	1086	D10	石鏃	鬼石産頁岩	2.0	1.8	0.45	1.2	
	1087	C10	石鏃	鬼石産頁岩	1.1	0.9	0.3	0.2	
	1088	C10	石鏃	鬼石産頁岩	1.3	1.2	0.3	0.3	
	1089	C10	石鏃	鬼石産頁岩	1.2	1.1	0.3	0.4	
	1090	C10	石鏃	チャート?	2.7	1.8	0.5	1.8	
	1091	D10	石鏃	鬼石産頁岩	1.85	1.09	0.25	0.3	
	1092	C10	石鏃	鬼石産頁岩	2.0	1.3	0.5	1.0	
	1093	D10	石鏃	鬼石産頁岩	1.6	1.6	0.4	0.7	
83	1094	C10	スクレイパー	鬼石産頁岩	4.1	2.1	1.2	13.9	
	1095	C10	スクレイパー	サスカイト	4.4	5.2	0.6	17.7	
	1096	C10	スクレイパー	サスカイト	3.0	5.0	0.75	13.5	
	1097	C10	スクレイパー	鬼石産頁岩	4.8	8.0	0.75	26.5	
84	1098	C10	台石	角閃安山岩	34.5	46.3	7.5	37000	
88	1154	D11	石鏃	鬼石産頁岩	1.9	1.5	0.45	0.8	
	1155	C11	石鏃未成品	鬼石産頁岩	4.1	2.1	1.6	9.9	
	1156	D11	石鏃未成品	鬼石産頁岩	2.3	1.35	0.35	1.4	
	1157	D11	剥片	鬼石産頁岩	3.4	2.3	1.3	8.4	小石器
	1158	D10	石鏃	鬼石産頁岩	2.6	1.3	0.3	0.7	
	1159	C11	石鏃	鬼石産頁岩	3.0	1.5	0.3	0.9	
	1160	C11	石鏃	鬼石産頁岩	1.4	1.3	0.2	0.4	
	1161	C11	石鏃	鬼石産頁岩	2.8	1.4	0.4	0.7	
	1162	C11	石鏃	鬼石産頁岩	1.6	1.2	0.4	0.3	
	1163	C11	石鏃	鬼石産頁岩	2.7	1.7	0.4	1.2	
	1164	D11	石鏃	鬼石産頁岩	2.7	1.2	0.3	0.7	
	1165	C11	石鏃	鬼石産頁岩	2.8	1.3	0.4	1.2	
	1166	B11	石鏃	鬼石産頁岩	2.85	1.2	0.4	0.9	
	1167	C11	石鏃	鬼石産頁岩	1.7	1.2	0.3	0.3	
	1168	C11	石鏃	鬼石産頁岩	2.5	1.8	0.3	1.4	
	1169	B11	石鏃	鬼石産頁岩	2.8	2.5	0.6	2.9	
	1170	B11	石鏃	鬼石産頁岩	2.6	1.5	0.4	1.1	
	1171	D11	石鏃	鬼石産頁岩	1.5	1.5	0.2	0.7	
	1172	C11	石鏃	鬼石産頁岩	1.1	1.3	0.3	0.5	
	1173	C11	石鏃	鬼石産頁岩	2.3	4.1	0.9	8.6	
	1174	C11	敲石		11.5	13.8	5.8	960	
	1175	C11	敲石		12.0	9.1	6.8	970	
89	1176	C11	石鏃	鬼石産頁岩	1.4	1.6	0.3	0.8	
	1177	C11	石鏃	鬼石産頁岩	1.2	1.4	0.3	0.3	
	1178	C11	石鏃未成品	鬼石産頁岩	3.1	1.8	0.5	2.1	
	1179	C11	石鏃	鬼石産頁岩	2.6	1.7	0.4	1.4	
	1180	C11	石鏃	鬼石産頁岩	1.3	1.7	0.3	0.6	
	1181	C11	石鏃	鬼石産頁岩	1.7	0.9	0.2	0.2	
	1182	C11	スクレイパー	サスカイト	5.4	8.5	0.9	82.6	
90	1183	C11	敲石	角閃安山岩	8.6	4.8	5.5	320.3	
	1184	C11	台石	角閃安山岩	42.7	23.4	10.6	19000	
	1185	C11	台石		23.8	23.6	7.7	5300	
	1186	D11	石鏃	鬼石産頁岩	2.3	1.4	0.4	0.6	
	1187	D11	石鏃	鬼石産頁岩	1.25	1.45	0.4	0.6	

岩鼻岩陰遺跡出土石器観察表⑦

検図番号	遺物番号	調査区名	器種	石材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
90	1217	C12	石鏃	鍋山産黒曜石		2.1	1.4	0.3	0.6	
	1218	C12	石鏃	鍋山産黒曜石		3.0	1.2	0.2	0.8	
	1219	C10	石鏃	鍋山産黒曜石		1.7	0.4	0.4	1.2	
	1220	C12	石鏃	鍋山産黒曜石		3.0	1.3	0.4	1.2	
	1221	D12	有茎尖頭器	鍋山産黒曜石		3.6	1.7	0.5	2.3	
	1222	C12	石鏃	鍋山産黒曜石		2.3	1.9	0.4	1.3	
	1223	C12	石鏃	鍋山産黒曜石		2.1	1.6	0.4	1.3	
	1224	C12	石鏃	鍋山産黒曜石		2.5	1.3	0.5	1.2	
	1225	C12	石鏃	鍋山産黒曜石		2.9	1.3	0.5	2.2	
	1226	C12	石鏃	鍋山産黒曜石		2.1	1.1	0.3	0.7	
	1227	C12	石鏃	鍋山産黒曜石		1.4	1.3	0.2	0.8	
	1228	C12	石鏃	鍋山産黒曜石		1.7	1.5	0.3	0.8	
	1229	C12	石鏃	鍋山産黒曜石		1.7	1.3	0.3	0.8	
	1230	C12	石鏃	鍋山産黒曜石		2.0	1.4	0.3	0.8	
	1231	C12	石鏃	鍋山産黒曜石		1.9	0.8	0.3	0.2	
	1232	D13	石鏃	鍋山産黒曜石		2.7	1.85	0.4	1.2	
	1233	C13	石鏃	鍋山産黒曜石		1.5	1.1	0.3	0.3	
	1234	C13	磨石・敲石			13.7	13.1	10.6	2020	
	1235	C13	磨石・敲石			14.0	12.0	7.4	1800.0	
	1236	C12	磨石・敲石			8.0	5.5	4.0	275.1	
94	1237	C12	磨石・敲石			9.8	6.2	4.0	215.0	
	1238	C12	磨石・敲石			13.0	6.3	3.3	382.9	
	1239	C11	磨石・敲石	輝石安山岩		13.0	11.6	14.0	4700	
	1240	C12	磨石・敲石	角閃石安山岩		8.9	7.5	5.0	480	
	1241	C13	磨石・敲石	角閃石安山岩		8.7	6.6	4.8	520	
95	1242	C12	石皿			14.5	10.9	3.8	1300	
	1243	C12	石皿	流紋凝灰岩(緑色凝灰岩)		31.9	34.7	11.1	23400	
96	1244	C12	スクレイパー	サヌカイト		6.6	2.1	0.7	8.5	
	1245	C12	石錘	角閃安山岩		4.3	3.0	1.1	37.1	
	1318	C5	石鏃	鍋山産黒曜石		2.3	1.72	0.45	2.2	
	1319	C13	石鏃	鍋山産黒曜石		2.5	1.2	0.3	0.7	
	1320	C11	石鏃	鍋山産黒曜石		2.8	1.4	0.5	1.1	
	1321	C12	石鏃	鍋山産黒曜石		1.7	1.0	0.2	0.4	
	1322	C13	石鏃	鍋山産黒曜石		1.8	1.2	0.3	0.6	
	1323	D13	石鏃	鍋山産黒曜石		4.2	1.6	0.4	3.3	
	1324	C13	石鏃	鍋山産黒曜石		2.7	1.4	0.4	1.5	
	1325	C13	石鏃	鍋山産黒曜石		2.9	1.3	0.5	1.9	
	1326	B13	石鏃	サヌカイト		3.8	1.9	0.5	2.3	
	1327	D13	石鏃	鍋山産黒曜石		2.7	1.5	0.5	2.0	
	1328	C13	石鏃	鍋山産黒曜石		1.8	1.6	0.3	1.0	
	1329	C13	石鏃	鍋山産黒曜石		1.8	1.5	0.4	1.1	
	1330	C12	石鏃	鍋山産黒曜石		1.9	1.4	0.4		
101	1331	C13	石鏃	サヌカイト		1.7	1.3	0.5	1.5	
	1332	B13	石鏃	サヌカイト		2.1	0.4	0.4	1.2	
	1333	C13	石鏃	鍋山産黒曜石		1.9	1.3	0.3	0.6	
	1334	C13	石鏃	鍋山産黒曜石		2.6	1.2	0.3	0.8	
	1335	C13	石鏃	サヌカイト		2.4	1.9	0.4	2.5	
	1336	C13	石鏃	鍋山産黒曜石		2.4	1.5	0.4	1.3	
	1337	C13	石鏃	サヌカイト		3.2	1.6	0.5	2.1	
	1338	B13	石鏃	鍋山産黒曜石		2.5	1.7	0.4	1.5	
	1339	B13	石鏃	サヌカイト		2.4	2.1	0.5	2.8	
	1340	B13	石鏃	サヌカイト		3.1	1.6	0.5	2.1	
	1341	B13	石鏃	サヌカイト		2.5	1.9	0.4	2.4	
	1342	C13	石鏃	鍋山産黒曜石		3.7	1.7	0.4	2.2	
	1343	C13	石鏃	鍋山産黒曜石		2.1	1.4	0.3	0.9	
	1344	C13	石鏃	鍋山産黒曜石		2.6	1.3	0.3	0.9	
	1345	C13	石鏃	鍋山産黒曜石		2.1	1.60	0.3	0.9	
	1346	C13	石鏃	鍋山産黒曜石		2.9	1.6	0.5	1.5	
102	1347	C13	石鏃	鍋山産黒曜石		1.9	1.3	0.3	0.9	
	1348	B13	石鏃	サヌカイト		2.2	2.1	0.5	2.8	
	1349	C13	石鏃	鍋山産黒曜石		2.2	1.3	0.4	0.7	
103	1350	C13	石錐?	鍋山産黒曜石		4.0	2.8	0.8	8.6	
	1351	C13	スクレイパー	鍋山産黒曜石		3.0	4.4	1.0	12.9	
104	1352	B13	磨石・敲石	角閃石安山岩		19.1	11.2	3.6	1300.0	
	1353	B13	磨石・敲石	角閃石安山岩		6.5	6.4	3.3	281.5	
	1354	C13	磨石・敲石			8.6	6.1	4.0	299.1	
105	1355	C13	石錐	鍋山産黒曜石		1.6	1.1	0.3	0.5	
	1356	C13	石錐	鍋山産黒曜石		3.2	1.8	0.4	1.0	
	1357	C13	石錐	鍋山産黒曜石		2.3	1.2	0.3	0.5	
	1358	C13	石錐	鍋山産黒曜石		2.6	2.0	0.4	1.2	
	1359	C13	石錐	鍋山産黒曜石		2.1	1.3	0.5	1.0	
	1360	C13	石錐	鍋山産黒曜石		2.9	1.7	0.5	2.4	
	1361	C13	石錐	鍋山産黒曜石		1.7	1.9	0.55	1.6	
	1362	C13	石錐	サヌカイト		1.2	0.9	0.3	0.3	
106	1363	C13	磨石・敲石			8.2	6.3	5.1	340	
	1364	C13	磨石・敲石	角閃石安山岩		10.0	7.9	9.1	610	
	1365	C13	磨石・敲石			9.6	12.6	3.8	710	
	1366	C13	磨石・敲石			8.0	8.5	4.1	352.8	
107	1367	D13	台石			25.5	31.0	13.0	13000	
	1368	D13	石錘	鍋山産黒曜石		2.0	1.45	0.4	0.6	
	1369	D13	石錘	鍋山産黒曜石		1.9	1.2	0.2	0.2	
	1370	C13	磨石			7.8	9.2	6.5	490	
	1371	C13	磨石			7.9	8.1	5.1	400	
108	1372	C13	石匙	サヌカイト		8.9	4.5	0.6	38.6	
	1373	C13	石匙	サヌカイト		2.6	3.9	0.6	2.4	
	1374	C13	スクレイパー	サヌカイト		4.3	5.0	0.5	9	
	1375	C13	スクレイパー	サヌカイト		6.7	3.5	1.4	60.9	
113	1429	B14	石錐	サヌカイト		11.4	5.9	1.9	91.6	
111	1429	B14	石錐	鍋山産黒曜石		1.8	1.8	0.4	0.8	
	1430	C14	石錐	鍋山産黒曜石		1.6	1.8	0.3	0.6	
114	1431	C14	石錐	鍋山産黒曜石		1.9	1.5	0.4	1.1	
	1432	C14	石錐	鍋山産黒曜石		1.20	1.7	0.35	0.7	
	1433	C14	石錐	サヌカイト		2.0	1.9	0.6	2.6	

岩鼻岩陰遺跡出土石器観察表⑧

検図番号	遺物番号	調査区名	器種	石材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
	1434	C14	石錐	サヌカイト		2.6	1.9	0.3	2.3	
	1435	C14	石錐	鍋山産黒曜石		2.7	1.5	0.6	1.1	
	1436	C12	石錐	鍋山産黒曜石		2.2	1.1	0.3	0.7	
	1437	C14	石錐	サヌカイト		3.15	1.6	0.4	1.7	
	1438	C14	石錐	鍋山産黒曜石		3.2	1.8	0.4	1.7	
	1439	C14	石錐	鍋山産黒曜石		2.6	1.25	0.4	1.4	
	1440	B14	石錐	サヌカイト		3.0	1.3	0.5	1.2	
	1441	C14	石錐	鍋山産黒曜石		2.9	1.7	0.4	1.2	
	1442	B14	石錐	鍋山産黒曜石		3.9	1.7	0.6	2.4	
	1443	D15	石錐	サヌカイト		2.2	2.0	0.5	2.6	
	1444	B14	石錐	鍋山産黒曜石		2.3	2.3	0.5	2.7	
	1445	C14	石錐	サヌカイト		2.5	2.6	0.4	3.6	
	1446	C14	石錐	鍋山産黒曜石		1.6	1.9	0.4	1.4	
	1447	C14	石錐	鍋山産黒曜石		1.1	1.3	0.35	0.9	
	1448	C14	石錐	鍋山産黒曜石		1.05	1.2	0.3	0.4	
	1449	B14	石錐	鍋山産黒曜石		2.8	1.9	0.6	2.2	
116	1450	C14	スクレイパー	サヌカイト		4.3	4.9	0.8	34.1	
115	1451	B14	スクレイパー	鍋山産黒曜石		1.2	1.6	0.3	0.6	
	1452	B14	磨石	角閃石安山岩		6.9	5.3	3.3	196.3	
116	1453	C14	台石			15.7	23.3	4.8	2900	
	1454	C14	石錐	鍋山産黒曜石		1.7	1.5	0.3	0.6	
	1455	C14	石錐	鍋山産黒曜石		1.8	1.3	0.3	0.6	
	1456	C14	石錐	鍋山産黒曜石		2.2	1.4	0.4	0.7	
117	1457	C14	石錐	鍋山産黒曜石		3.3	1.3	0.4	1.1	
	1458	B14	石錐	鍋山産黒曜石		2.2	1.3	0.4	1.1	
	1459	C14	石錐	鍋山産黒曜石		2.1	1.2	0.2	0.7	
	1460	C14	石錐	鍋山産黒曜石		2.2	1.4	0.4	1.3	
118	1461	C14	錐石			5.4	2.9	1.9	29	
	1462	C14	有孔	角閃石安山岩		33.8	47.0	14.1	43000	
	1463	C14	石錐	鍋山産黒曜石		2.5	1.7	0.4	1.2	
	1464	C14	石錐	鍋山産黒曜石		2.2	2.0	0.35	0.9	
118	1465	C14	石錐	鍋山産黒曜石		2.5	1.6	0.3	0.7	
	1466	C14	石錐	鍋山産黒曜石		2.3	1.4	0.45	1.2	
	1467	C14	石錐	サヌカイト		2.8	1.4	0.5	1.2	
	1468	B14	石錐	鍋山産黒曜石		2.2	1.2	0.3	0.8	
120	1469	C14	石錐	鍋山産黒曜石		3.2	1.8	0.6	3.4	
	1470	C14	錐石			7.4	12.9	3.9	420	
121	1471	C14	台石			30.3	30.7	12.3	12500	
	1472	D13	台石			28.9	29.3	10.9	12800	
122	1473	C14	石錐	鍋山産黒曜石		1.75	1.4	0.3	0.3	
	1474	B14	石錐	鍋山産黒曜石		1.5	1.6	0.3	0.9	
	1475	D14	石錐	鍋山産黒曜石		3.85	1.7	0.55	2.8	
	1525	ⅠG-7Ⅱ	石錐	サヌカイト		2.4	1.9	0.4	1.6	
	1526	ⅠG-7Ⅱ	石錐	サヌカイト		1.6	1.8	0.3	0.6	
125	1527	ⅠG-7Ⅱ	石錐	鍋山産黒曜石		2.3	1.2	0.4	1.3	
	1528	ⅠG-7Ⅱ	石錐	鍋山産黒曜石		1.8	1.4	0.4	1.1	
	1529	ⅠG-7Ⅱ	石錐	鍋山産黒曜石		2.7	1.6	0.5	1.9	
	1530	ⅠG-7Ⅱ	石錐	鍋山産黒曜石		2.2	1.7	0.2	0.6	
	1531	ⅠG-7Ⅱ	石錐	サヌカイト		2.3	1.2	0.4	1.0	
	1532	ⅠG-7Ⅱ	石錐	鍋山産黒曜石		1.7	1.6	0.3	0.4	
	1585	C15/C16	石錐	鍋山産黒曜石		3.9	1.8	0.4	2.3	
	1586	D15	石錐	鍋山産黒曜石		2.3	1.5	0.4	1.0	
	1587	D15	石錐	鍋山産黒曜石		2.05	1.3	0.35	0.7	
	1588	C15	石錐	鍋山産黒曜石		2.1	1.8	0.45	1.4	
	1589	C15	石錐	鍋山産黒曜石		1.9	1.3	0.35	0.7	
	1600	C15	石錐	鍋山産黒曜石		2.3	1.8	0.4	1.0	
	1601	C15	石錐	鍋山産黒曜石		1.5	1.6	0.35	0.5	
	1602	C15	石錐	鍋山産黒曜石		1.8	1.05	0.3	0.6	
	1603	B15	石錐	サヌカイト		1.8	1.1	0.4	0.7	
131	1604	B15	石錐	鍋山産黒曜石		2.1	1.3	0.4	1.1	
	1605	B15	石錐	鍋山産黒曜石		2.5	1.3	0.3	0.6	
	1606	C15	石錐	鍋山産黒曜石		2.5	1.6	0.45	1.0	
	1607	C15	石錐	鍋山産黒曜石		2.1	1.35	0.4	1.2	
	1608	C15	石錐	鍋山産黒曜石		1.65	1.65	0.35	0.9	
	1609	C15	石錐	鍋山産黒曜石		1.3	2.0	0.35	0.9	
	1610	C15	石錐	鍋山産黒曜石		2.0	1.2	0.4	0.8	
	1611	B15	石錐	鍋山産黒曜石		3.1	1.4	0.5	1.8	
	1612	C15	石錐	鍋山産黒曜石		3.0	1.5	0.3	1.6	
	1613	C15	石錐	サヌカイト		2.9	1.5	0.5	2.0	
	1614	C15	石錐	鍋山産黒曜石		2.8	1.6	0.35	1.8	
	1615	B15	石錐	サヌカイト		2.1	1.3	0.5	1.5	
	1616	C15	石錐	鍋山産黒曜石		2.6	1.3	0.3	0.9	
	1617	B15	石錐	鍋山産黒曜石		2.4	1.2	0.3	0.7	
	1618	B15	石錐	サヌカイト		2.4	2.4	0.4	2.7	
	1619	B15	石錐	鍋山産黒曜石		1.9	1.2	0.4	1.0	
	1620	B15	石錐	鍋山産黒曜石		1.6	1.3	0.3	0.5	
	1621	B15	石錐	鍋山産黒曜石		1.6	1.8	0.6	1.5	
	1622	C15	石錐	鍋山産黒曜石		1.65	2.0	0.35	1.2	
	1623	C15	石錐	鍋山産黒曜石		1.7	1.2	0.3	0.7	
	1624	C15	石錐	鍋山産黒曜石		3.2	1.3	0.4	1.8	
132	1625	C15	石錐	サヌカイト		2.6	1.4	0.45	1.4	
	1626	C15	石錐	鍋山産黒曜石		2.4	1.5	0.25	1.1	
	1627	C15	石錐	鍋山産黒曜石		2.3	2.0	0.5	3.5	
	1628	C15	石錐	鍋山産黒曜石		1.3	1.25	0.35	0.3	
	1629	C15	石錐	鍋山産黒曜石		2.7	1.6	0.4	1.3	
	1630	C15	石錐	鍋山産黒曜石		2.05	1.3	0.25	0.7	
	1631	B15	石錐	サヌカイト		1.5	1.1	0.2	0.3	
	1632	B15	石錐			1.4	1.2	0.2	0.3	
	1633	C15	石錐/尖頭器	サヌカイト		2.1	2.0	0.6	4.0	
	1634	C15	石錐/尖頭器	鍋山産黒曜石		3.2	2.9	0.6	6.1	
	1635	C15	スクレイパー	鍋山産黒曜石		2.1	1.4	0.3	0.9	
	1636	C15	石錐	鍋山産黒曜石		2.3	1.5	0.4	1.1	
133	1637	C15	磨石			10.8	11.6	6.1	740	

岩鼻岩陰遺跡出土石器観察表⑨

掲載番号	遺物番号	調査区名	器種	石材	法量（括弧は残存値） 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
133	1638	C15	磨石		10.0	11.1	6.7	820	
	1639	C15	敲石		6.1	8.8	5.8	295.4	
	1640	C15	磨石		7.6	25.0	6.0	1020	
	1641	B15	敲石		26.8	34.7	5.8	12500	
	1642	C15	不明	角閃安山岩	35.5	45.3	15.1	35300	
	1643	C15	石棒	結晶凝灰質砂岩	2.0	1.4	0.3	0.7	
	1644	C15	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.2	1.65	0.4	0.9	
	1645	C15	石鏃	結晶凝灰質砂岩	1.8	1.35	0.3	0.5	
	1646	C15	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.8	2.2	0.3	1.3	
	1647	C15	石鏃	サスカイ	1.7	1.5	0.4	0.7	
	1648	C15	石鏃	結晶凝灰質砂岩	1.65	1.45	0.25	0.4	
	1649	C15	石鏃	結晶凝灰質砂岩	1.45	1.8	0.3	0.5	
	1650	D15	石鏃	結晶凝灰質砂岩	1.3	1.9	0.3	0.6	
	1651	C15	石鏃	結晶凝灰質砂岩	1.2	1.3	0.3	0.4	
134	1652	C15	石鏃	サスカイ	2.2	1.5	0.4	1.7	
	1653	D15	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.35	2.15	0.65	2.0	
	1654	C15	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.4	1.65	0.3	1.0	
	1655	C15	石鏃	サスカイ	2.6	1.7	0.5	1.5	
	1656	C15	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.15	1.35	0.35	1.3	
	1657	B15	スクレイパー	結晶凝灰質砂岩	3.9	2.5	0.75	3.5	
	1658	C15	磨石		10.5	9.1	5.6	580	
	1659	C15	磨石		9.0	7.8	5.7	430	
	1660	C15	磨石		13.0	10.2	6.3	1110	
135	1661	D15	台石		27.0	37.0	7.8	9600	
	1662	C15	台石		27.6	37.6	8.2	8500	
136	1663	C15	台石		37.7	9.6	5.8	20800	
	1664	C15	台石		32.7	37.4	11.5	30000	
137	1665	B15	スクレイパー	サスカイ	3.6	6.4	0.5	11.7	
	1666	B15	スクレイパー	サスカイ	7.2	11.8	1.4	65.2	
	1608	D16/D17	石棒	結晶凝灰質砂岩	1.1	1.1	0.4	0.4	
141	1609	C16/C17	石斧	黒曜石（西安丸産地）	2.05	1.8	0.3	0.6	
	1700	C16	石鏃	結晶凝灰質砂岩	1.9	1.73	0.45	1.1	
	1701	C16	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.1	1.45	0.3	0.6	
	1702	C16	石鏃	サスカイ	1.8	1.25	0.35	0.7	
	1703	D16	石鏃	結晶凝灰質砂岩	1.9	1.5	0.4	0.6	
	1704	C16	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.3	1.4	0.45	1.1	
	1705	C16	石鏃	結晶凝灰質砂岩	1.9	1.1	0.3	0.7	
	1706	C16	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.65	1.2	0.4	0.9	
	1707	C16	石鏃	結晶凝灰質砂岩	3.0	1.7	0.5	1.1	
	1708	C16	石鏃	結晶凝灰質砂岩	3.2	1.6	0.4	2.4	
	1709	C16	石鏃	結晶凝灰質砂岩	3.0	1.35	0.3	1.7	
	1710	C16	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.8	1.7	0.5	2.7	
	1711	C16	石鏃	結晶凝灰質砂岩	1.55	1.05	0.35	0.9	
	1712	C16	石鏃	結晶凝灰質砂岩	1.75	1.3	0.25	0.6	
	1713	C16	石鏃	結晶凝灰質砂岩	1.55	1.1	0.3	0.6	
	1714	C16	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.5	1.55	0.4	0.9	
	1715	C16	石鏃	サスカイ	2.9	1.9	0.4	2.5	
	1716	C16	石鏃	結晶凝灰質砂岩	1.95	1.6	0.3	0.9	
	1717	C16	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.25	1.25	0.45	1.1	
	1718	C16	石鏃	結晶凝灰質砂岩	3.1	1.3	0.4	1.4	
	1719	C16	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.8	1.5	0.4	1.7	
	1720	C16	石斧	サスカイ	3.65	1.5	0.5	2.5	
142	1721	C16	石鏃	結晶凝灰質砂岩	1.8	1.0	0.35	0.8	
	1722	C16	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.0	1.2	0.45	1.1	
	1723	C16/C17	石鏃	サスカイ	1.9	1.35	0.25	0.5	
	1724	C16/C17	石鏃	結晶凝灰質砂岩	1.45	1.1	0.3	0.4	
143	1725	C16	石斧	サスカイ	5.2	2.1	0.7	3.7	
	1726	C16	スクレイパー	サスカイ	4.1	2.7	0.3	5.1	
144	1727	D16	スクレイパー	サスカイ	3.2	7.3	0.9	15.4	
	1728	D16	磨石		9.4	13.0	9.0	1270.0	
145	1729	C16	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.4	1.75	0.4	1.1	
	1730	C16	石鏃	サスカイ	2.25	1.7	0.3	0.9	
	1731	C16/C17	石鏃	結晶凝灰質砂岩	1.6	1.8	0.3	0.6	
	1732	C16	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.7	1.5	0.3	0.8	
	1733	C16/C17	石鏃	サスカイ	2.0	1.5	0.35	0.8	
	1734	C16	石製品破片	結晶凝灰質砂岩	3.55	1.5	0.5	2.3	
	1735	C16/C17	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.2	1.5	0.35	0.8	
	1736	C16	石鏃	結晶凝灰質砂岩	1.8	1.2	0.3	0.6	
	1737	C16	石鏃	サスカイ	1.7	1.5	0.35	0.7	
	1738	D16	石鏃	サスカイ	2.9	2.5	0.5	1.6	
149	1779	D17/D18	石鏃	サスカイ	3.6	2.6	0.65	3.4	
	1780	C17	石鏃	結晶凝灰質砂岩	1.8	1.65	0.3	0.6	
	1761	C17/C18	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.9	1.45	0.4	0.6	
	1762	C17	石鏃	サスカイ	2.6	2.25	0.55	1.3	
	1763	C17	石鏃	サスカイ	2.4	2.4	0.4	1.4	
	1764	C17/C18	石鏃	頁岩石（外産入所産）	1.8	1.3	0.25	0.4	
	1765	C17	石鏃	サスカイ	2.15	1.35	0.25	0.6	
	1766	C17	石鏃	結晶凝灰質砂岩	1.9	1.65	0.4	1.2	
	1767	C17	石鏃	サスカイ	2.35	1.85	0.55	1.4	
	1768	C17	石鏃	結晶凝灰質砂岩	1.8	1.25	0.4	0.5	
	1769	C17	石鏃	結晶凝灰質砂岩	3.5	1.65	0.5	1.9	
	1770	C17	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.0	1.45	0.35	1.0	
	1771	C17	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.8	1.8	0.5	1.6	
	1772	C17	石鏃	結晶凝灰質砂岩	1.1	2.1	0.1	1.0	
150	1793	C17/C18	石鏃	サスカイ	2.2	1.1	0.4	0.8	
	1794	C17/C18	石鏃	サスカイ	1.85	1.1	0.3	0.6	
	1795	C17	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.15	1.1	0.4	1.0	
	1796	C17	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.1	1.65	0.4	1.2	
	1797	C17	剥片石器	結晶凝灰質砂岩	1.8	1.1	0.3	0.8	
	1798	C17	石鏃	サスカイ	2.1	1.2	0.3	0.8	
151	1799	C17	石鏃	サスカイ	2.4	1.5	0.4	0.6	

岩鼻岩陰遺跡出土石器観察表⑩

掲載番号	遺物番号	調査区名	器種	石材	法量（括弧は残存値） 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
152	1800	C17	磨石	角閃石安山岩	7.1	6.2	5.8	365.2	
153	1801	C7	台石	角閃輝石安山岩	15.1	31.7	4.2	300	
155	1814	C18	石鏃	結晶凝灰質砂岩	1.3	1.2	0.35	0.6	
	1815	D18	石鏃	結晶凝灰質砂岩	1.9	1.8	0.45	0.7	
	1816	D18	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.0	1.3	0.35	0.6	
156	1817	D19	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.6	2.0	0.6	2.2	
	1818	排土	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.3	1.7	0.45	1.3	
	1819	試掘	石鏃	結晶凝灰質砂岩	1.65	1.35	0.35	1.3	
	1820	排土	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.1	1.2	0.5	1.1	
	1821	排土	石鏃	結晶凝灰質砂岩	3.4	1.6	0.45	2.4	
158	1822	試掘	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.65	2.3	0.5	3.4	
	1823	SK003	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.7	1.7	0.45	1.9	
	1824	排土	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.35	1.3	0.3	0.7	
	1825	排土	石鏃	結晶凝灰質砂岩	2.35	1.15	0.3	0.7	
	1826	排土	石鏃	サスカイ	2.6	1.35	0.3	1.0	
	1827	SK003	石斧	サスカイ	4.8	4.5	0.7	16.0	

岩鼻岩陰遺跡出土玉類観察表

掲載番号	遺物番号	調査区名	器種	法量 長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	色調	石材	試料番号
146	1739	C16	勾玉	1.45	0.6	0.15	0.3	明緑灰色	滑石	SBK-002
	1740	C16	勾玉	1.15	0.65	—	0.4	明緑灰色	アルカリ長石	SBK-009
	1741	C16	勾玉	0.85	0.5	0.1	0.1	明緑色	アルカリ長石	SBK-006
	1742	C16	勾玉	0.8	0.4	0.1	—	明緑色	アルカリ長石	SBK-008
	1743	C16	勾玉	0.45	0.25	0.1	—	明緑色	アルカリ長石	SBK-003
	1744	C16	管玉	0.3	0.3	0.1	—	明緑色	アルカリ長石	SBK-015
	1745	C16	小丸	0.75	0.6	0.35	0.3	明緑灰色	アルカリ長石	SBK-005
	1746	C16	丸玉	0.4	0.35	0.2～0.35	0.2	明緑灰色	蛇紋	SBK-013
	1747	C16	勾玉	0.55	0.3	0.1	—	明緑色	アルカリ長石	SBK-001
	1748	C16	勾玉	0.45	0.5	0.1	0.1	明緑色	アルカリ長石	SBK-014
	1749	C16	勾玉	0.45	0.4	0.1	—	明緑色	アルカリ長石	SBK-011
	1750	C16	勾玉	0.6	0.35	0.1	0.1	明緑色	アルカリ長石	SBK-016
	1751	C16	勾玉	0.45	0.4	0.1	—	明緑色	アルカリ長石	SBK-017
	1752	C16	勾玉	0.6	0.3	0.1	—	明緑色	アルカリ長石	SBK-004
	1753	C16	勾玉	0.6	0.4	0.1	—	明緑色	アルカリ長石	SBK-010
	1754	C16	勾玉	0.45	0.3	0.1	—	明緑色	アルカリ長石	SBK-005
	1755	C16	勾玉	0.55	0.3	0.1	0.2	明緑色	アルカリ長石	SBK-007
	1756	C16	勾玉	0.45	0.3	0.1	0	明緑色	アルカリ長石	SBK-003
	1757	C16	赤玉？	0.45	0.4	—	—	暗灰色	蛇紋	SBK-012

写　真　図　版

岩鼻岩陰遺跡全景（南から）

岩鼻岩陰遺跡全景（東から）

岩鼻岩陰遺跡と周辺の地形（南から）

岩鼻岩陰遺跡と周辺の地形（北から）

南半（11～19区）完掘状況

北半（1～10区）完掘状況

調査前の状況

調査状況

篩作業

晩期集中部①
遺物出土状況

14区
焼土6と台石

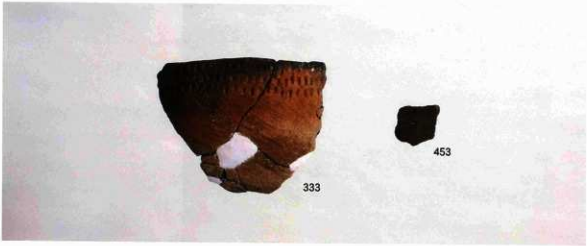
10区
焼土10

10区
焼土9

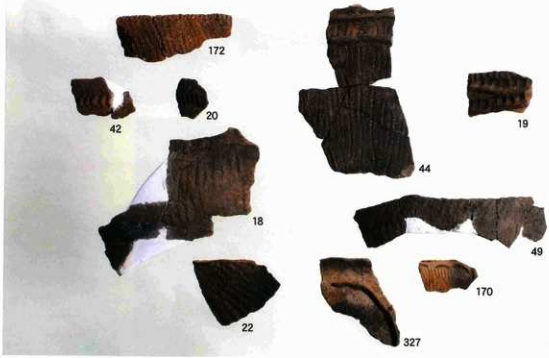
16区北側土層

1区北側土層

縄文時代前期

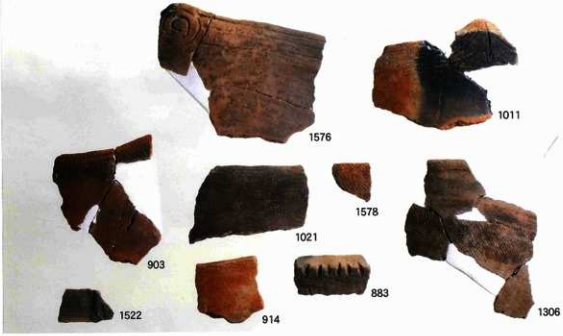


縄文時代中期船元式

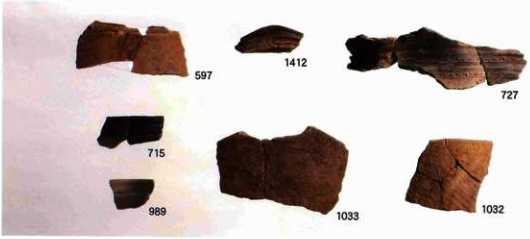


縄文時代後期前半

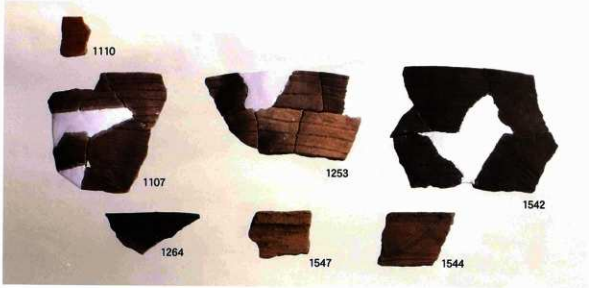
縄文時代後期石町式

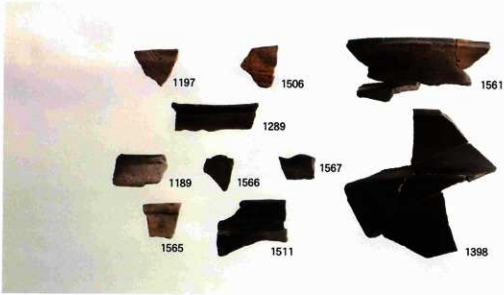


縄文時代後期西平式、三万田式



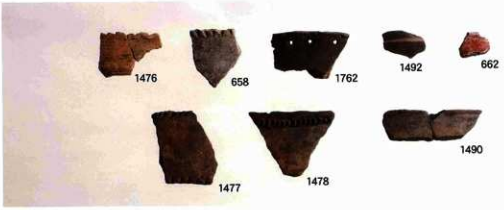
縄文時代晩期前半



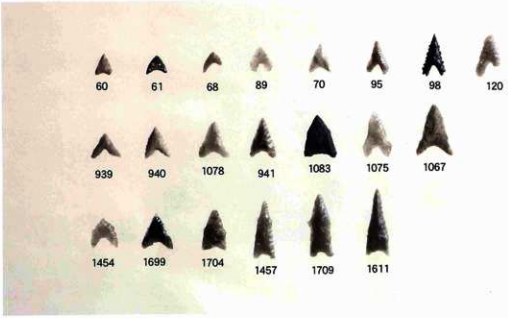


縄文時代晩期前半

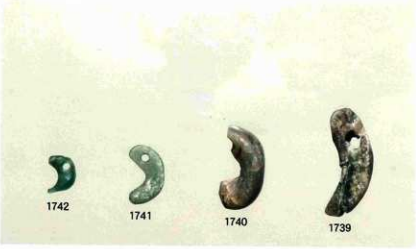
弥生時代早期



縄文時代石鏃（上段：中期　中段：後期　下段：晩期）

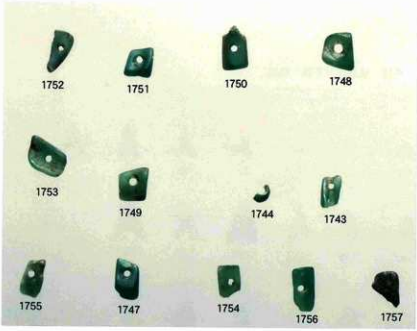


縄文時代石製装身具



勾玉

丸玉
小玉



管玉
垂飾

報告書抄録

ふ り が な	いわばないわかげいせき
書　　名	岩鼻岩陰遺跡
副 書 名	県道地蔵峠小田原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	(2)
シ リ ー ズ 名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第89集
編 著 者 名	西本豊弘　遠部慎　大坪志子　後藤一重
編 集 機 関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所　在　地	〒870－1113　大分市大字中判田1977　ＴＥＬ 097－597－5675
発 行 年 月 日	2016年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
いわばないわかげいせき 岩鼻岩陰遺跡	おおいたけんぶんごたかだし おおあざながいわやあざじめし 大分県豊後高田市 大字大岩屋字地主	209	193	33° 34′ 52″	131° 33′ 28″	120508 ～ 120920	260	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩鼻岩陰遺跡	集落	縄文・弥生・ 古墳・中世	立石遺構・ 土坑・焼土	縄文土器（前期、 中期、後期、晩期）・ 弥生土器(早期)・石鏃・ 石匙・獣骨	間口約40mを測る 大分県最大規模の 岩陰遺跡

要　約	岩鼻岩陰遺跡は、国東半島の中央部近くに位置する。桂川水系の長岩屋川右岸に形成されており、標高は約160mである。隣接して流れる長岩屋川の河床との比高差は、3～4mである。岩陰は東面して開口し、間口40m、高さ3～6mの規模をもつ。雨落ち線は奥壁から1～3.2mで、実際に岩陰として利用できる面積は約80㎡である。岩陰の北半では、本来、縄文時代前期～晩期及び弥生早期の包含層が形成されていたと思われるが、削平・攪乱が著しく、すべての包含層が残るのは一部のみである。南半では、岩盤が奥壁から急激に下がる。旧河道が奥壁まで及んでいたためと考えられ、この部分が利用可能になるのは、河道の埋没が進行した縄文時代後期後半以降のことである。縄文時代前期の遺物量は極めて少ない。中期には、2～3区にかけ遺物集中部がみられる。後期前半は、良好な包含層が残存しないが、後期後半の石町式段階には、8～10区と15区に遺物集中部が形成される。なかでも、8区の立石遺構（ＳＸ００４）は注目される。晩期前半には、12～17区にかけ遺物集中部が形成され、16区からはクロム白雲母製の勾玉や垂飾などが出土した。また、遺物において目立つのは石鏃で、全体で700本以上が出土した。このほか、多数の動物遺体も出土した。

岩鼻岩陰遺跡

県道地蔵峠小田原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第89集
平成28年3月31日

発　行　大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-0011 大分県大分市大字中判田字ビワノ門1977
TEL 097(597)5675

印刷所　株式会社プリメディア
〒874-0923 別府市新港町1番13号
TEL 0977(23)3288